明治四十一年七月一日發行

明治四十一年七月一日発行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇



第四年第十號

東京女子文壇社發行

（電話本局六百七番）

（振替口座壹七貳九番）

女子文壇第四年

七月一日發行

每號　皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ

本欄



▲口繪▼



第十號目次

第一増刊『文壇の花』は文壇界に高評を博せり

女子文壇　臨時増刊　懸賞募集

文壇の光

紙數大判二百五十頁

十月十五日　臨時増刊

投稿募集項目

○小說　▲第壹種▼（總假名付一行廿四字百五十行限）

○美文　▲第二種▼（一行二十四字七十行限）

○お伽噺　▲第三種▼（總假名付一行廿四字百行限）

○新體詩（總假名付二十行限）

○日記文（一行二十四字三十行限）

○書簡文（一行二十四字三十行限）

○論文（一行二十四字三十行限）

▲第四種▼

○短文（總假名付一行廿四字五行限）

○和歌（一首限）

○俳句（一句限）

○圖畫　人物　風景（縱横隨意二寸五分の三寸位）

（此スケッチ畫は可成鳫皮紙の様なる薄き日本紙を用ふると）

▲賞は番外一等より十等迄

▲投稿〆切期限　八月三十一日

（此日の午後十時迄到着を以て〆切る）

▲投稿規定は次の心得書に就て見よ

我が女子文壇の第二臨時増刊は『文壇の光』と題し『文壇の花』紙上に於て豫告したる如く。来る十月十五日に發刊すべし。募集の項目と懸賞方法は次の如し。苟も文字あるものは此好機を逸する勿れ。因に云ふ募集の各詩文の選評は凡て編輯局にて行ふと前の『文壇の花』に同じ。其公平懇切なるとは應募諸君の信じ給ふ處ならん。敢て傑作の投稿を勸誘す。

珍案懸賞贈品

第壹種
○天賞　金拾五圓
○地賞　金八圓
○人賞　金五圓

第貳種
○天賞　金拾圓
○地賞　金五圓
○人賞　金參圓

（正金を呈す）

第參種
○天賞　絹反物（價格七圓）
○地賞　舶來更紗（同　四圓）
○人賞　絹ハンカチ（同　貳圓）

第四種
○天賞　絹ショール（價格五圓）
○地賞　手提袋（同　參圓）
○人賞　机掛（同　壹圓）

〔番外〕
一等より十等まで
（價格五十錢以上貳圓迄）

▲投稿の心得▼

○投稿は女子にして一人一章又は一首限りとす。

○題と文體とは各自の隨意なり。

○投稿用紙は半紙又は原稿紙に限る。字體は楷書、假名は平假名を用ふ、但和歌俳句は一首或は一句を半紙半枚に認むべし。

○投稿は各種類を異にする毎に必ず別の用紙に認め、題の上に各その項目を書し、題下には必ず住所姓名を明記すべし。

○投稿は句點を施すべし、圏點は附すべからず。

○投稿の封筒は女子文壇社編輯局宛、『文壇の光原稿』の文字を傍書すべし但各種取交ぜ開封に差出せば三十匁迄郵税二錢也、但他の用事の文句を記す可らず。

○投稿は必ず自家の作物たるべきこと若し剽窃の疑あるものは入賞無効とす

○入賞者は寫眞を發表前に通知を受けたる時は差支なき限り送付あれ用濟の上返送す。

○投稿は一切返附せず又不足未納税は受取らず。但收入印紙を用ふ可らず。

○入賞者へ懸賞品送付は發表一ケ月後たること。

（以上）

發行所（投稿受付所）

東京市京橋區中橋大鋸町

（電話本局六〇七番）

女子文壇社

愛兒



大江原色版部製版

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

本號には當世流行名媛栞の珍景物あり

其他口繪には愛の星(五令孃)凌霄花(七秀才)等數葉添

(毎月壹回)

新文林

(壹日發行)

第壹卷第四號七月一日發行

定價壹冊金拾錢郵税壹錢六冊郵税共割引金六拾錢拾貳冊同金壹圓貳拾錢

(本誌寄稿家イロハ順)文學博士芳賀矢一、德富蘇峰、遲塚麗水、小栗風葉、大倉桃郎、渡邊光風、鵜澤四丁、山岸荷葉、眞山青果、鮫島大浪、島村抱月、樋口二葉等を始め文壇詩壇の諸名家數十名有り

卷頭作品

▲昔の宿(小說)……細越夏村
◎黒き森(短歌)……中尾紫川
▲ふるさと(新詩)……蘆谷蘆村
◎瓦(小說)……遠藤早泉
▲新京の記(記文)……石丸紫水
◎替へ玉(脚本)……池上草香
▲花の旅(紀行)……遲塚麗水
◎金箭社詠草(短歌)……金箭社同人
▲回顧(美文)……峯村白影

全國秀才才媛諸君

投稿三千餘章

掲載種目

●論評文●消息文●短歌●短篇小說
●敍事文●新體詩●漢詩●文友詩友
●抒情文●新川柳●俳句●文士評判
●小品文●雲中語●俚謠●諸作批評

選者の細評を加ふ

毎號懸賞各種作品募集 賞金參圓 最低卅錢 當選者卅名

詳細規定本誌に有

(乙の一)

發賣所 東京市神田三河町一丁目十九番地 【振替口座番號三八一五番】 博報堂書店

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

「従来世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち、重曹マフ子シヤ、苦味劑の如き一時おさへムチスカシ的措式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全に消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割増し

新輸入 美容劑 肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を實ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓八拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ふれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



根治確證 新發見藥 わきが 腋臭

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

(乙の三)

明治四十一年徴兵適齢者は勿論將來陸軍に出身せんと欲する者の必讀書

麻布聯隊區司令官 陸軍少將 龜岡泰辰校閲 軍事普及會編輯 四十一年式

改正 徴兵問答

附 入營の準備 兵事願届書式 改正徴兵令 一年志願兵條例

正價卅錢 郵税四錢

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著 増訂七版

文鑑 千草の錦

菊判和裝 定價七拾錢 郵税拾錢

此書は中邨秋香先生が三十餘年間讀書の餘暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄錄せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論説、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作者の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり。

新編書簡文例 (男子用)

總クロース金字入 定價五拾錢 郵税六錢

新編女子書簡文法式

洋裝美本 定價六拾錢 郵税六錢

書簡文の法式男女に別ちて大成せるものは古來未だ嘗て有らず蓋し書簡に法式のなからざるは尙人に禮儀なく書簡に法式なからんか其人如何に貴しと雖又如何に富めりと雖一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、中邨秋香先生深くこゝに感ぜられ即ち男女に就て各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる、此法式は元來封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて種々の段階を分つが如き煩を避け今日の現状に依り舊新を對照して以て時の宜に從ひ適當の式を設けられしものなり故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論苟も筆を書簡に把る者は瞬時も座右を放つべからざる要書なり

宮中御歌所寄人 學習院女子部敎授 中邨秋香先生作 小野鵞堂先生書

新編手紙 (男子用)

木版半紙摺 無類の美本 男女各一冊 定價四拾錢 郵税四錢

女子消息文の手ほどき

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文法式 (男子用)

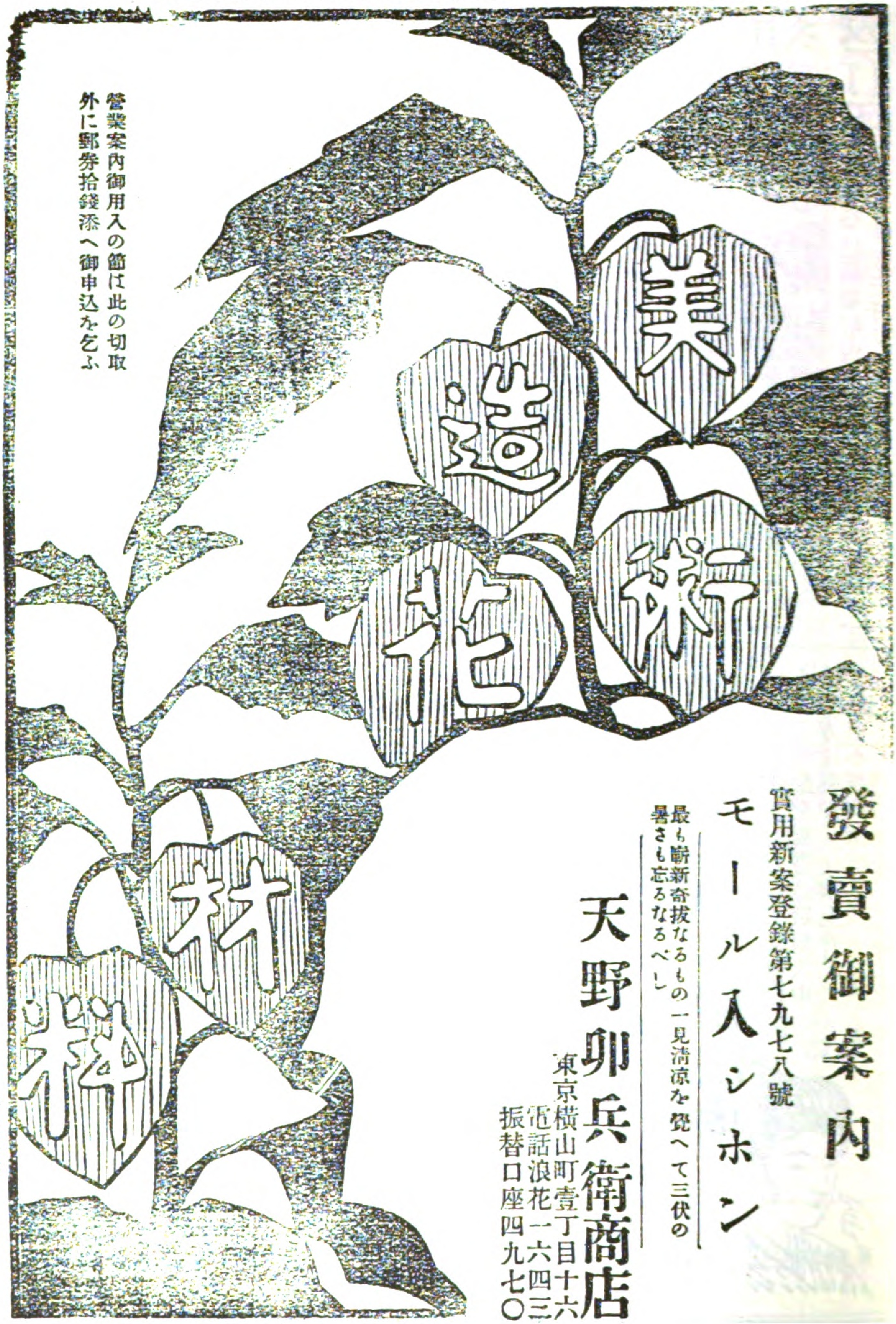
新編女子書簡文例

木版半紙摺 頗高尙優美 男女各一冊 定價六拾錢 郵税六錢

本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕になりしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきなり

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路六番 振替貯金口座四千百〇九番 前川文榮閣

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ




フランス製
ケーバ香水
全世界を通じて
最新流行品
本品は現今貴婦人
紳士方の愛用品
「フランス」上流社會は
ケーバ香水の高尙なる
匂を愛せらる
定價 大瓶 金壹圓
小瓶 金廿五錢
化粧品直輸出入商
東京日本橋區橘町二丁目
竹間商店
電話浪花一六一四番

誌友面影（十一）



（在韓國）野津久美子



（奧州）小野寺ます子



（岩代）佐藤靜花



（高知）沼田喜子



（福井）平田きぬ子



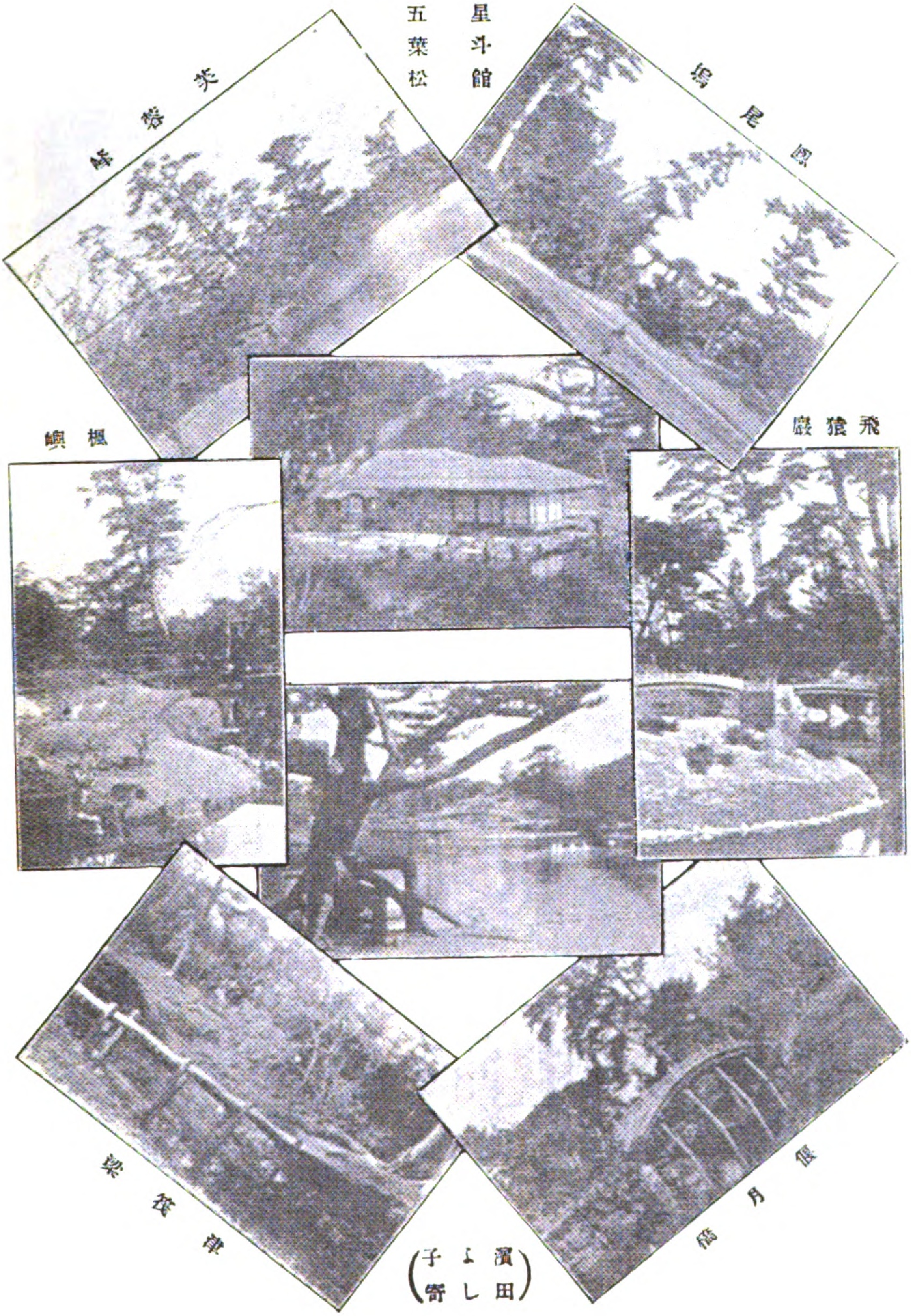
（在布哇）上土井定子



（備後）園田憲子

續々お寫眞寄送を願ます、用濟の上お返し申します

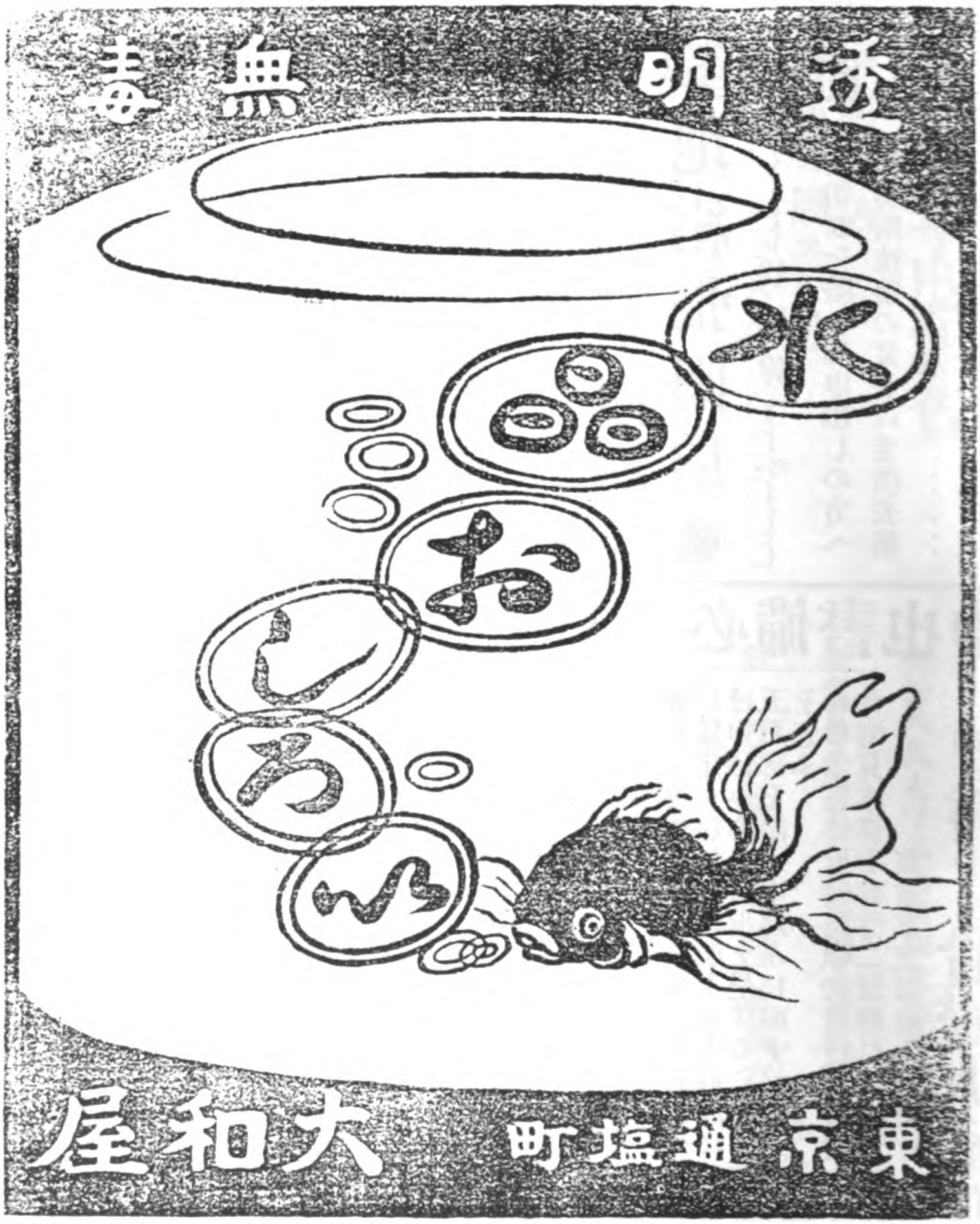
高松栗林公園八景（讃岐）



星斗館
五葉松
芙蓉峰
鳳尾塢
楓嶼
飛猿巖
津筏梁
偃月橋

（濱田よし子寄）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



第貳拾五回年度報告

貸借對照表

借方　負債ニ屬スル分

一株金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇円
一諸積立金	二六七、一九二・二〇〇
一預金及保信金	七一、四四八・四三一
一得意先支拂手形及未拂金	八七八、三七一・六四五
一消費稅金	五五、七〇四・八九〇
一前季繰越金	一八、九九〇・八二九
一當半季利益金	一八七、八一〇・七八五
合計金	三、四七九、五一八・七八〇

貸方　資産ニ屬スル分

一新株未拂込金	五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一不動產、器械、及什器	一、〇四一、三七七・〇四三
一石炭、需用品及備品在高	六四、六三七・一〇四
一原料、仕掛物及屑物在高	一、一三五、四〇九・四五二
一製品及製品送荷在	一一三、六一六・二三〇
一約定濟製品在高	一二七、六九七・一一〇
一未收入金及假拂金	四五一、九四二・六九八
一職工貸金	三八、六〇九・二三五
一銀行當座預金及現金	三、七二九・九〇八
一有價證券	二、五〇〇・〇〇〇
合計金	三、四七九、五一八・七八〇

利益金處分

一金拾八萬七千八百拾圓七拾八錢五厘　當半季利益金
一金壹萬八千九百九拾圓八拾貳錢五厘　前季繰越利益金
計　金貳拾萬六千八百〇壹圓六拾壹錢四厘
內
金參萬圓也　器械及建物代消却
金壹萬貳千圓也　法定準備金
金壹萬貳千圓也　役員賞與金
金六萬圓也（舊株一株ニ付金參圓即年壹割貳步）
金貳萬貳千五百圓（新株一株ニ付壹圓拾貳錢五厘即チ年壹割貳步）　同上　株主配當金
金七萬參百壹圓六拾壹錢四厘　次期繰越金

右之通リ候也
明治四十一年六月

東京モスリン紡織株式會社
取締役會長　杉村甚兵衛
專務取締役　端善次郎
取締役　山崎作次郎

右檢查候處相違無之候也
監查役　坂本金之助
監查役　人見新助
監查役　金子良吉

誌友面影（十二）

(遠江) 黒田しげ子



(靜岡) 若狹蝶子



(陸前) 佐々木美津子



(靜岡) 速水きよ子

(靜岡) 清水きよ子

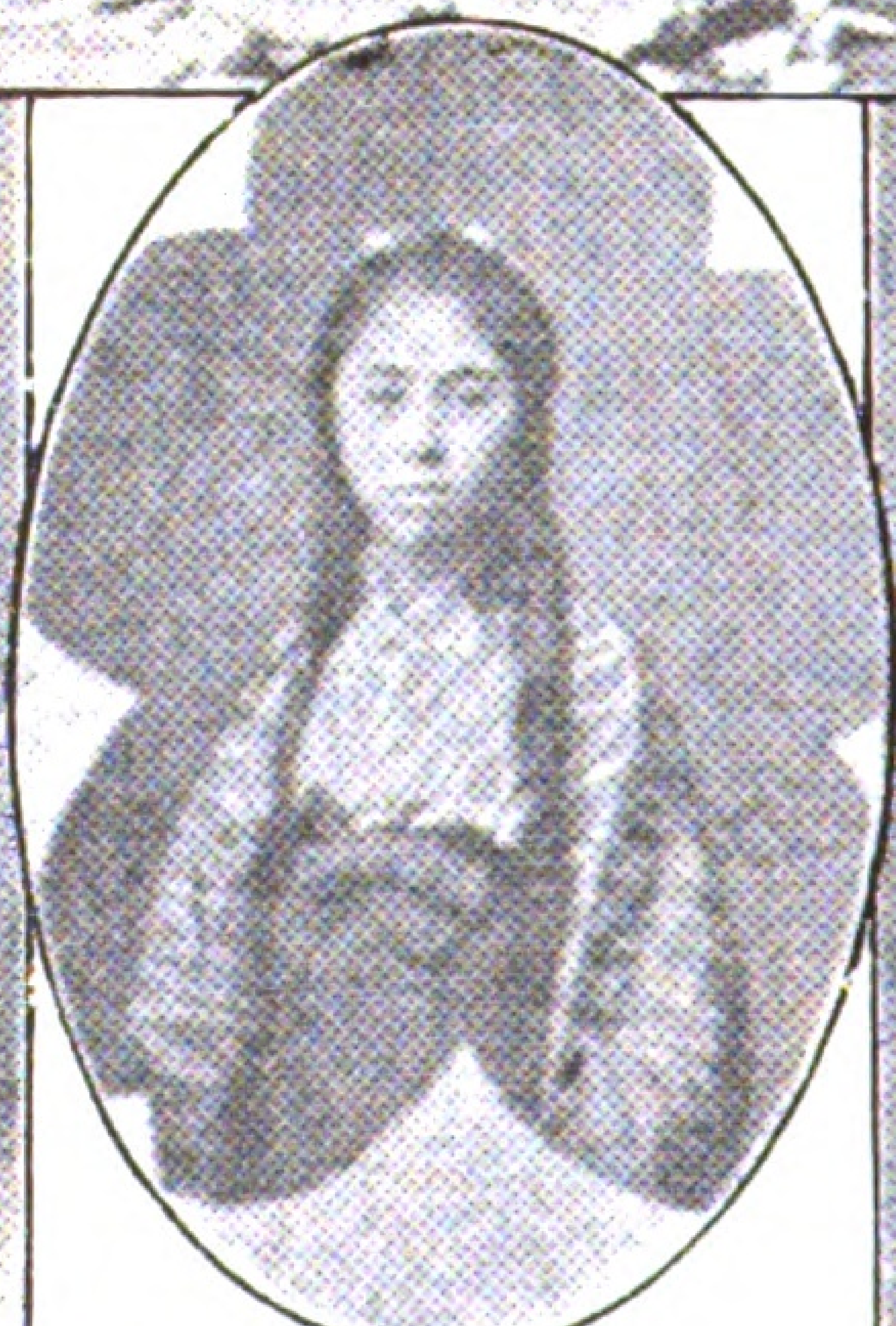


(神戸市) 寺田花子



(大阪府) 山口直子





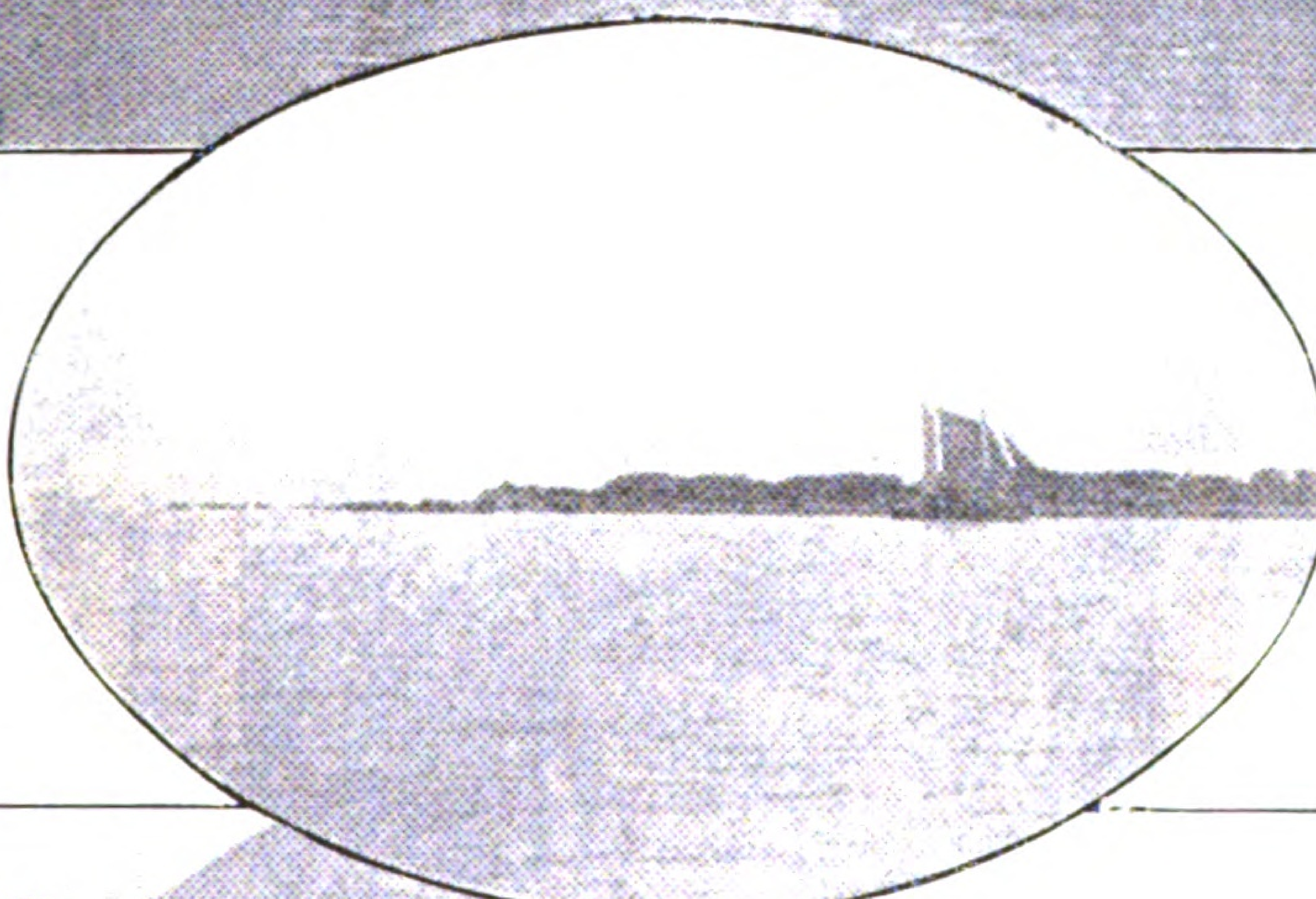
(上總) 森ふみ子

沼津千本濱より富士山を望む



（青木靜山寄）

三保の松原



（川畑はな子寄）



（渡邊とよ子寄）

三島沼津間にあるアイツポの瀧

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會

會員募集

講義録は何時にても一號より送る

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい。

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ケ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい躰裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ケ年完結とす

◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子高等師範學校教授文學士下田次郎先生著
女學校用 教育學 全二冊（文部省檢定濟）定價金五拾五錢 送料金六錢

日高秩父先生著
中等習字帳 全三冊（同上）上中下各十三錢 送料各金貳錢

大宮兵馬先生著
中等日本文典 全（同上）定價金五拾五錢 送料金八錢

小林萬吾先生編
中等習畫帳 全八冊（同上）一、二、各貳拾錢三、四各廿貳錢五、六、各二拾四錢七、八、各參拾錢宛 送料一冊金貳錢

宮森麻太郎先生著
イージーレッスンイングランマー アンドコンポジション 全（同上）定價金五拾五錢 送料金六錢

宮森麻太郎先生著
モーアレッスンイングランマー アンドコンポジション 全二冊（同上）定價一金五拾五錢 二金六拾錢 送料各金六錢

川村理助先生著
高等女學校用 生理衞生新教科書 全（同上）定價金五拾五錢 送料金六錢

東京府第一高等女學校教諭市川源三先生著
高等女學校用 教育學教科書 全（同上）定價金五拾五錢 送料金六錢

市川源三、利根川與作兩先生著
高等女學校用 國史教科書 全二冊（同上）定價各金五拾錢 送料各金六錢

川村理助先生著
高等女學校用 動物學新教科書 全（同上）定價金五拾錢 送料金六錢

川村理助先生著
高等女學校用 植物學新教科書 全（同上）定價金五拾錢 送料金六錢

阿多廣介先生
鬮田熊先生編纂◎明治三十八年二月文部省檢定濟
女子補習讀本 菊判大和綴美本 定價（第一金廿五錢 第二金參拾錢）郵税壹冊金四錢

前共立女子職業學校刺繡主任教授
學習院女學部教授木邨仲子女史編
刺繡教科書 全一冊 定價金五拾五錢 送料金六錢

農商務省水產局長兼水產講習所長牧朴眞君序
水產講習所監事松原新之助君閲
水產講習所技手石田撤郎君著
水產製造論 全 菊版總クロース美本 紙數三百五十頁 挿畫四十三個 定價金壹圓貳拾錢 郵税金拾錢

東京美術學校長正木直彦君序文
同校教授島田佳矣
同校卒業生野口俊尾兩先生共著
女子技藝 編物模樣圖案 全五冊 石版極彩色 大和綴美本
定價（◎松の巻金四拾錢◎櫻の巻◎藤の巻各金五拾錢◎竹の巻◎梅の巻各金五拾五錢）郵税各四錢

文部省體操遊戲取調委員
井口あぐり 可兒德 川瀨元九郎
高島平三郎 坪井玄道 諸先生共著
體育の理論及實際 全 總クロース 菊版五百餘頁 正價金壹圓參拾錢 郵税金拾錢

高等師範學校教授文學士 松本孝次郎先生著
家庭に於ける兒童教育 全 定價金五拾五錢 送料金八錢

發行所 東京市京橋區築地二丁目 振替貯金口座壹壹七八番 株式會社 國光社
關西賣捌所 大阪市東區北久太郎町 合資會社 積文社 ｜ 關東賣捌所 東京堂、須原屋、東海堂、天寶閣、巨明堂、春祥堂、至誠堂、上田屋、北隆館、池田榮進舘

有効保險 前代未發

秘傳奇術

全壹冊正價郵税共參拾九錢▲郵券代用は四拾九錢封送の事

(目錄大要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰門の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顏クリーム製造法●音聲を淸良にする法●齒痛即治藥製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染る法●毛髪の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ピットル酒製法●夏日室內を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●水を即時製造する法●百年長壽の一奇法●生涯百病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の皺婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盗人を見顯はす神術●女に惚れらるゝ藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女をなびかす藥法●堅き女の氣を狂はす藥法●陰莖を長大にする藥法●そばかす必治法●女を閨屋にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を發せしむる法●把膣力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑字夜光の奇術●老人終身皺取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする內服劑新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生ける鯉を遠國へ送る法●脹滿を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●酒味の損じたるを直す法●淋病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髪を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髪豫防新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを抜く新法●乳の出る妙藥●陰部の疼痔治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●毒酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易整顔術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す(合計壹百四十法あり)着金即刻送本す

東京神田區五軒町拾九番地

專賣元 日新館商店

生殖機病特効新劑……(獨逸新輸入藥)

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共壹圓九十錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學敎授スヒーゲル氏の發見に係る男女**生殖機不能**即ち**陰萎病**陽物無力**腎虚神經衰弱**遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰無力生殖虚弱等手淫に起因する諸病早老者精液無精蟲缺乏不姙娠冷症**快美**減少及び**短小者**等に用ひ輕症は四五劑重症は八九劑慢性難症は拾參劑にて根治の目的を達せしむるに天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力を増進**し生殖器を強健に**勃興**し**淫慾**を著しく**發動**せしめ人生の最大**快樂**を得んと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる誇大奇言を臚列する內地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓效は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

輸入一手專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は**廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日**目に必ず美麗に除去すること**保險附**新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模様を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

世界唯一 麻病消渇の根治新薬

麻滅(りんめつ)

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して麻病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず醫して根底根治するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効より有害の姑息藥と異なり奇効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價 壹劑壹圓拾錢 特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割増しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げんに、皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ

(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む)

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

癩病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病稈狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の顯著峻烈、患者よ百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調製せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す、藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製分拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

梅毒根治新劑

本劑(藥名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の根治 ばい毒特効の新藥なり故に黴毒及黴毒に關係して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。痳毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓って根治するを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割増しの事

●以上二藥專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

眞正極秘 粋珍書案内

望の人郵券四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絕快絕眞に粋士必讀の珍書案内

申込所 東京市下谷區西黒門町廿番地 東雲堂書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

健全なる精神は健全なる頭腦に宿るとは萬古不動の明言なり

レーベン

レーベンは臭素加里を主劑としたるにあらず故に服用に當りて其量を增減するの要なく且つ心臟を害することなし

レーベンは神經系統に鎮靜作用を呈するが故に神經性諸病に最も適良なるものとす

レーベンは鎮痙藥特に婦人の鎮痙藥としてヒステリー症に對し特異の効を奏す

レーベンは神經性不眠症酒客譫忘に催眠藥となり殊に恐るべき男女情慾の興奮を佳良にするに偉大の効を奏し健胃作用を有する等綿密なる注意を拂ひたる藥物なり

要するにレーベンは腦神經衰弱ヒステリー症に對し最も卓絶なる効力を具備せる良藥にして現世に於て殆んど問然するところなき絶好の藥物たるを斷言するに躊躇せざるなり

從五位勳三等　醫學士　森　友道
海軍軍醫少監　從五位　日　向　次　作
腦神經系統專門　醫學士　森　識

東洋唯一時事新報を初め報知新聞、毎日電報、國民新聞、都新聞、日本、東亞新報、東京藥事、其他帝都の大新聞を初め各地の新聞は筆を揃へて社會に紹介せり、曰く、近時社會の狀態一變し精神的智識の競爭時代とはなりぬ、而して腦神經衰弱患者の增加せるは著しき事實にして殊に現時學生の大半は輕微ながらも本病患者なり、醫學士常持爲治氏は本病々理の蘊奧を極め山海大氣の利用に依る自然療法の必要を稱へ終にレーベンなる新藥を創製せられ、斯業界の有力家(中南)の手に依りて社會に發表せらる云々と如何にレーベンが社會の各階級に偉大なる信用を博しつゝあるかを知るべし

若し本劑の内容を知らんと欲せば送料二錢送れ、説明書と養生法とを進上



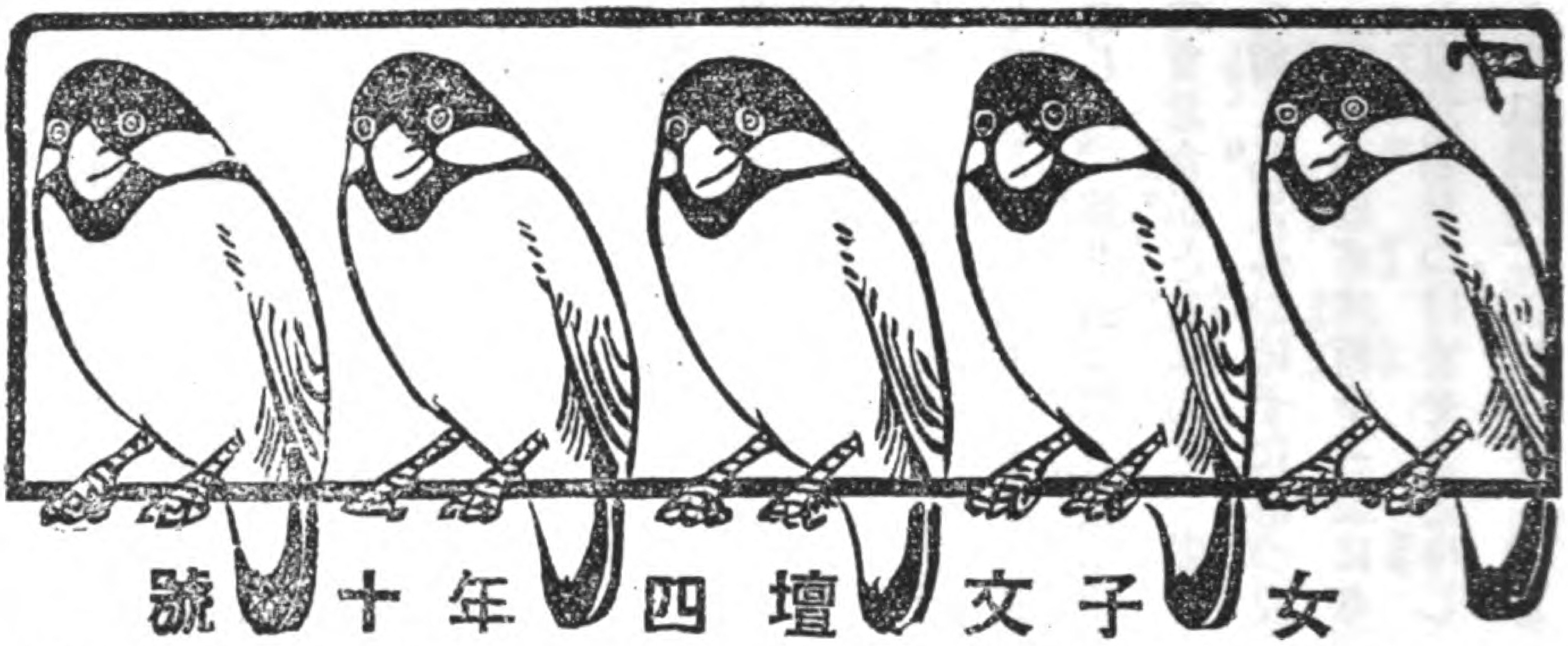
藥効　腦神經衰弱ヒステリー腦充血、陰萎遺精貧血等の腦病神經衰弱諸症の最良最新發見劑也

藥價

八百錠入	五圓五拾錢
四百錠入	參圓
二百錠入	壹圓六拾錢
壹百錠入	八拾五錢
全國無郵税	

東京市京橋區銀座弓町廿二番地
弘濟藥院藥品部
電話新橋三〇八九番
貯金口座七七七七番

レーベンは醫界空前の成功 近世絶好の腦神經衰弱療法



女子文壇　四年十號

紀元二五六八年　（明治四十一年七月一日發行）　西暦1908

強者たれ

現代ほど激しく人心を刺撃する時はない、男子は兎もあれ、弱き者よ、汝の名は女なりと言はれる女の身に取りては、此激しい刺撃に堪へかねるのは當然です。刺撃と言つても善い意味の刺撃もあり、惡い意味の刺撃もあり、善い刺撃ばかり受けて居れば可いやうなもの〻、世間は然う出來て居らぬ、惡い意味の刺撃もなか／＼激しく、所謂弱き者が弱くなつて了うのは其點に存して居る。一寸例を引くと、新聞の三面記事を讀んでも、性慾を刺撃するやうな文字が皮肉に使はれてある、表面は惡い事を誡めてあるやうで、世間を知らぬ者には惡い事を知らせるやうにも見える、雜誌の記事にもいかゞはしいものは多い、小說でも決して善い意味の刺撃ばかり與へない、其他見るもの、聞くもの、誇大的で、挑發的で、投機的で、眩燿的で、何の方面にも健實の分子は少い。然れば斯う云ふ時勢に立つて、誤らない方向を取つて行かうとするには、何うしても弱き者ではいけない、強き者にならねばならぬ、少しの刺撃には誘惑されない心掛が第一です、刺撃される度に、心を動かして居た日には、憐むべき犧牲になつて了ひます、犧牲になつたからとて、誰も同情して呉る者はない、初めより強き者になつて刺撃を受けても、惡い方へ心を動かさない用意をしてゐねばなりません。

七月（大）
日曜　五日　十二日　十九日　廿六日
盂蘭盆　十三日
土用　二十日
暑中休暇
海水浴始まる

名流婦人の處女時代

免狀一枚も持ぬ教育家

矢島楫子

私は天保五年の四月に生れましたので、數へ齡の七十六かと思ひます、藩は熊本でございました、同胞は澤山ございまして、九人の中、八人は皆成人いたしました、私は八人の中の七番目でございまして、男と申しますと兄が獨り限りて、あとは皆女の姉妹でございました、然う云ふ譯で私が生れました時などはオヤまたまた女かと言ふので、家でも餘り顧みませず、生れて暫く名さへつけずにあつたのでございます、私から三番目の姉て其頃十一二になつてゐたのが、可憐だから私が名をつけませうと申して、かつと云ふ名をつけてくれたのてございます、それが私の初めの名てございます。

學問と申しました處で、御承知でもございませうが其頃は別に學校のやうなものもございませんし、御殿女中が下つてから讀物を教へるとか、醫師とか坊さんとかゞ子供を集めて、書物を教へる位のことて別に學問を教はる處もございませんてした、殊に私の家ては姉妹が皆家事の手傳ひをいたしまして、それが肝要の仕事てございました、晝は勿論、夜分になりましても十匁の綿を績がないと、書を讀むとか、外の事は出來ませんてした、絲車て綿を績いて絲にするのてございます、絲績ぎが濟むと行燈の傍へ參りまして、論語や孟子の四書、小學などを父兄に教はりました、教はるのも讀方だけて、講釋して貰ふたのてはございません、けれども幾度となく讀み返す間に自然と意味も分つて來るやうになりました、さき申します通り吾家では女の姉妹が皆家事に働きますので、姉妹揃つて一つの書物を教はると云ふ譯にも參りませんので、いつも私が教はつた處を、又姉さんや妹に傳へるのてございまし

た、漢籍の外に和歌も習ひました、母は百人一首や古今集などを寫してくれまして、銘々に授けてくれました、最も百人一首などは口おぼえに覺えて了ひまして、座つて習つたのではございませんけれど、能く暗誦いたしました、私の十四五歳の時分は右に言ふやうな風で、極く僅の時間に家庭で學問を致しましたので、大方は家事に努めました、蠶も養ひました、麻も績ぎました、蠶からは羽二重を織りまして家内が銘々一枚宛の衣料を作りました、麻からは夏着る縮の衣料を一枚宛作りました、皆私等が母を助けて作つたのでございます。

それから後ち私は一旦家庭の人となりましたが、都合て又矢島に復籍いたしまして、家に居りました、世は御維新になり、兄は東京に參つて居りましたが、大病に罹りました、其頃私は東京に出たい志望がございまして兄の看病かた〳〵出京を思ひ立ちました、九州から東京まで女の一人旅は險呑だと申されまして、家では容易に許しませんでしたが、東京までは飛脚船が通ひまして、それに乗るに二十兩の旅費さへあれば、來られるのでございますから、強て其お金を出して貰ひまして東京へ參りました、左樣、それは明治五年の二月でございましたらう、參つて見ますと、兄は裏猿樂町の大きな屋敷に住まつてゐまして、書生も十人許り居りますし、下女なども居りましたが、家事が整ひませんで大分負債などが出來て居りまして、先づ其整理やら、兄の看病やらに心をつかひました。さうかうする中に小學校令が發布されまして、小學教育の發芽が出來ました、當局者も差當り小學教員から養成してかゝらねばならぬと云ふ始末で、其養成所のやうなものが開かれたのでございます、私も志願して其處に入りました、何分四十歳を越えた女が小學校の先生を志願したのでございますから、其處でも懇篤に敎へて貰ひますし、自分も筆算の加減乗除などから初めると云ふので、隨分骨が折れましたけれど、新しい學問に身を入れました。其頃何にても西洋の學問が流行まして、小學校の讀本も西洋のものを飜譯して讀ませますし、

皆さんは洋行をなさいますし、私も西洋の事情に通じなければならぬと思ひますにつけ、第一に必要を感じたのは英語でございます。

小學校の生徒にも英語を教へたら好からうと思ひましたけれど、教へる先生が英語を知らないのでございますから、教員からして英語を學ばねばならぬのでございます、未だ英語を教へる學校も有りませんでしたが、私も何うかして學びたいと思ふて居りました。

今一つ英語の必要を感じましたのは、是は一寸したことでございますが、私の知人で洋行なさつた方が英語の本を澤山お持になり、虫干をするに場所がないから、室を貸してくれないかとのお話で、幸ひ屋敷は廣うございましたから、さアお易い御用ですと室をお貸し申しました、私も澤山の英語の本を見ましたが、悲い事に一字も讀めませんから、表題すら分りません、何地から開て好いやら、何地が上やら下やら、本の並べ方すら分らないので御座ますもの、是は口惜い事だ、何でも英語を學ばなければならないと存じました。

方々英語を習ふ處を探して居ります内に、中村敬宇さんの處で、西洋人が英語を教へると聞きまして參りますと、奥様も、お孃様も學生になつて、お習ひなさると云ふ事で、私のやうな年齢を取つたものでも習へるでせうかと聞きますと、いくら年齢を取つても心掛一つで習ひかけた以上は止めさへしなければ成功すると仰いましたので、お頼みして學ぶことになりましたが、間もなく天然痘の流行の爲に其處も閉さねばならぬやうな仕義になりました。

以來、私は自分に學問はありませんけれど、女子には教育を授けねばならぬ、英語の力をつけねばならぬと深く感じまして、又自分で學校を起して思ふやうに教育をして見たいと存じまして、斯う云ふ風になりました、勿論他樣と協力して今日に及びました。

それで私の修學と申しましても、右に云ふやうな次第で、一つの學校にも入學したのでありませんから、一枚の免狀も持ちませねば、一度も學校の月謝と云ふものを收めたことがありません。

閨秀作家に望む

生田長江

讀者諸姉の前ではあるが、遠慮のないことを申上げる。在來の文學と云ふものは、大低皆男子中心の文學であつた。

描かれたる人物は、男にせよ、女にせよ、男の見たる男女である。作の上に現はれたる戀愛觀は、やがて男の戀愛觀である。人生のあらゆる事業に對する見解が、大低みな男の經驗と觀察とを基礎にしたものである。

在來の文學にも、婦人の作家と云ふものがないではなかつた。しかも、その偶ま現はれる婦人の作家が、大低は皆男性作家の模倣をしたのである。兩性の描寫も、戀愛に對する考も、その他人生諸般の事物に對する見方が、殆んど凡べて、男性作家の踏襲であつた。讀者、鑑賞家の側から云つて見ても、之は巧い、あれは拙いをきめるものはまづ男子で、婦人はたゞおとなしく其後に附いて行く。古來の名著傑作と云はるゝやうなのは、つまり男子によつてその意義を決定されたもの、婦人は實際其評價に與つて居ないのだ。

自然派の小說などと云ふことの、やかましくなつて居る世の中ではあるが、私はセクスピアやゲエテのかいたものを、今でもやつぱり尊敬し、また愛讀する。その中でもセクスピアの『ハムレット』や、ゲエテの『ファウスト』などは、たまらなく好きなのである。

ところで、何故にさうまで『ハムレット』が好きかと聞かれると、私は憚りもなくお答へする。オフィリアと云ふ女が居るからだと。オフィリア、オフィリア、何と云ふなつかしい名前であらう。オフィリア、オフィリア、オフィリアと、かうしてたゞその名を繰返す丈けても、私の耳には、絕妙の音樂のやうに響く。實にこのオフィリアが居るからである。『尼寺へ行け』とハムレットから言はれるオフィリア、氣違になつて歌を歌ふオフィリアに逢たいからである。ゲエテの『ファ

ウスト』も、何故にさうまで好きかときかれると、おなじくまた、グレチヘンが居るからだと答へなければならぬ。

しかし、われ〳〵は男子である。男子ならぬ讀者諸姉に、あのオフィリアやグレチヘンの慕はしさが、面白味が、ひとしく感得されやうとは信じられぬ。それが信じられぬとすれば、凡べて『ハムレット』や、『ファウスト』や、特に男子としての見地より興味を惹く作品の價値が、婦人からも同樣に認められやうとは思へないのである。

私は今現に、或る女學校で『エルテルのわづらひ』を講じて居る。生徒諸姉も面白いと云ふ。しかし生徒諸姉のと、われ〳〵男子のとは、その面白いやうがだいぶ異ふかと思ふ。可哀相だと思つて同情する塲合は、まづ〳〵同じと見ても好い。もし自分があの境遇に居たならばと思ふとき、男子はさながらに自分をエルテルとして見られるのに對し、婦人は其性の差別を超越して、シャロットを男と見立て、エルテルを女と見立てなければならぬ。さうすると小説全體の味が、餘程變つたものになりはすまいか。

『不如歸』の浪子なども、其當時誰も泣かされたものである。今でもお恥しいわけだが、芝居で見ると私共も泣く。誠に可哀相だと思ふからである。但し可哀相だと思ふ丈けのことゝて、自分があゝなつたらとは、私共決して思はぬ。さう思つて泣くのは婦人ばかりである。一口に云ふと、男子は自分を川島武男に擬して目を濕ませ、婦人は夫人浪子になつたつもりで手布をしぼるのだ。

かやうに、或る作物に對する興味の中心點が異り、また面白いと思ふところがちがつて居れば、男子の頻りに感服して止まない作品も、婦人に取つては、案外それほどのものでないかも知れぬ。しかるに、從來の文學に於て、男子側の定めた評價に對し、婦人側からして、格別の抗議も出なかつたのは何故であるか。

それは婦人本來の性質が、模倣的に出來て居るからだと云ふ人もあらう。成るほど婦人は模倣的である。

男子に比べると模倣が巧い。獨創よりも模倣に長じて居る。

けれども、私は單にさう云ふ說明丈けて滿足したくない。從來の文學なるものが、主として男子本位てあつたのには、更に根本的の原因があるかと思ふ。乃ち、たゞに文學と云はず、學問ても敎育ても政治や實業ても、其他社會全般の事物に於て、婦人は男子の下に附いて居た。換言すれば、あらゆる方面に於て婦人の社會的地位が卑められて居たと云ふこと、是がその最も重要なる源因となつて居るやうに思はれる。

ところて、この婦人の社會上地位なるものは、だいぶ從前と變つて來た。また是からさき／＼變つて行くてあらう。そして其變遷につれて、婦人は婦人丈けの、獨立したる評價を文學に加へるやうになると思ふ。またたゞに、婦人特有の批判を過去の文學に對して下すのみならず。今後の文學に向つては、從來の如き男子本位の立脚地よりせざる別種の製作を要求するやうになるてあらうと思ふ。

是は必ずしも、男子ばかりが勝手な眞似をして居てはならぬ、婦人に對して相濟まぬと云ふやうな見方からするのてなく、文學それ自體の發達進步から考へて見ても、太だ望ましきことてある。專ら男子によつて作られたる在來の文學に、新しく婦人の立場より築き上げた一面を加へると云ふのは、太だ望ましきことてある。

私は今日の女流作家、特に小說脚本の作家に於て、色々慊らなく思ふことがあるのてあるが、その中てもとりわけ殘念に思ふのは、その餘りに女らしいところを失つて居ることてある。

女らしいところを失ふ、——此意味を誤解して貰つては困る。おとなしやかて無いとか、つゝましやかてないとか、强ちさう云ふことてはない。どうも、小說てもかいて見やう、脚本ても作つて見やうと云ふ婦人に、世俗の標準から見て、生意氣てなく、跳返りてない人のあるべき筈がない。生意氣も結構、跳返りも結構てある。たゞその、飽くまても婦人としての立場を

忘れないことを必要とする。如何に皮肉な觀察を下しても、如何に深刻なる描寫をしても、乃至は如何に激烈な思想や感情を表現するにしてからが、常に婦人らしく皮肉に、婦人らしく深刻に、また婦人らしく激烈にありたいのだ。

ところが、さう云ふ意味に於て、今日の女流作家、特に比較的名を知られて居る小說脚本の作家にして、太しく婦人らしいところを失つて居る人がありはせぬか。たゞ徒らに男性作家の後を追ひ、その、どちらかと云へば品のよくないやうな一面を踏襲して、男子のわれ〳〵がよむでさへ、冷汗の流れるやうなものを書いてる人がありはせぬか。

一部の男性作家が、賤しい商賣をして居る女などをかいて見せると、自分で碌々見たこともない待合や遊廓を舞臺にとり、また近頃のやうに、自然主義とかデカダンとか云ひ出すと、見やう見眞似に、姫御前のあられもない、嘔吐をも催しかねない不潔なものをかき上げる、かう云ふのは誠に心得違ひのはなはだしいものと云はなければならぬ。

聰明なる讀者諸姉に於てさう云ふ心得違のあらう筈は勿論ないのであるが、たゞしかし、前にも述べたる如く、在來の文學は專ら男子の興味を中心とした文學である。それを補ふのには、婦人の眼に映ずる人生の表現を以てせねばならぬ。また閨秀作家自身の利益といふことから云つて見ても、婦人でなければ出來ない觀察や描寫を示し、婦人でなくては有てない思想や感情を表現することが、最も好都合なのであると、かう云ふ點に御注意あつて今後益々諸姉特有の長所を發輝されむことを、私は切望して止まないのである。

服部貞子君
山田邦枝君

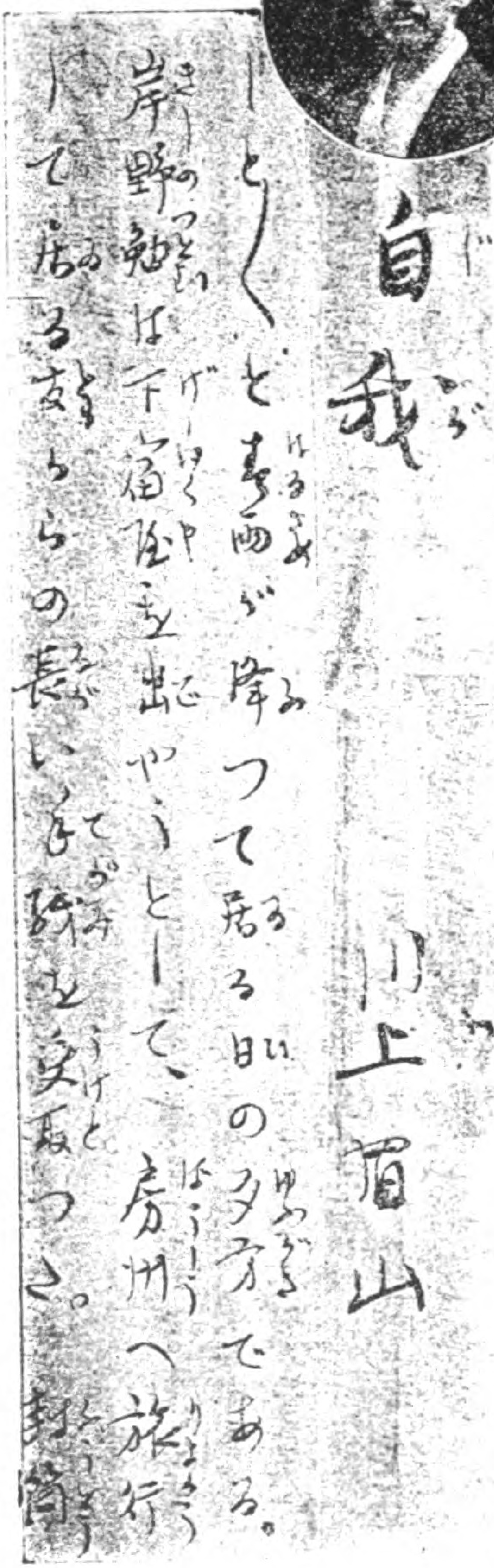
本誌の閨秀作家として常に優秀の作物を寄せつゝある右の兩孃は今回編輯會議の上、本誌の寄稿家として以後其作物は本欄に揭ぐる事とせり

噫川上眉山氏

夢と云ふには其事柄が餘りに歴然と見える、現と云には、餘りに思ひがけない、草は延び、木は瑞枝さす梅雨月十四日の拂曉、眉山川上亮氏の靈魂は遠く天に上つたまゝ、再び人間に歸らない、氏が殘した作品の生命は永遠であらうけれど、氏の事業は玆に終を告げた、壯齡僅に四十年、若きは人の命である。氏は初め大阪に生れ、東京に人と爲つた、硯友社中の才筆として夙に文名を知られ、作る處の小說數十篇、皆世に行はれた、氏の作物は溫雅優秀の語を以て評すべきもので、美文では『ふところ日記』の如き、小說では『墨染櫻』『暗潮』『觀音岩』『賤機』の如き、當時の文壇に重きを成した作である。最近一二ケ月の間にも數篇の新作あり、本誌前號に揭げたる「自我」も亦其一篇で、何の因緣か、今は端なくも故人を忍ぶ思ひ出ぐさとなつた、其原稿を筆蹟のまゝ版に附し、氏の小照と共に玆に揭げ、聊か弔意を表す。（六月十七日、氏の遺骨が駒込吉祥寺に葬らるゝの日、記者謹識）



故川上眉山氏
（永眠九日前撮影）



自我　川上眉山

しとしくと春雨が降つて居る日の夕方である。岸野勉は下宿を出やうとして、房州へ旅行して居る友からの長い手紙を受取つた。封筒

眉山氏筆蹟
（本誌前號の小說原稿）

夭死の女詩人 トルダット

岩野泡鳴

エドモンドゴスと云へば英國近代の一大批評家だが、それがまださうえらくなつてゐなかつた時、一新聞社の編輯局に遊びに行き、どうも批評するに足りる出版物も出ないではないかなどと雜談をやつてゐると、いろんな郵便物が一度期に澤山屆いた。その中に、印度の消印が附いてる小包みがあつて、開いて見ると、粗末な小本で『佛蘭西の野に拾ひたる穂束、トルダット著』といふ表題であつた。別に序文もなければ、端書きもない、二百ページばかりの物であつたから、特別の注意も引かず、そのまゝ紙屑籠の中へほうり込まれるところであつた。之を編輯長がゴスに手渡し、からかひ半分に、どうだ、一つ、この中から何か發見する物があるか、どうか、調べて見給へと云ひつけた。ゴスはいや／＼ながら之を開らき、氣が付いたのは左の句であつた。

Still barred thy doors! The far-east glows,
The morning wind blows fresh and free.
Should not the hour that wakes the rose
Awaken also thee?
All look for thee, Love. Light, and Song—
Light in the sky deep red above,
Song, in the lark of pinions strong,
And in my heart, true Love.
Apart we miss our nature's goal,
Why strieve to cheat our destinies?
Was not my love made for thy soul?
Thy beauty for mine eyes?
No longer sleep,
Oh, listen now!
I wait and weep,
But where art thou!

この位詩才がある者の著なら、出版がどんな不體裁であつたにしろ、世間に紹介してやらうと云ふ氣にな

つて、ゴスはトルダトを讀んで見たのだ。今では英國と佛蘭西とでは、多少學問あるものはトルダトの名を知らないことはない。またこの薄命女詩人が生きながらへてゐたら、五十何歳――まだ詩的事業を充分やれる年齢だのに。

トルダト(Torn Dutt)は一八五六年印度のカルカッタに生れた。身分は高い階級に屬し、幼少から立派な教育を受けたので、あたまは東洋的よりも西洋的になつてゐたらしい。然しその母なる人がトルに印度歌謡や古話の精神を吹き込んでゐたから、印度古代の宗教の詩的方面が充分にトルの心に染み渡つてゐたらしい。十三歳の時、父はトルを歐洲に伴ひ行き、英語と佛蘭西語とを學ばせた。かの女は、それが爲め、死ぬまで立派な英佛學者であつた。最も愛したのは佛語で、英語よりも一層完全な文をつづり得た。先づ佛蘭西に行き、それから以太利に行き、英國に行き、キャンブリヂに於て、婦人に對する講義に參聽した。

五年間歐洲にあつて、再びカルカタに歸り、跡の四年間、乃ち、最後の生涯を父の古い庭園に隱退し、智的努力と想像的製作とに餘念がなかつた。歐洲から豊富な智識を貯へて來た上に、靜かにサンスクリト、梵語を研究し、神秘的な文學に一身をまかせたのだ。初めは自國語、乃ち、ベンガル語で著作をしたが、對した影響のないのに失望し、英語を以つて自分の思想の仲介者とした。十八歳の時、その最初の論文を草したが、それは自分の最も同情してゐた詩人ルコントドリイルのことを書いたのだ。(わが國では、ドリイルは漸く近頃紹介されて來たばかりだ。)

一八七四年、トルの姉アルが二十一歳で死んだ。アルも亦妹に劣らない見目を以つてゐたし、また獨特と大望とがあつて、デサン、意匠に巧みであつた。兩人とも音樂者として育てられたものだ。トルの小説、「マドモアゼルダルヱル」(アルヱル孃)の挿畫はアルが書くことになつてゐたが、出來ないうちに死んでしまつた。兄はその以前になくなつたので、三人兄弟がただ一人になつた。一八七六年、はじめに云つた第一詩集、

佛蘭西の野に拾ひたる穂束』(A Sheaf gleaned in French Field) が出た。トルの作中最も不完全な物で、力と弱みとの混合物、大障害にうち勝つ天才と無學無經驗に屈する能才との混合物であつた。然しそれは孤獨の女詩人には免れ難いことであつた。

この詩集が英國に知られ、佛蘭西に知られるに至つた頃、佛人クラリスバデル孃の印度古代婦人に關する著をトルダトが英語に飜譯しようとして、はる〳〵、その許可を得る爲め、一八七七年の一月、バデルに手紙を送つたら、直ぐ親切な返事が來た。して、同年の三月またこのバデル――これがトルに取つては歐洲文學界に於ける唯一の音信者――に手紙を出した文句には、既に死のおもかげが添ふてゐた。その三月が終はらないうちに病床につき、著述は出來ないので、寢ころんだまま、歐洲最近の出版物を讀み耽り、バデルに三度目の、乃ち、最後の手紙を出したが、カルカタで、同年の八月三十日、滿二十一歲、六ケ月、二十六ケ日で、息を引き取つてしまつた。姉の死んだと同歲だ。

生き殘つた父が兒の遺作を調べて見ると、コントドグラモンの佛詩英譯やら、英文小說などがあつたが、最もおもな作は、いつ出來上つたか誰れも知らなかつた佛文小說『アルヸル孃の日誌』(Le Journal de Mlle. D'Arvers) だ。死後一年にして、詩集『穂束』は、著者の死狀を詳しく述べた、父の序文が付いて再版せられ、また一年を經て、一八七九年『アルヸル孃』が、二百五十九ページの瀟洒な小本となつて、バデル孃の監督のもとに出版された。それからといふものは、トルダトの名は佛英文學界に知られないものではなかつた。トルの最大遺物は、然し、獨得ある一種の英詩篇を推さなければならないのだ。

トルの英詩集は僕も、ゴスが一八八二年に收集したのを讀んだことがあるが、米野口氏の英詩と同樣、純粹の英詩としては、音律、用語、形式等のテクニクに於て隨分缺點は免れないとしても、西洋人では發表の出來ない東洋脈が一貫してゐて、そこに詩人の特色が

ある『プレラド』(Prelude)や『サギトリ』(Savitri)の樣な敍事詩に現はれたところなどを見ると、作者と同時代の東洋人にして、それだけの奇體な內察力を持つて英文を書いたものはない。そのうちには、ヱダ的莊重と簡結の性情とがあつて、近代印度文學の弊害なる狹少と纖弱との跡を絕つてゐる。然し、僕は可なり長い『サギトリ』を讀む時だけは、その發想と敍事とになかなか面白いところがあると思つたが、他の短篇に移るに從つて厭になつてしまつた。その理由は、西洋人なるゴスなどが頻りに讃めるトルの內察などは、僕等東洋人には慣れッこになつてる程度のものであつて、餘り珍らしくも、有難くもないからだ。

僕等が之を概論すれば、トルの英詩は東洋在來の詩想を英詩的に飜譯したものに過ぎない。然しそこに却つてトルの立ち塲があつたのだし、またそんな詩人があつて東西の思想を仲介することも必要だ。僕等は、野口氏に對しても、トルのやつた樣なことを更らに深め、更らに强めてやつて貰ひたいのである。トルは不幸にしてたッた二十一歲の妙齡で死んでしまつたが、東西兩洋に於て、今にそれを惜まれてゐるのは、せめてもの追善であらう。英文學史上に於て、ゴスの所謂『このもろい外國種の歌花』(This fragile exotic blossom of song)は、以後決して忘れられてはゐないのである。(明治四十一年六月十一日)

ingly calm and subdued. At a signal from a teacher, everybody was hushed, and we all commenced the national anthem and amids our song and bows, the imperial procession passed through the gate.

御鳳輦，歯簿は私共の歌と敬禮との中に，正門を御通行になりました。

While Her Majesty was resting for a while, we gathered in the Main Hall where several distinguished ladies and gentlemen were already seated near the throne. As I was too far away from them, I could not see thier faces. At the chord of music, we stood up and bowed our heads knowing that it was the signal that Her Majesty and her attendants were coming into the room led by the principal of the school and Minister of Education.

陛下便殿入御の間，私共は講堂に集りました處，既に知名の紳士貴婦人の賓客は，玉座近くに着席されてあられましたが，私は離れて居りましたから，皆樣方の御顔は見えませんでした。音樂の相圖で，一同起立して敬禮を致しました．これは校長と文部大臣御先導にて，國母陛下御侍從が，正面の入口より堂內に歩ませらるゝからて御座います。

The kindergarten children had their songs and games first. They were unconscious of their importance and went through everything most naturally and I am sure the Empress was pleased to see their innocent manners. After them the Primary School had its turn. There were three readings, one speech, one song and one game and two minutes gymnastics. Every one of them was a great success.

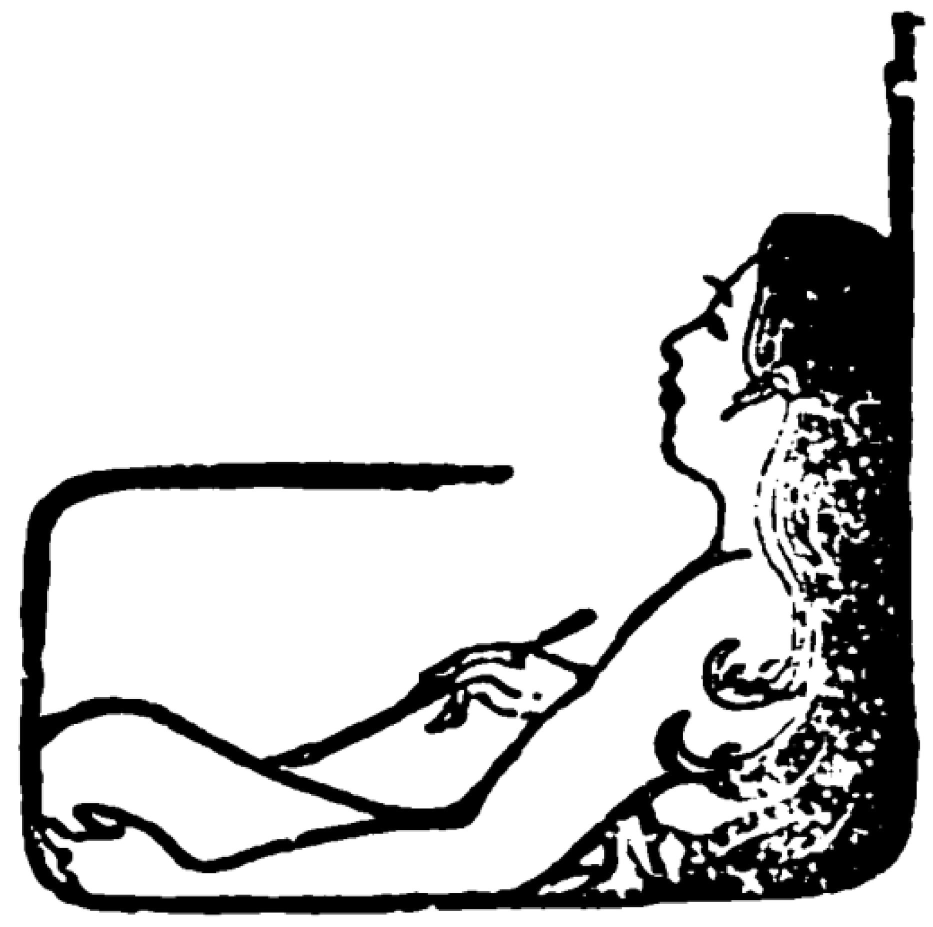
第一に幼稚園の兒童の遊戯唱歌が御座いましたが，彼等は大勢が注目して居るなどは，全く氣がつかず，凡て有の儘で實に可愛らしう御座いました。彼等の天心爛熳な動作には陛下も面白く御思召遊ばされし事と存じます。次は小學校の番て，朗讀が三ッ，談話一ッ，唱歌一ッ，遊戯一ッ，二分間體操等があり，何れも上出來て御座いました。

（つゞく）

英　文

（第四年第七回）

女子英學塾講師 河井道子



H. I. M. the Empress' Visit to a School.

July 10, 1908.

My dear Aunt,—

You will be quite envious of me if I tell you about the Empress' visit to our school last week. No doubt you have read it in papers, but it is quite a different thing to get news at first hand.

Both the teachers and pupils of our school worked hard for a week to get ready for the great occasion. Many of us could hardly sleep the night before the memorable day of Her Majesty's visit. For my part, I do not remember now how I dressed and acted on that morning, but I found myself at ten o'clock among the crowds of girls in the school play-ground waiting for the imperial carriage. Our hearts were filled with joy and anticipation, but we were seem-

皇后陛下某學校へ行啓

叔母様、

先週皇后陛下が私共の學校に行啓遊されし事を御知らせ申上ましたらば，嘸かし御浦山しく思召と存じます。既に新聞紙上にて御承知とは思ひますが，直接にきくのも又一入良しいものと存じます。

學校の職員生徒諸共に丸一週間は，此光榮ある期日の準備に非常に働きました。私共の中には陛下行啓の前夜は一睡もしない者が大勢御座いました。私は當日の朝は如何して仕度をしたやら，何をしたやら覺えが御座いませんですが，午前十時には學校の運動場に生徒諸姉の群衆と一所に御鳳輦を御待ちして居りました。喜と預期とて心が滿溢れて居ましたが，外面には至極落付いて居りました．頓て，先生からの相圖につれ一同靜肅になり，君が代を歌ひますと，

東京婦人一口評

●●
▲女學生　全體に女は眼に立つ者であるが、殊に東京の女學生は眼に立つ、一に風俗の派手やかなことゝ年齢の若い爲であらう、言語は一體に早口、頭腦は鈍くもないが、男子ほど鋭くはない、だから透徹した觀察力を缺いて居る、多勢をたのみに普通教育の力だけは具はつて行くやうであるが、未だ專門的に一事を深く究めやうとするものは稀である。風俗の上で際立つて進歩したのは男子を恐れなくなつたことで、餘り進歩しすぎて男子を恐れしめないやうに願ひたいものである。理由なく男子を恐れて、接近を避けやうとするのは舊道德の餘弊で、是が無くならうとするのは人類の進歩上、賀すべきである、多少の犧牲者は何とも仕方がない。

●●
▲奥樣　東京の娘には美くしいのは少いが、若い奥樣に比較的美くしいのが多い、是は地方から美くしい人を選拔いて連て來るからであらう奥樣か令孃か色彩の判然しないのもある、此等新しいホームを形くつて居る奥樣達は多く山の手に住んでゐる、規律があるやうで無く、敎育があるやうで無く、家計が豐かさうで豐かで無とは、強ち勝手元に出入する御用商人の蔭口計でもないらしい

●●
▲貴婦人　愛國婦人會を初めとして、東京には各種の社交的婦人團體がある、それらの幹事となり、發起者となる所謂貴婦人は多く陸海軍人を初め名門の令夫人と呼ばるゝ人達て、慈善音樂會、慈善演藝會などに奔走してゐる、やんごとなき方々さへ此貴婦人達と同じく社交界に立たせ給ふことゝて、其等の集會などに臨むと、高貴の方々の風姿さへ眼前窺ふことが出來る、地方の婦人界などでは到底見る事の出來ない榮華の態を一堂に集めて、社交界の花と立交らうのも東京の貴婦人が最も誇とするところであらう。

●●
▲事務員　停車場の驛員電話局員郵便局員、銀行員など所謂女子判任官の卵も東京婦人中の一異彩であらう、最も此れは少數であるが、女子の職業問題にやかましい時節であるから追々增加するに相違ない、風俗動作、別に變つた處もないやうに見える、申す迄もなく美人は少いが、此等はしつかりした女に限つて居る

●●
▲敎育家　上は高等の學校を主る一代の女子敎育家、下は尋常小學の一年生から敎へる女子敎育家、何れも敎育家たるに相違ない、名のある女子敎育家は極つて了つたやうて、我等は新しく現代的の女流敎育家の豪い人が出る事を希望してゐる

美文



編輯局選

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採錄す、二十四字三十行以內、用紙は半紙又は罫紙、一人一篇に限る事、投書締切は每月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

二等　○死

本所區外手町六十一番地　田中久子

幾度だか知らないが又寢返りを打つた。と又しも「死」と云ふ厭な考へが浮ぶ。

先刻、病院の歸りに逢つた烟草屋の娘の、蒼いビードロの樣な細い頸元、といかにも疲れ切つたらしい目の色と。あゝ私も今にあゝなるのではなからうか、とかう思つたのが初めて、歸つて床へは入つてからずつと、其麼事許りが考へられる。

「死んだら……死んだら……」と思ふと身震ひが出る程いやだ。死、おそろしい死、私は未だ死ぬのは厭だと思つて先刻も泣いたけれど……。

電車通りのお蕎麥屋に忌中の簾がかゝつてゐたと聞いた時もギヨッとした。此一月、歌留多會の歸りにあの前を通つた時、思ひ出すのも厭な程蒼い顏をして窓から往來を見て居たのが、よく學校の往き歸りに逢つた娘だつた。夫から三月も中頃の夕方、家の門の前を矢つぱり蒼い顏をし乍ら藥瓶を下げて通つた事がある。あの娘てせう、死んだのは、と云ふと母樣も、頰の紅い子だつたねえ、とお被仰つた。

おゝ厭、門の前を通つた時、あの娘は私を執念く見守つてゐたもの、もしや道連れにでも……と思ふとゾッとした。其時の振返つた目がまざ／＼と見える……。

此間きいちやんと日比谷へ行つた歸りである。夕日に照らされたお濠ばたの柳の下を縫ふて白い空の柩が行つた、ふと見た時、あれへ私は入れられて了ふんだ、とさう思つてあの時私はきいちやんの肩へより乍ら泣いたつけ。何故其麼事を思つたらう、私は馬鹿だ、馬鹿なんだ。

私が一番最初に『死』に接したのはお父樣の時だつた。未だ數へ年の三つ、いゝも惡いも知る事か、人が多勢來るのを喜んで乳母やの背中てはねてゐたと、よく話しては聞かされた。

夫からはお祖父樣の時。小兄樣と一所に車に乘つて麻布迄行く途中て、私は色々考へた。行たら一番先にどうしよう、泣くのかしら、泣けなかつたらどうしよう、等とおもつて、轅棒が門の前へついた時、私には其爲どんなに胸を轟かせたか知れなかつた。家へは入ると多

勢の叔父樣が皆御酒をめし上つてゐた、母樣とお祖母樣と枕元にゐて代り〳〵お線香を上げてゐらしつたぎり、私もお酌をしてまはつて、いゝ子だ〳〵と譽められたのを覺えてゐる。

夫からが姉樣の時だつた。翌朝起きて御病室へ行くと屛風の陰に白い布におほはれて寢てゐらしつた、夫ても私はまだ信じられぬ、そつと手を延べて「姉樣」と其お肩をさはつた時。私は其時、全く『死』と云ふ事を知つた。冷い〳〵其お肩、私はもう泣かずにゐられやうか……。

其、全く『死』といふ事を知つてから五年の今日、私は將に夫に往かうとしてゐるのではあるまいか……。唇が褪せて目が落ちて、そして手も頰も冷く、冷く成つた醜い姿と成るのが、あゝどんなに辛からう。少女十八、『死』と手を握るにはまだ餘り早くはあるまいか……。けれど人は死んだ、十八でも十六でも『死』は用捨なく少女の頰を冷してゆくもの。

あゝ怖しい『死』、私の頰には何ともなしに、熱い熱い涙が流れた。

遠くて時計が二時を打つた。

お蕎麥やの木魚の音が、此麽遠くまで聞えてくる筈はないとは思ふけれど、私の耳には何となしに聽くやう……。

幼い時から『死』に就いての經驗を語つたのは新式で甚だ好い、『死』につきまとふ聯想も皆無理らしからぬ事ばかり、死を讚美するでなく、死を嫌忌し畏怖する少女の情緒は全く斯うもあらうかと思ふ

（評）此文、規定の行數を越ゆること多い、作者のお詫もあつたけれど、次からは御注意して下さい

三等　○初夏

甲斐國東山梨郡加納岩村　勝村もりよ

日は午を少し傾いて空には雲もない姿は柿の若葉を楯にその烈しい熱を避けてゐる、指環（ゆびわ）のルビーが自分ながらうれしく光る、銀杏や欅や栗の葉や、さては芍藥忘草、薔薇なぞの若芽がかをり合ふ、とり分けぐみの葉の匂ひ強く、南天の若芽が可愛らしい、瓔珞つつぢのかげから、いつ來たのだらう、「五厘頂戴ネ、五厘、」八重ちやんがいつもの生人形、袂の下からうは目づかい!!「何にするの……もう大丈夫と見てとつて頰を少しかしげてにツこりするとやさしいゑくぼが……「あのねそら——そら、」もどかしそをに「五厘て買へるよう」——口疾（くちばや）に云ッてくるりと右へまはつて、一寸とうつむいて、「有難う云ふから、頂戴よう、」足ずりする牡丹の花が恥かしいと思つたかはらり落ると黃い蝶が八重ちやんを吸ひに來る……「有難う、よ、」チョコ〳〵かけ出すと白い蝶が先に黃いのが後から、八重ちやん

も舞ふように……霧島躑躅の燃るまがり角で一寸とふりむいた白い顔と水淺黄の帶とのうつりがよくにつこりした「早く歸つてお出てよ……」思はずこう云ふたら、「はい、よー……と」引張つた細いすゞしい聲で返事をしながら、若萩と芭蕉の間をちらりと通ふてしまふと初夏の庭が急に淋しくなつた……。

色彩の配合に注意した書きぶり、初夏の自然も心地よい（評）



畑歸り（入賞二等）　水戸　北川うめ

四等

○三越の店頭

日本橋　森　茂枝

（室町、三越呉服店前）と云ふ聲を背後に聞きながら電車を降りて靑く塗つた舊の三越の圍を左に廻つた。熱い光は、洋傘を透して十間と行かないのに最う汗ばんだ樣に厭な心地がする。路は水撒車が通つた許りと見えて中央は白雨の行潦の樣にぢやぶ〳〵溜つて其れが兩側の低い方に流れるので僅か許りの乾いた所を拾つて行く。美しく裝つた人、鞄を肩から掛けて口を開けてる田舍の人、風呂敷包を背負つた小僧、自轉車に乘つてる人、皆磁石に感じた鐵の樣に一樣に左の陳列棚に目を注いで、水溜に踏み込んでるのも、大事な他出行きの裾にハネを上げてるのも一向御構なしに夢中に見て居る。

高島田に藤色の御召の古風な娘さんは繻珍の丸帶縮緬の振袖の前に惚りと夢みる樣な面色に時々側の乳母らしいのを顧みて微笑みしてるは何か望があるらしく、

又ベール、レースショールの前にはマガレツトに豁て華奢な肩を白のショールに包んだ新式な令孃が指して笑ひながら話してるには乾度巴里あたりの夜會の衣摺れ、さゞめき、樂の音などがベールと一所に棚の中に回轉して居るだらう、金銀彫刻の燦爛として列べてある前にはイセな盲縞の兄哥らしいが二三人、かれこれ評して居たが終には「チェッ畜生」と高笑ながら出て仕舞つた、パナマ帽の前にはハイカラが棚を前から見横から透して終には硝子に額をつけて仕舞つて傍の者が壞れはせぬかとはら〳〵する位夢中になつて居る、白靴はいた美術學校の生徒らしいが眞鍮の欄干に倚つて某畫伯の筆になつた油畫を凝視て居る。

私は此光景に怖じて折角來ても内に入れずに人の後に淋しくイつて躊らうとした時には殘照が赤くルーフガーデンを繞らした旗竿に美しく映えて居た。

三越は都會を彩りて、現代の榮華は玆に極まる、美に浴するもの單り此作者ばかりてない（評）

五等

○夜の恐れ

大坂　なてしこ

私は夜中目を覺すと眠られぬ事が屢てす、夏は殊更てす、眠られぬと恐い、恐いと眠られぬ、幾ら氣樂な事を考へて目を閉てゐてもガタと音がするハッと驚く、耳を澄すと拔足で人の步む氣配そッと細く目を開いて見ると眞暗て何ゝ見えぬ月夜の時は摺硝子の障子にヌッと人が立てゐるので、驚て能見ると衣が釘に掛てあるのてす、一體私の家は賑かな通筋にあるのですが、雨戶を閉ぢぬのてす、以前は洋燈を燈しておいた位てす、雖も盜人が入てから止めたの、それも皆は勿論私も一寸も知らなかつたので朝起て始めて分つたのてす、私は雨戶さへ閉てあれば安心して能眠るだらうと思ます、そして何時も晝になると夜恐しかつた事が馬鹿らしくて仕樣がありませんガタと音のするのは鼠てすし、人の步く樣なのは誰かの寢返して蒲團と寢衣がすれた音てす、それが又夜になるとさうは思はれません、音がする、今夜は如何しても盜人に違ひない、あれあんな音が聞える、ありや鼠や猫てない、必さうだと思ふと、恐くて〳〵仕樣がない、母上を呼ぶ、呼て直ぐ返事をして下さると嬉しい、能休んてゐらして五六度も呼ばねば返事をして下さらないと其間恐くて堪られない、盜人がこりや聲を立てるのは誰ぢやと刀でも振たら如何しやうかと思つて‥‥。此樣な事を思つて闇の晩は闇で盜人がゐても見えぬから恐いし、月夜の晩は月夜で何處にか隱れて私等が起てゐないかゐるかを伺ふて居りはすまいかと心配する、起てゐると思はれると不可ないと思つて蚤に嚙まれて痒くてもよう動かないし、寢床が溫つて冷い所へ轉て行たいのも辛抱する、其時の苦しさは何とも云樣がありません、堪らないので母上を呼ぶ、呼ぶ迄が大抵てはありません、聲を出すともしか何をするか知れないと思てです、私には夜恐がりと云ふものでも取付かれてゐるのでせうか。

人間には恐怖の血あり、盜人が怖くなくなれば、其次には又何か恐いものが出てくる、此文章、稚けれど正直に恐ろしさを寫して居る（評）

秀逸

○雨上り

栃木縣　靑木多佳子

二三日降り續いた雨が今朝方やう〳〵止んて雲の晴間

から太陽の顔が出初めた、どこの家からも水蒸氣がぼつぼつと上つてゐる、そここゝの鷄が勇ましくないて、軒の燕の聲もやかましい、庭の櫻はあとかたもなくなつて紫つゝじが咲きかけた、若みどりの色が一入濃くなつて春の面影は少しもない、何となく柔かい風に吹かれて見たく、庭下駄のまゝしつとりと心地よい土をふんで門を出た、桐畑の間を通つて稻荷樣の前へくると、いつ上げたのか五色の紙の旗が今にも落ちそうにぬれてたれ下つてゐる、空は一面に晴れ渡つてぽかぽか照りつけられては暑い位である、見渡す限りほを含んだ麥が青々としげつてゐる中に、今を眞盛りのれんげ草、菜の花が美しく恰ど佐保姫の忘れていつた衣てないかと思はれる、そよ〳〵と吹く風が袂をふくらせて背中へすーとはいる心地よさ、いつしか小學校のうらへきてしまつた、まだ初まらぬと見えて生徒は皆書物を持つてかけまはつてゐる、庭の隅にある手まり櫻は此長雨にも散らず美しく咲いてゐる折からかけてきた少女がとんと突當つたので、はらはらとお下げの上へ散つた、私等もずゐぶん此庭でいたづらをしては叱られたものである、今一度此學校へ行くやうな身になつて見たいと思つた、突然チリチリンと鈴がなつたので私のむねはどきりとした、まだ學校時代の氣が失せないものと見える、騷々しい聲もぱつたり止んで生徒は列を作つてしづ〳〵とはいつてしまつた、學校の西には堤一つへだてゝ廣い墓場がある數知れず立てられた石碑の中に目立つて新らしい墓には色々の花が手向けてあつて掃除もきれいに届いてゐるのがある、私等の此學校へくる頃には此處に一つのお宮があつて、二十四五になる狂女が住んでゐたが、よしと云ふ名なのでよしばかよしばかと呼んだ、いつも大根のはしやなまのいもやなす等を畑から取つてきては食べてゐて町へも時々は貰ひに出た、不思議にも此女は聲が美しく歌が頗る上手であつたので、いつも私等は休になると先生にかくれて色々な物を持つていつてくれると大喜びで、三味線をひくやうな手つきしては歌などを歌つてきかせた、其風がをかしいので子供等は毎日いつてはいじめた、殊に男子等はひどい事をしては泣かせたのである。それからあれは、冬の寒い晩であつた、どうした事か此お宮へ火がついて、よしばかも此中で燒死んでしまつた、狂女の事についてはずゐぶんせまい町の評判になつて色氣狂だとか何とか噂とり〴〵であつたが遂に判然した事は分らなかつた私も此女に付ては以前何か悲慘な事情があつたのだらうと想像してゐたのである、

ふと背が暑いのに氣がついて急いで足を引返した、あまりてりつけられた故か頭痛がするやうになつた、通りすがりにそつと校内をのぞくと、がらす戸を明け放

したゝ中から無邪氣な子供の讀書の聲がきこえてくる。

學校も、寮塲も、狂女も、皆田舍らしい趣があつて、讀んで居ても野の風に吹かれてゐるやうな心もちがする（評）

○準備　芝　秋野すゑ

薩摩琵琶が始まりかけた頃、席をはづして準備室に入るとまあ大變！衣裳やら姿見やら毛布やら取り散らして、幹事は忙しさうに飛び廻つて居る。

天女になる千代子さんはすつかり御化粧が出來て、髮をほどいて入らつしやる所。いゝ毛!!と感心して居ると『花さん何して居るの？早くなさいよ』とつッけんどんな幹事の聲、喫驚して鏡に向ふとたんコップの水をこぼした。手巾で拭うて、大急ぎて肉白粉をべたべた塗る。吉田さんは畵の先生を引張つて來て私の前に坐せた。何するのかと思つたら皺てすよと説明する。可笑さを堪えてえどつて頂くと、鬚を被させられる。緒で拵らへた白いチヨン髷の、所々黑い毛が食み出すのを突き込む。吉田さんがプーと噴き出したら、皆ふりかへつてドッと笑ふ。八の字の顏が一齊に笑顏となる。『叱ッ……靜に――』と青筋先生とあだ名のある先生が青筋立てゝ叱りに入らつしやる。

千代子さんの見てゐる鏡をひつたくつて見ると――どうしても日光と湖風にきたへた七十位の爺だ。可笑しくて可笑しくて堪らない。汚ない襦袢見たいな着物を着て、釣竿をかつぐと、『ホホ能く似合つてよ』と吉田さんが冷かす。『いゝ事よ』とにらみ返して見ると、千代子さんは眞黑な毛を乙姫樣のやうな髷にして、眞白の着物を着た姿!! 全く天女だ。級一の美人にこの役ふさわしい事、それに三幕目にあの金銀美々しい羽衣を着たならば、衆人齊しくチャームせらるゝに違ひない。其姿眞にせまつて屹度賞物よりかもよいかもしれぬ。見とれる役の私だつて見とれるなと云つても見とれないでは居られまい、琵琶がすんだか拍手の音がして「羽衣！羽衣!!」と先生が叫んで來る。松よ背景よと騒がれて、――もう私は――夢中になつて仕舞つた。

活人畵に出るまでの一場の光景、宛として活人畵より面白い（評）

○お茶摘み　遠江　菊笠みつ子

今迄シットリとしてゐた露が最早乾いて開きかけた綠の若芽が何十町歩となく連らなつて遠く見れば只廣い芝生のやうてす。其の所々に茶摘女の白い手拭と紅い襷とが單調を破つて稍々趣を添えてゐます。生々した綠の木が蒼空に向つて突進するかのやうな森から吹いて來る柔風が、若い娘の生々した淡紅の頰から頰へ傳はつて春の秘事を囁やいてゐるかのやう。妾も今日はその内の一人となつて雇人の同じ年頃の娘達五人とお茶摘みを始めました。始めの內は側見もせ

ず一生懸命一枝毎に片端から摘んでは入れ摘んでは入れしてゐましたけれど最早そろ〳〵厭いて來て、木の向ふ側にゐるお小夜さんの籠を一寸窺いて見ますと未だ半分程しかありません、私のは最早一杯になつてゐるのに下手な事と思ひながら「未だそれ丈け？」と云ひましたのが失敗「否、最早二杯目でござんすよ」と笑ひながら云はれて私は眞紅になりましたがそれでも誰れも見てゐませなんだのでやつと安心しました。

風につれて遠くから優しい聲の茶摘唄が聞えて來ますと隣りの畑でも誰れやらが初めました、するとそれに和して誰れも彼れも唄ひ出してたいさう賑やかになりました。皆が興に入つて聲が一段高くなつた時私の背後で誰れかゞ「キアーッ」と叫びましたので唄がハタと止まつて騒々しく口々に「何？」「何かへ？」などと罵りわめいて何十かの視線が恐ろしい者でも見るかのやうにその叫びの方に集つた時「蛇驚しちやつたよ此の蛇が」と云つたので一同「ホ、、ホ弱虫ねえ」と笑つてまた唄が初まりました。

だん〳〵摘んで行きますと茶の木の根に白い者が見えます繁つた株に蔽はれてよく見えませんので掻き分けて見るとそれは四個の頬白の卵でありました、私は食客根性の僻んだ心に若しや誰れかに取られると親鳥に氣の毒だからと疑つて其の儘誰れにも話しませぬ。そして嘗てお母様に連れられて來た時もあつたがとまたしても果敢ない思ひを辿らうとした時「ピユー」と製茶再製所の汽笛が澄み切つた大空に響き渡つたので、彼の畑からも此の畑からもお御辨當開くとて彼方の松林指して行きますので私も皆の後について――。

空には白い雲が輕く浮いてゐます。



あらひ物（入賞三等）

名古屋　きよし

實際は風流でも何でもなく、苦しい勞働であらうけれど、勞働の中に却つて情の動くことが多い（評）

○初嶋田

本郷　朝井松子

愈々髮を分けて髱を入れる段に成ると急に島田が厭に成つて、姉様後生ですから桃割に結はせて頂戴な、不可ませんよ、と劍もほろゝ、元結くはへて髮結が、お孃様には屹度よくお似合なさい升、と容赦無く髱を入れて了つた、仕方無しに又新聞に眼を移すと一寸どうぞ、ヱ何？どぎまぎして鏡を見る、花さん根を押へるのですよ、あさう、と片手で持つと、兩手でお持ち下さいまし、本當に仕方が無い事ね何にも知ら無いのだから、と姉様が笑ひ乍らじれつたさう、漆の様な黒い根元をしつかり押へて居る私の手が油地味た髮結の手と並ぶと透き通る様に白くて指先丈が仄り赤味を含むて如何にも美しく見えた、が膝に置くと矢張元の私の手に成る、で又用も無いのに一寸根のあたりを押へて見たら、つれましたか、といちを結へて居た手を止める、イヽエと又新聞を取つた、が眼は鏡に有る、二本元結を輪に掛けてぎゆう〆てハイと云つたが何(どう)するのかとまご／＼して居たら脇から姉様が毛筋立を脱いで下さつたのでふと顔見合せて笑つて了つた、其の内に髷が出來上つて髱を抓いて髱をふつくりさせたら俄に顔違が仕た、サ宜敷うムい升これで御覧なさいましと小さな鏡を進めた、少し體を斜にして後形を寫すと實に美事に出來た、さう云つては可笑いけれど艶々仕て水の垂れそうな細い髱がすつと襟元に掛つて白丈長が一際くつきり見える抔まるで繪に描いたやうだ、遂見惚れて居ると手を拭き乍髮結が、如何でムい升と得意顔、大層よく出來ました、と姉様が褒めてお遣りなさる、とお風呂から上つて被入した母様が、オヤもう結えたのどれお見せ……オヽよく出來た事ホヽヽよく似合ふよ、ね母様、……夫を今迄厭だ／＼つて結はせ無いのですもの花さん是から結ひ度く成つたでせう、いやな姉様、オヤ矢張厭なのホヽヽ、では結ひたてゞ寫眞を彩つてお出な姉さんと、あゝそれがいゝわね花さん、ジヤー私後向きで寫し升わ、それ御覧なさいホヽヽヽ。

髮結のことを微細に書いてある、細いばかりでなく、おもしろく、うつくしく書いてある、此處男子入るべからざる文字（評）

○雨の夕

信濃　依田よしえ子

あゝ如何すればいゝのだらう、私は一體どうなつて了ふのだらう、まあ此の夕暮れの淋しい事。

云ふに云はれぬ悲しい想が、何時からともなく夢の様に胸に湧いて、堪へがたい苦痛を覺へたのであるが、今日の様な雨の日などは、殊にやるせなく感ぜられて泣き出し度い程の胸苦さをじつとおさへて窓によつた

風にもつるゝ細い雨は霧の樣に迷つて、一町を隔た木や家は、只もう〳〵と白いものゝ深みに見えがくれして、泣いて居る樣にも思はれる。生垣の外をゆるう流るゝ小川の水は、薄濁りの底の底へ曇つた淋しい空を沈めて抱いて居る樣にも見えるので、目叩きもせずにじつと見つめれば、幽かな〳〵降る雨の調と私の胸の想とを一つに合せて、さうしてそこを、其のまゝ流れて居るのではあるまいかと、異樣の水のせゝらぎが寂い胸に響くので……涙が頬を傳つて、もたれた片手の甲の上にほろりと落ちると、どこからとも無く冴えてさびしい女の笑聲が聞えたが、やがてうばはれる樣に雨の中へかすれて消えた。私は急に、此の世の果てに只孤り取り殘されて、行くに的もない、暗い〳〵大野原を、何をか求めるものゝある樣に思はれて徒らにさまよふ時の感じはかうもあらうかと思つて見た、さうしてかうやつて居る間も、何かは知らず、まつて居る人のある樣に、待つて居れば來るかの樣に、思はれて仄暗い雨の夕を、幾度、すかしては見、見ては失望したゞらう。川の底の曇つた空と、私の胸の想とは、益々暗く〳〵とぢこめられた樣に感じて、暫涙に堪へない目を瞑むつた。今は世に亡き人、居ない人ふとそこへ儚ない〳〵幻を重ねたのである。「もう居ないのだもの」われ知らずかうつぶやいて、ハッとわれに返つた時はあたりは一入夕闇こめて、遥か川をへだてた一つ家の窓からもるゝ火影が一つ、ぼんやりと見えたが……死のかげ？と思ふと、はら〳〵とゆれるらしい光と、さびしい雨の調と、かなしい水のせゝらぎとが、一處になつて、其まゝ胸に這入るかと、五體はかた〳〵身うごきも出來得ぬ樣に感じたのである。

冥想的の材料て詩を文にしたやうなものだが、今少し情緒のゆらぎを適切に表白して欲しかつた、文字で引き入れやうとする力が勝つてゐはすまいかと疑はれる、何にしても野に捨てゝ置く才ではない（評）

○花の賦

下谷　花園百合子

花は秋もあれど、なほ春の花に勝るものはあらじ。春まだ淺き如月の頃、萬の花にさきがけて匂ひ出たる梅こそいと神々しけれ。色をも香をもとよまれたる夜は云はずもがな、枝を折りてありし菅公の事など忍びまつれば、そゞろ其昔覺ゆるは、橘におとる可くもあらず。桃は木立こそもの〳〵しけれ赤白に咲分けたる美しさ、姫桃の物こそいはね、なつかしきあたりはおのづから人を引付け雛まつる庭には、かならず、立てらるゝなど愛嬌多し。京少女に似て艶なるは櫻にこそ、霞中に見へがくれして、春風にもて遊ばるゝなど、たゞ白雲の樣なり。すみ田川原の有明月いまはの頃、一つ二つ散りて消き流に浮び行樣はゑにも見られぬ風情ありてめでたし。

やう〳〵春深くなれば、牡丹芍藥の、淸げなる園生に咲出たる、海棠の雨にぬれたる紅薔薇の朝露ふくめる共にめでたし。躑躅の赤き白黄紫さては咲分け、しぼりなど誰人かめでざらん、まして霧島の幾株となく咲きつゞける中を行ばさながら炎の中に立てる樣にて面白し。山吹の黃金色なす藤の波のやうに、川邊にさきかゝれるなど、いづれもうなだれ下れるは身をへりくだる心見へてゆかし。花は斯の如く優にやさしき姿をあらはして、世の人に愛でられ樂まれて、もてはやさるゝこそいと幸なれ。

文章語體の好模範を示してゐる（評）

○浦の夕　伊豫　勝山みどり

淡き淡き夕月は澄み渡るみ空にかゝりぬ、果しらぬ海の面はやがて夜の幕に包まれんとす、永久に語らぬ月の影、もの悲しげなる浪がさゝやきを聞きては、そゞろ文化の昔の忍ばれて。

少女名は松江とかや、父は然るべき武士の成れの果、柴の庵を暫しの假住居と此處三つの濱邊に、里の子等にもの書くわざなど敎へて、親子三人細き煙を立て居たり。

漁る業を事とせる、海女の群に交りては、海の都の姬神かと許り浦の若者共の心は如何に浪立ちけむ、樣々にそが心をえんといひよりぬ。

さはれ少女が心は、まがきに殘る白菊の如淸かりき、さらぬ顏にもてなすを心惡しとや思ひけむ、若者共はかたらひて父の御留守を幸ひに少女が家にせまり來ぬ。さすがは武士の娘なり言葉靜になだむれど、道理知らぬ痴者なれば、目にもの見せんとひしめきぬ、これ迄なりと思ひけむ少女は秘藏の短刀に、二人三人を傷けぬ、少女の手並におぢにけむ若者どもはにげにけり。歸りし父にかくの由聞えて、たとへ惡者なりとも人を手にかけしは律にそむく事なれば、あはれ父君の御手にかゝりてと願ひつ。

共にと許りなげかるゝ母に別れて父子は濱邊に出て行きぬ。

覺悟の少女は眞白き頸をさしのべて、父上いざと許りにうながしつ、師走八日の宵月は小富士の山の端にかくれ初めぬ、少女が樣をあはれとや見し。

かくて情の白刃のもとに、あはれ寒菊一りんとはに色あせぬ。

されどかんばしきそが香りは、寄せては返す白浪につたへつたへて、月影の明らけき限りつきせじとこそ。

其事と共に其文字も古朴、五六十年の昔にかへつた氣がする（評）

○夜の川邊　信濃　太田貴志女

海つて全體どんなもの、――波の音つてどう云ふ風にひゞくもの――、ふとこんな思が生れた、何かしらんこんな感が生じたのであらうと、靜まつて見るとさな

から自分の魂を弄んで居るかのやうに、つひ脚下の水が勢よく大石小石にかまれて、サラ〳〵〳〵――と遠く連れられては又返つてくる活潑なる音樂のそれてあつた、あゝ海を見たい、海を見たい、それでもどんなに廣いものであらう、空は水に――水は空に――、けじめがないと云ふ、波は時によると山とくだけて押しよする事があると云ふ、――潮の遠鳴りとはどう云ふ風にきこえるものであらう、波はどう云ふ風によせくるものであらうか、と出來る丈け目を細くして廣い河づらに對つて遠く消え去り、又蘇りくる瀬の音を耳に、ツッ立つたまゝ、全く萬づの感想に胸はかき亂だされて仕舞つて呆けて居るのである。

舞子（入賞四等）　北豐島郡　丹野ひさ子



今遠い橋の上を提灯が一つ見えて車の音が微かに朧の暮を縫つて、またゝきながら過ぎつた、あゝあの光り――海の面にもあゝ云ふ光りが見えるてあらうか漁火とはあゝ云ふ色の物てあらう、暗の海に赤き漁火――實に嬉しい色てはなからうか――、ふと自分の胸に比べて見た似て居るよくこの胸に似て居る、妾の胸はほんとに暗い行く手が少しも見えない、けれどもあの火のやうに、唯一點光明の色が見出し得たならばちつとも淋しくはない、悲しい事もない、全體妾は今何を求めやうとてこんな處に來たのてあらう、目の前は暗、冷たい夜の河邊てはないか、どうして、どうしてと、はげしく、小刻みに廻りて見て全く我れに返つた時は、淋しさがいやまして、何の嬉しいと思ひやるべき物の影は一つも見えない、生命の光明、いさり火、それは吾れ

の胸に宿るべき影、あゝその影はいつ近よつてくるであらう、けれども〳〵其の影の光明は永遠に近づかずにはてるのではなからうか、と又この戀しい思につゝまれると身が針のやうになつた心地、そしてあはたゞしく何とも云はれぬはげしい思に迫られて消え入るかと思ふ位胸がせばみ涙が、しきりなしに流れる、ザワザワとあやしい音の風は若柳の茂みをゆるがして冷や冷やと身を削ぐやう、ツッツッと聲ばかりの蝙蝠は低く行き來して何事をか告げるやう何事も便りなく寂しくうらめしくたゞ泣いた、泣いて見たらば何か嬉しい境に逢ふかの思で——、

例の冥想的、信濃の人は皆海を慕ひ、慕ふて美くしい海を眠底に浮ぶ、海國の人、却つて海を見ず（評）

○預り子

大阪府　寺部君子

京都の知るべの重ちやんが病氣で、私が行て居た時、八幡のお姥アが見舞に來て「坊樣何うお仕どす、まあいこうお痩せどした事」と痛々し相に手を取る、重ちやんは此人の來るのを待て居たので、狎へ氣味に「お姥アしんどい」「さうか〳〵」と甲斐々々しくさすつて遣り乍「坊さんのお好きな田舍羊羹を仕て來て上げたさけ、早う可う成てお喰りえ」重ちやんは懷し相に見て居たが「お姥家へいにたいな」「可うお成りたら、連れて行くてなあ」と言ひ乍、馬乘の明けてある三巾の前掛で一寸目を拭て、私に向ひ「こないに言ふてくれなはると眞の孫の樣に思ふてな、可愛のどすせ。家のかゝあも一扁尋ねたいと言ふとるのどすけんど、此頃又大阪から一人來とりなはるので、遂出惡うおしてな。へエ此の手拭どすけえな」と一寸頭へ手を上げて「若い人はふき流し、私の樣な婆は恁う仕て破るのどす」と姉樣被りの淺く被た樣なのを、一寸被直て「朝起ると寢る迄脫がしまへんので、一寸でも手拭が無いと極りが惡うおしてな。此間も大阪から遊びがてらに坊樣連れて來いと言ふてよこしやはつたので、嫁と三人行きましたが、大阪で手拭きてると笑やはるさけとかゝあに取らしましたら、何んやおかしいとぢき又きるのどつせ、癖といふ物はおかしおすな」遂話に身が入て、重ちやんを撫てゝた手がお留守になると、又お姥アと言ふ「ほんに可愛いもんどつせ、大阪の坊さんも、此坊樣と三つ下の五つどすが、寶の母樣がお抱きなさると、嫌がつて、母ちやんいのと嫁に縋り付いて此處が坊樣のお家どすと言ふても、きかんと、いのいのと言ひなはつて難儀仕ました、奥樣にお氣の毒てな仕樣が無いのどつせ」

重ちやんも、何うやら母樣より此のお姥アが好いらしい。

おばアさんの話が活てゐる（評）

○神樂ばやし　讃岐　白ばら

春の日永を謠ふ雲雀の聲も地に落ちて、日は眠げに暮れて行きます。

今まで夕雲のきれ目を微紅に色彩つて居た光もうすれ、黄昏の幕は、隣の屋根を越して、早や妾が前まで、迫つてきました。

妾は薄暗い庭の樫の木の下に、深い〳〵冥想の淵に陷つて、見るともなしに、茫然佇んでゐるのであります。

ふと、鎭守の森の方から太皷の音や笛の音が、暮れ行く空に澄み渡つて聞えます、ジッと其音に耳傾けて居ますと、香あるやうな夕風につれて、或はうすれ、又起り、波立つて響いてきて、頭の上の黑ずんだ樫の木の中にすいこまれてゐるやう。

妾は「ア、御神樂ですなあ……」と氣がつくと、昔の事が胸に浮んできて、何んだか懷かしい心地がします。

妾は小い時分に、よくあの御神樂を聞きに行きました、まだ妾の祖母さんがあられた時です、祖母さんにつれられて行つて、花簪など買つて頂くのは何よりの樂でありました。或時も美いちやんと一所に鎭守樣の御祭なので學校を晝から休んで歸つて、兄さんに大變叱られたこともありました。左樣々々未だあります、或時も美いちやんと二人ぎり御神樂さゝに行きましたが、大變の混雜で妾は遂々おしころがされ、強く足を踏まれまして、唯泣いてばかり居りますと、知らない美しい娘さんが來て、「マア可愛相に……」と云つて足駄を拾つて慰めて呉れたこともありました。今思ふと何んだか知つてゐる人の樣に思はれます、今一度あの時分になつて見たい氣がします。御神樂はまだ聞えます。

お祭り（入賞五等）　牛込　佐野良子



○卒業後　澁野川　菊垣田鶴

あ明日は西洋史の試驗！もう二十頁諳誦しなくては……と、濃い御茶に、ビスケットを側に置き、固より鈍い頭を抱へて、本にかぢり付いて居た其時には、「卒業したらば、どんなに樂でせう」と熱々待ち遠しく思つたが、今と成つては却つて其時が戀しい。

幾何の證明に肩を聳やかして、「貴女のは複雑過ぎます

わ」「あら私の方が精確ですわ」と、颱半分に泡を飛ばした、其友は、先頃の同窓會には、生れ變つた樣な顔していらつしやる。私とて、心斗は子供の積て居ても、油氣もない束ね髪は、園の出た日本髪に結ひ變へられ、惜しい〳〵袖までも、つめさせられてしまつた。どながいらしつても、只御辭儀はかりですんて居たのが、此頃では母の代に、御無沙汰見舞やら、御病氣見舞やらて、時々上る他家樣では、ろく〳〵に口もきけず、顔赤らめて俯く其度に、又しても學校時代が淡しい。六ヶ敷會話の番に當り「分りません」と申上げるのも殘念ながら、まるで異つた事、御答するのも御耻しい！など一瞬間に、とつおいつ、思案にくれた九死の場合を考へ出してすら戀しいものを、況して御慕うて居る先生の、面白い御講話に、御腹を抱へた時の事や、妙なピアノの音にうかれて、足を空にと舞ひ遊んだ時の事などを思ひ出しては、胸をゑぐられる樣である。がそれよりも自分の胸を離れないのは、郊外教授の歸るさに、友に迄妬まれた程に、學力も性質もよく合た友方と、瀧野川園に遊んだ時、過ぎた事や、行末の事など語り乍、つひ川邊まて來てしまふと、清な流に影を映した、一本の紅葉の見事さ。此まゝ歸るのも殘念と、永久に變らない心の程を、赤い紅葉に、なぞらへて、形ばかりの三十一文字を合作にし、差出た枝に結び付け樣とした時、美しく染め上つた紅葉が、四ひらはら〳〵と、見上げる四人の髪に散り掛つたので、「意味ありげね」と、互ひに嬉しい目を見合せた其時の事である。あゝ「去るものは日にうとし」との詞が今更うらめしい。

○岡の家　靜岡　加藤爲子

岡の家は朝戸出によし夜がへりは白梅月夜うた思ふかな。　國津澄子

春まだ寒き如月の始めてせう。岡の上に建てられし一つ家、家をかこみて幾株かの梅は、今花がほころびました。ほの〳〵と闇のとばりの裂け初むる時、柴戸そと押して出てし美しい人は、ああ何誰てせう。見渡せば彼方の七峯には、花か雪か、たゞ白う、里二十軒の家々よりは、うすう煙の立ち登りて……。この平和な景色を眺めながら、淡雪に小さき跡つけて、美しい人は岡をお下りなさる。そして、夕月ほのかに梅が枝に匂ふ頃、岡をめぐりて流るゝ小川の水の聲を聞きつゝ、御歌を思ひながら、うす墨もて描いたやうな御家から、美しい灯影の洩るるをさして、登つて御出てあそばす御姿が、目に見えるやう。美しい人、美しい人、澄子樣の外に誰てせう。……朝戸出によし夜がへりは……何といふ好いお歌てせう。私は幾度となく誦しては、樣々の想像をはしらせるので御座います。

四年七號の和歌を誦しゆく中、國津澄子樣のお歌のいたくも我が心をひきしまゝ。

お伽噺

巖谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は甲種の規定に據る。

二等

○波車

羽前國大山　松山秋海棠

秋の暮の事であります。笈摺を背負ひ、白の手甲脚絆に甲斐々々しく身を固めた娘巡禮が、ある磯村へトボトボと辿りつきました。

此頃この村では、毎日々々の不漁續きでありまするので、村の者は寄合を開き、額を鳩めて相談をしました。所がその中に一人の博學がありまして、「これは龍神樣のお怒に觸れたのに違ない。何でもお怒を解くには昔から人身供養を供げるに限るから。此度は是非犧牲を供げなけりやならん、だが、困つた事には犧牲に供げる樣な美しい娘は居ねえからナ」と、云つて有繋の博學も當惑致しました。何しろ磯村の事ですから、女と云つても男も同樣眞黑い女ばかりなのでムいます。巡禮は村の人々の何となく氣のそは〳〵してるのを見て變に思ひましたので、村の入口の茶屋に這入つて、婆さんに尋ねました。

すると、婆さんは白髮を搔きあげながら、實は恁々斯々の理由で、村の浮沈に關係る事だから、一同心配で此頃は夜も、熟睡する事はありませんと委細の事を話して呉れました。此話を聞いて巡禮は成る程尤もな事であると點頭まして、さて自分の事を考へて見まするに、親もなければ兄弟もない、云はゞ連にはぐれた雁も同樣の身の上だから、一村の浮沈に關係ことなら死んでも惜しくはない身體と思案を定めまして、

「婆さん、それでは妾をその人身供養に供げてください、妾は親姉妹もない身體だから、何卒さうしてくださらんかね」と云ひますと、婆さんは目をみはつて驚きまして、

「貴孃、滅想もない、那麽こと云はつしやれて、」と一生懸命止めましたが、巡禮は固く決心して奈何しても承認ませんので、村の者も、夫れ程云つて下さるならば、可愛想だが左樣云ふ事にしやう、これも神樣がお見捨くださらぬ證據だと云ふので、人身供養に供げる

事にいたしました。

巡禮は白木の船に只一人舵もなく寄せくる浪のまにまに沖へ沖へと漂ふのてあります。

岸には村の者が寄り集ひ香をたくやら念佛を唱へるやら大騷であります。

ドヽッと押し寄せて來た山の樣な大波に船は粉微塵に碎かれて巡禮の影も見えません。

すると不思議にも、今迄荒れに荒れきつた浪はがらりと治まつて、巡禮の死骸は浪の上に浮びました。波はむく〳〵と湧き出る樣に上つたと見る間に美しい波車となつて、鯛や比良魚を始め、種々の鱗族がお祭禮の山車を引く樣に巡禮を乘



せて引き出しました。

なーみ、なーみ、波車
治る波の上をひけ、
なーみ、なーみ、波車
乙姫樣の召しぐるま、
やんれ目出鯛、引け波車

と、音頭を揃へて引いて來る波車の美しさ、更にこれへ乘つてる巡禮は、白木綿の巡禮姿ではなく、立派なお姫樣と變つて居りました。

村の者の喜悦はたとへるやうもなく、巡禮のお姫樣をば神樣の樣に尊敬ひました。めでたし〳〵。

（評）土地の口碑にありさうな話てすが波車とは奇抜、また文章も甚なだらか敬服々々。

四等

○不能の望

駿豆・駿東郡長泉町久須見　山口鈴子

或日赤鬼が一匹閻魔樣の前へ出て「私も長らくお世話に成りましたが一度沙婆へ出て人間になつて見たい」と申しました、すると閻魔樣は「天性と職務を知らぬものは出て行つても惜しう無い」と申されました、赤鬼は「天性も職務も善く存じて居りますが修業の爲めに二三年行きたい」と云ひました。

閻魔樣も仕方がないから「それ程行きたければ行くがよい――が地極と沙婆とは萬事が違ふから隨分氣を注けねばいかんぞ」と宛然子に諭すやうに注意かせて愈愈お許下に成りまして是から赤鬼の送別會をお開きになりました、一番眞中に閻魔樣左の方に赤鬼右の方に青鬼と凡約五六百も座につきました、軈て閻魔樣は中央に設けてある演壇に上つて邊りをくるりと見廻して「エヽ今回赤鬼が人間に轉籍することに成りましたから多年盡してくれた勞に謝する爲め此所に送別會を催ふした次第であります」と趣意を述べて降壇した、拍手の音パチ／＼／＼。

つゞいて演壇に昇つたのは今度人間に進化する赤鬼であります眞紅の顏を毛だらけの手でなで廻し「只今大王の仰せの通り此度人間界に轉籍するお許を受けましたについては住み馴れし地極も今日限り鬼と云のも今日限り明日からは全くの人間であります大王には斯樣な盛んな送別會をお開き下さつて誠に有難うござります」と陳べて降壇しました、拍手するもの一鬼もなく滿場水を打つたように寂として顏をしかめて俯向いて居るものもあるシクシク泣いて居るのもある「赤君おれも連れて行つてくれぬか一番仲好しの君が行つて仕舞へば外に何も樂しい事が無いから」と青鬼が一匹大粒な涙を出しながら賴む「そんなことは大王がお許下にならぬからアキラメたがよい」と諫めて居ります其樣を見て居られました閻魔樣は外のものが又赤鬼と同じ考を起すと大變だと思はれましたから「何時までこうして居ても果ての無いことと自分々々に家へ歸るがよいと申されました。

そこで皆大きな鐵の棒をかついて歸りました。後に殘つたのは閻魔樣と赤鬼と一番仲よしの青鬼であります「青これから沙婆の入口まで送つて行け」と申されましたそこで連れ立つて出掛ました、漸次進に從て明る

う成つて來ましたから「もう此所らで歸らねば大事だ」と、ドンドン歸つて行きました、赤鬼は「先づ人間になつた」と獨言云ひながら來たことのない沙婆を彼方此方と飛んで歩くうちに日は暮れました「これはどうじや道を違へて地極へ戻つたか」と驚いて戻りかけたが人の話聲がするので立止つて家の中を覗くと矢張明いので「此所はやつぱり沙婆かしら……成程沙婆は變な所じや兎に角今夜は此家に宿泊て貰はう」と戸をガラガラと開けて這込んだが何といつてよいやら判らぬから茫然と立つて居ると家の亭主は眞紅な顔をして「此吐盜人奴」と天平棒をかついでブン毆らうとするから自稱人間の赤鬼は赤い顔を眞蒼にして逃げ出してドンドン走つていつたが、と或る家の軒下にかゞんで「これはどうも困つた仕方が無いから今夜はこゝに寢よう」と其の儘グーグー寢て仕舞ひました、夜が明けると早々飛び出して彼方此方逍遙て居る中に腹がすいたから「こりや困つた何かえゝ考はつかぬかしら……と考へながら歩む中餅屋が一軒目についた「こいつはシメた」と亭主の隙を覗つて居りました、すると何か用事が出來たと見へて裏の方へ行きましたから鬼は「此時じや」と云はぬばかりに飛び込んで餅を一抱抱へて飛び出した、亭主は此音に驚いて來て見ると餅の持逃だから「此の餅盜人」と追ひかけてくるから鬼は一生懸命に走つて林の中に遁げこんで「もう此所までくれば大丈夫だ」と思ひながら盜んだ餅をムニヤムニヤと喰つて居ると「おい赤鬼君」と呼ぶものがあるから驚いて振向と昨日送つてくれた青鬼がニコニコと笑ひながら立つて居るから「青鬼君はどうして麼那所へ來て居る」と尋ねますと「昨日別かれてから考へるに俺も人間に成つて見ようと成つたから出て來たがもう沙婆はいやになつたから歸らうと思て居るところだ」と申しました。赤鬼は「おれももう歸らうと思ふところじやそれじやあ一しよに歸らうと喰ひ殘りの餅を二鬼喰ひながら歸つて行つて閻魔樣に今までの惡かつたことを斷つて又もとの通り閻魔樣に仕へることになりました。めでたしめでたし。

（評）教訓的お伽断として一寸趣向の變つて居る所が面白く感じられます。

五等　○百合谷

三河　野の花

一

青葉若葉の匂ひ深く空はうらうらと晴れ渡つた近來稀

な好天氣、丁度日曜日でした。廣い遊歩園の中に備へられてあるテニスコート、遊道圓木、或はブランコ等に面白く愉快に遊んでいらつしやる三人の御姉妹がありました。姉樣は露子樣とおつしやつて十五、次は妙子樣とて十四、末のは百合子樣で十三、何方もお美しいお孃樣でした。三人は遊びあきて芝生で休みながらお話を始めました。露「ねえ百合ちやんお前は何の花が一等お好き?」百合「私はあの白百合よ、いかに彼姿のけ高いでせう、あの淸い香の心地よさ！私は年中お庭の中に咲かしたいわ」露「ほんとに百合ちやんは賢いとネ、あなたのお心やお顏も彼の白百合の如ですよ、おやあ妙さんは?」妙「私はあの白薔薇よ、朝露を含むで咲いてゐる有樣はまあ何といふ床しい姿でせう。私あの花を見るともう胸がすうつとして如何に心地よいか知れないわ、私はいつも斯樣思ふの！お庭の花壇にあるのよりもつとずつとずつと大きい直徑の一尺位もあるのをほしいと思つてるよ」百合「さう、露姉樣は何がお好?」露「私?私はネあの白菊！菊は私がいはないでも分つてるでせう。ね、これから三人て世に知れてないそれ等の花の名所を探しつこしませう、いゝてせう今度の日曜からですよ、初めは百合ちやんよ、今丁度百合の時期だからネ、次の日曜は妙さんてすよそれから私は秋にネいゝてせう」妙子さんも百



提灯屋(入賞五等)

南多摩郡 中島縫子

合子さんも「いゝわ、どんなに面白いでせう」露「ではすぐお父樣やお母樣に許して戴きに參りませうねえ。」

二

風は靜かに空は美しい薔薇色をした初夏の朝、洋服に佛蘭西靴といふいかにも活潑な愛らしい姿でお山をさして行く一少女がありました。是は誰でせう？それは彼の百合子さんでした。百合子さんは段々小さな山を越えてゆきますと、折柄一人の童子が草の葉を摘つて芝笛を吹きながら此方に來ました。百合子さんは直に呼び止めて「もし此邊に百合の澤山ある山か谷はありませんか」童子「へイそれは此道をズーと行きますとお宮があります、其傍に細い道があります故其道を行くと一人でに百合谷と云つて百合の澤山ある谷へ行けます。と山の子にも似合ぬ丁寧な言葉、百合子さんは嬉しくてたまらず何度もお禮を云つて山道を辿つて行きました。すると成る程お宮があります、百合子さんはそこで其傍の細道を行きますと、宵の明星のやうに一點二點と所々に清い白百合が咲いて居ます。百合子さんは益々うれしくなつてどん／＼進みますと、時時よい薫りが風につれて鼻をうちます。心を勵まして足の疲れも物ともせず山道を辿々やう／＼百合谷に着きました。見下す幾丈の谷間に咲きみちてゐる白百合の香はあたりに漂ひ、心は清絶幽絶の境を繞つてゐます。花は百合ちやんのお家の花壇にあるのよりはずつと大きくて美しいのです。それから百合子さんは此ことを何卒お父樣やお母樣や姉樣達に知らせたいが無斷で百合を折つては惡いだらうと思つて居りますと、白衣の裳長き天つ乙女が降りて來て、百合子さんの正直な心を大層お賞めになつて多くの白百合を下さいました。

三

日は早西山に落ちて山の端に月が光り初めました。百合の花は白う冴えて一入美しくあります、冷やかな風に百合の花は波うち、何處かで琴でも奏づるのか幽韻な音が聞えてきます。多分百合子さんと別れを惜しむ白百合が百合ちやんの歸りを送るために花の精がぬけいて彈くのか、或は天女の調でせう。仰げば美しい星月夜、百合子さんは手にせる白百合の香に醉ひながら、淸らかな聲で唱歌謠ひつゝなつかしい家路にと辿つたのであります。

（評）別にこゝと云ふ取り所はないやうですが、一體に奇麗によみました。

新派和歌

與謝野晶子先生選



◇規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る。原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は乙種に據る。

一等

新潮にのりてきませる日の神を迎ふるがごと君を見るかな

丹後國加佐郡河守町字新　鹽見千代子

二等

われみづから築きながらに悲しみぬうたがひと云ふひた黒の壁

芝區中門前一丁目十一番地　長谷川靜枝

四等

山門に登るきざはしほろ〳〵と木蓮ちりぬ有明月夜

山梨縣北巨摩郡安都玉村　白倉千代

秀逸

◎　伊勢　佐々木らく子

もろ共に夢と思はむ忘れむと云ひしうき日のまぼろしのたつ

◎　本所　秋山欣子

何となくはてに幸ある心地して小ぐらき野邊をわれは行けども

◎　山城　八田文子

しめやかに雨降る夜なり我妹子も汝もやつれぬ白菊の花

◎　佐渡　なみ子

透きとほる心のたまとはゆる火の球をつらねし戀の瓔珞

◎　大坂　鈴木ふさ子

指させばかつらぎ山とのたまへるうす紫の山にいなばや

◎　みなしご

病める身は紅さを見ても淋しきに白う散るかな一重の罌粟は

◎　青山　加藤花子

湯の山の橋に並びて少女たち水見てをれば月のぼりけむ

◎　伊賀　三浦しづゑ

暗き道熱やむ人のつく息をふとも思ひぬうとましき夏

◎　山梨縣　井上笹波

白鳩の胸の和毛に接吻て春のやうなる若き日をほぐ

◎　信濃　露花子

ふと思ふ落花の夕ふるさとの丘にわが見しうすいろどり

◎　廣島縣　國信操子

湖に朝月映る初夏の夜明けうれしき舟の人かな

◎　攝津　堺多繁子

鮎の子が夜床ふすらむ石籠の石よりさきぬなでしこの花

我夢の百の花咲く廣庭に白きおん衣の君を見しかな
　豐後　加納豐子

病して野山こひしや雲雀なく下に咲くらむ春のさわらび
　奈良縣　下陞すま子

つめたなる器ぞにくし折々は若き血湧けど冷やしてぬる
　伊賀　岡　花子

ほとゝぎす鳴きぬ橘かをる扉に思ひ詫びたるわれ立ち居れば
　遠江　菊笠みつ子

あしたかの大海見むと夏の水くらき野原を流れゆくかな
　周防　博　子

我が里は今日も淋しうさみだれて小ぐらし父のみ墓の道
　大坂　木村春江

夕立はわが里過ぎて君の住む山のあたりに遠雷す
　三河　富　美子

戀人は胡蝶となりて我胸の花に羽やすめありぬ日ねもす
　相模　鍋田靜子

面かげは皐月の大野おほひつゝやがてきたけり白き百合さく
　金澤市　高村安江

故郷を戀うる心よ春の日のさびしう去ぬる夕暮に湧く
　若狹　てつえふ

あめ降れば去にしことのみ思はれて灰するなり初夏なれど
　遠江　小林とし子

　丹波　白波瀨芳子

夏ハ風すゞしく吹きて山の櫻はらはら飛びぬ夕鳴る鐘に
　奈良縣　西田鶴子

すゞしけれ逗子よ葉山の松のみち日の夕ぐれを磯づたひして
　大阪市　木村花子

かゝる日はそよ風のごとわれによりなぐさめ給ふ君のこひしき
　佐賀縣　樋口御幸子

急ぎ行くうす盛いろの雲を見て世になき母を偲びぬるかな
　岐阜縣　吉田榮知子

あゝ皐月遠き野邊はたそがれて鐘の音低し山なき武藏
　山梨縣　有賀久代

わが心踏をもとめて森陰の道をあゆみぬ花散る夕
　横濱　富麻俊子

なつかしき島田を傘にかくしゆく從妹の袖は水色にして
　佐賀市　田中榮枝子

ほろ／＼と桐の花散るこのゆふべ琴はひけどもうたはうたへど
　大和　豐田秀子

白薔薇のごとくにくづれ捲き返る夕浪めでし二人なりきを
　京都市　山口京子

われ三年戀しき人の御名よばず御歌うたはず聞へて過ぎぬ
　大坂　山田眞子

游ずみの山のふもとに青葉みち雨にかすみて傘二つ見ゆ
　駿河　齋藤しづ子

水無月や青きすだれの影涼しなにやら鳴らす風の通ひて
　日本橋　森　茂枝

東山月みる人のかぼそなる眉にも似たる春の月浮く
　三河　宮田梅子

川舟にくまなき月を眺めつゝむかし語りに夜を明しけり
　三重縣　山田みれ子

金色のつばさをなしてしろがれの麥をく白馬幻に見ゆ
　秋田縣　三浦ふみ

瑯玕の玉をころがす音をして新樹をめぐる初夏の水

○　山城　村田政子
夏川のひゞきたへなる月の夜の水かみにして君は笛吹く
○　下野　下河邊なみ子
いみじかる佛の慈悲を知りつゝもあはれ女は悔ひ改めず
○　信濃　岩波二葉子
眞白なる頰にかかりたる黑髮に戯るゝごと春の風ふく
○　下野　三浦梅花
ほととぎすほのかに啼きぬ毛の國の古里を立つ火ともし頃を
○　尾張　むらさき子
心強くいひて別れし吾ながら只何んとなく淋しきやなぞ
○　長崎市　平田薫子
白桃の花を御額にまける神野末の霞にうすれてきえぬ
○　伊豫　曉子
白き絹にあけの糸もて縫ひとらん胸に咲くなるわが夢の花
○　下野　岡萩枝
行春の憂ひに疊る少女子の胸と咲きたり白藤の花
○　岐阜縣　吉田美知子
夜は更けぬしゞまにかへる天地にわが悲しみの胸をのこして
○　靜岡　加藤爲子
いかなればましろききみ手のたゆたふや十三絃のうたのみだれよ
○　岡山縣　廣江壽子
湧き出ずる岩井の清水酌みあげて御墓きよめぬ白百合の花
○　茨城縣　花田幾枝
路かどの石の佛のひざ近く一本匂ふ姫百合の花
○　信濃　太田きし女

などり（入賞五等）大坂市　今西こゆき



吾が胸に暗闇つぐる鬼に似ていまはしと見ぬ蝙蝠のむれ
○　羽前　杉葉女史
大山毛欅の森の眞中のひくき家うたへる聲のなつかしき人
○　福島縣　坂田銀鈴
わが思ひかくてつきせぬ細き糸紅に染めつゝ手繰ると思ふ
○　長野縣　小林しん子
木の切れにかげろふとまり流れきぬ夏の小川に風わたる朝
○　熊本　ふさ子
戀に病むいたてつゝみて夕ぐれのさびしき野邊をわれ一人行く
○　下野　梅澤哲子
切り結ぶ太刀の閃き散る火花金鼓轟く夏の日の雨
○　兵庫縣　富士田章子
天上の神がみ靈のわかれとも君にまゐらす白ばらの花
○　熊本　かたえ子
桐の花うすむらさきに行く春をさきぬさびしき山の家かな
○　京都　柴山ゆり子
仁和寺の紫つゝじ丹の門は春の御神の御裳の模様
○　上總　山口いく子
大杉や山の麓の井のそばに少女立へ如藤の花咲く
○　奈良縣　我澤素枝
すみれ花もろ手にもちて罪もなき稚兒は眠れり搖籃の上
○　本郷　足利じゆん
來ぬ君をおもひ悲しむ夏の夜に一聲きゝぬ山ほとゝぎす
○　備中　大西好子
眞晝野や紅き帶して紫の日傘して行く少女づれかな

短篇小說

小栗風葉先生選



△規定　純潔清新なる短篇小說を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以内とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

二等　子持

北海道　都士子

七年目に逢ふた八重子さんは、某銀行支店長の夫人、五つになる可愛らしい坊ちやんに、母樣と呼ばれて、お膝に、二つになるお人形のやうなお孃樣をお抱きなされて、高い丸髷のお美しう、銘仙のお召物に、まア黒繻子の掛襟、帯もゆるやかに遊ばして、此姿、一生ミスよと仰有た山崎知事の八重子さんと思はれない、

『私、地位も名譽も、いりません、良人は親切に致しくれられますので、子守やら下女やらて、之れて、まあ、理想通りやつて居ります』、とお優しいお顔色以前に比較べると同じ人とも思はれぬ白さ。

雨戸の敷居に玩具の汽車が二つに、帆柱の折れた汽船が並べられ、瀬戸の兵隊さんが三人立つて居る。

躑躅の間に遊んで居た坊ちやんは、大い紡績絣の裁立に白い西洋前掛を當て、

『母樣公園へチ、加藤さん（書生）とチ？チ、』

『御用がなかつたら連てつて下さいとお云ひなさい』

『うん』と緣側へ上つて！とんとん！とすぐ又、

『駄目だア加藤さん誰か來てゐる』と鼻にかゝる。

『それぢや女中に連れてつてお貰ひなさい』

『いやだア』と敷居に立つて障子を押したり引たりして居たが、何か思ひ立つたやうに母樣の肩へもたれ、

『富美ちやん寢坊だチ』とぽんと頭を叩く。

『之れ、いけません』と、幼い方の泣き出すを恐れるやうに頭を撫て、

『さあ、公園へ連れてつてお貰ひなさい』と早口に

『坊さん、竹がお伴致しやす』と緣側に膝をついた。

『ねいや、機械體操出來ないもの――』

『おほゝゝ、そうだチ、ねいやが出來なくても他の方が澤山して被居るよチ、……守夫、東京の靴履いてチ、見ておいて』、靴と聞いて莞爾として、きまり惡そうにじりじり室を出て走けて行く。女中は靜かに、一禮して玩具をさらつて行く。早玄關の方て『桃太郎さ

んのお伴には――』と高らかに聞える。

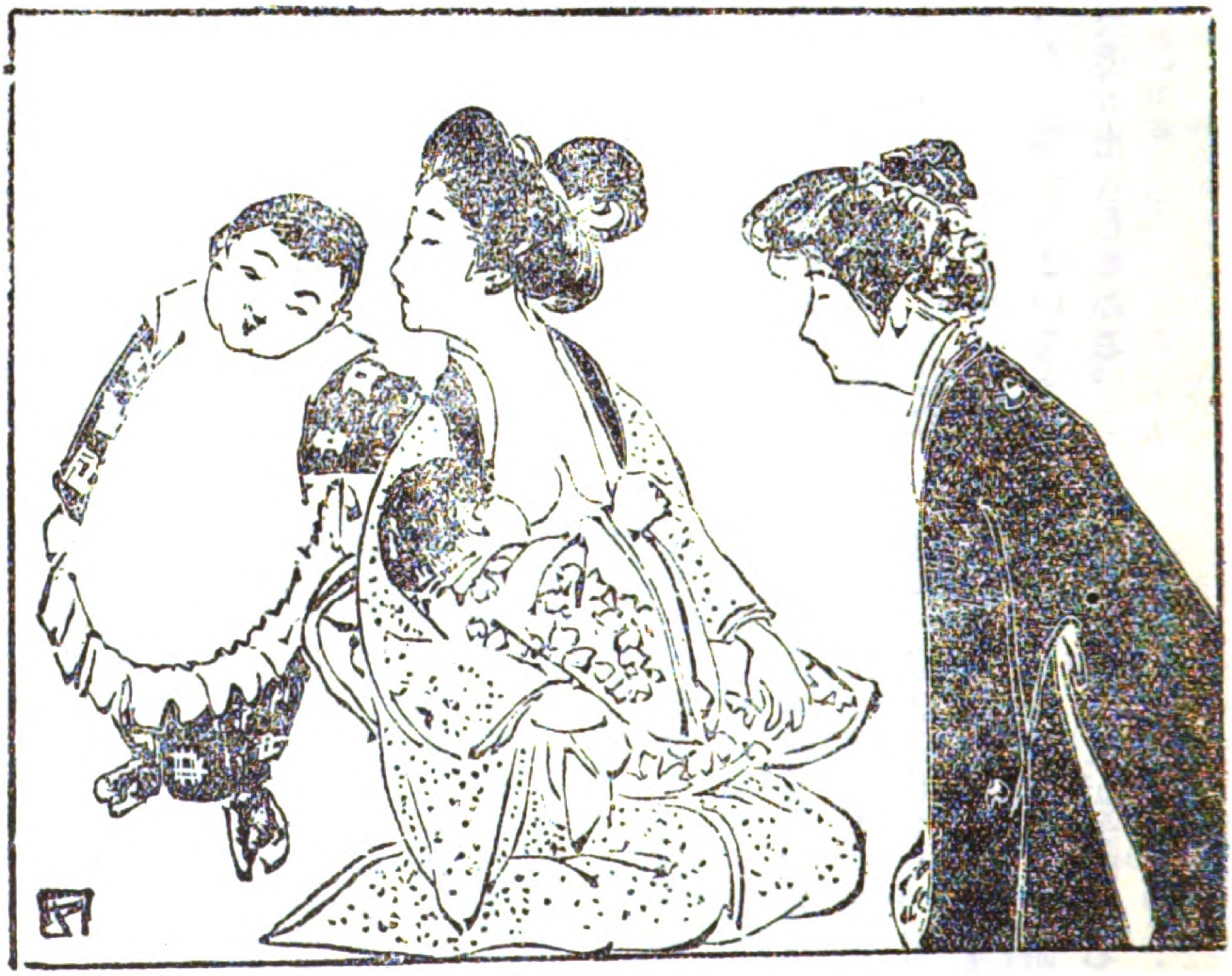
『まア、お可愛らしう御座いますこと、如何にお樂しみてせう』、と心から出た。

『いゝえ貴女、亂暴で仕方ございません、機嫌の好い時は可愛とも思ひますが、さア一つ調子が惡くなりますと手の附けようも無くなりまして困るんですよ』。

『男のお子樣ですから……其れがお樂しみて』

『今少し聞き分ける樣になりますとようございますが只今ではいたづらばかり致しまして……』

『すぐでございますよ……今に學校にお出ましになりますし……』、お膝のお子さんは心地よげに眠つて。



『一寸、御免遊ばせ、寢させてまゐりますから』

坐敷を出なさる後姿、裾長う……好い奥樣……隨分活潑で被居したが。變るもの……いつてあつたか、下村さんと三人遠足した時、田舍路で希望やら理想やらを仰有つた八重子さんは、一生、ミスで、英國へも行き未來は私立學校を建てゝと仰有つた。

尤、英國婦人と親しくして被居した故か。其時私は反對で、良妻賢母主義。女大學流。常に母から云はれる通りを云つたが、下村さんは、世の中は種種有るので好い、とお云ひなすつて、笑つた事が

あつた……今は下村さんも醫學士夫人、……私の身も母さへ生きて居て下されば過往に縁も付いて居るのだけれど……いや、思ひますまい……望むだけ學校へ入れて貰つたし、父娘と女中で平和な生活、不足はない。

『失禮致しました、』……ふと氣がついたようになる。

『子供の寢て居ります間が私の世界で實に樂なんてございますよ、』と今一人の女中と何かお運びなさる

『何卒おかまひなく』

『え〻別に何も……之れから染々昔のお話致しませう今日は御緩りと遊ばして、』とお寫眞も出される――拜見してゐると矢張り可愛のが目に着く、無理に願つて守夫さんのを頂戴する、何て可愛お子でせう……理想通りやつて居ります、と仰有つたのが今又聞えるやうな氣がする……私は一人貰つて育てようか……いや貰ふには未だ早いかしら……でもどうせ私は……貰はなけりや――

向ふ坐敷の軒の燕の巣に氣がつくと雛がちよいちよい首を出す、親が餌を運ぶのか幾度も出入してゐる。

與へられた境遇に安住すべき女性の弱い運命が陰に、子を持つた人妻の思想や擧動が巧みに寫出されて居る。辭の無い落付いた筆付も好い。（評）

四等

○辭職

本郷筆子

時も春、人の春も短かいとてか、辭職する者が多い。それは、何時まで事務員風情に、甘じ居らる〻てはなし、大方嫁入つて新家庭の人となるのでせうと、凝と行く人の後を見送る毎に、云ふべからざる寂寥が襲ふて、盡せぬ涙がほろ〳〵と溢れます。殊に突然、親しい三輪さんが行かれて後は、萬事私は詰らなくなつて幾度、辭職々々と口に爲ながら、相變らず局に通勤して居りました。

或る日例の如く、擔當の機械で通信して居つた。非常に電報が輻輳して、朝から一寸の暇も無い、それに時時地氣には成るし、可成困難の關を漸々一方付けて、ほつと息を吐くと、二十餘の音響機の音が今更、雷の樣に、轟然としつ〻、昇降器はガラ〳〵とけた〻ましく動き、信使が室内を馳る、騷々しい事何と形容しよう

「鳥渡、又石岡さんが辭職するのだつて」

隣りの座の友が矢張淋し相な顏て云ふ。

「え、又!? 厭だわねえ……私も休めて了はふ……」

「貴女は既う、義務年限が過ぎて居るんだから可いけ

れど、私は……」と溜息、あゝ未だ一年の義務があるなど、私は此友の上を思ひ遣つて、猶更愁然と爲た。近頃私は老朽ちたとても云ふのかしら、眞逆那麽年ではないけれど、然し、何の樂しみも無く、何の望みもなく、唯無意味に出勤し、退局時間にも格別嬉しい顏もせず、黄昏の大路を、とぼ／＼と歸る。宛も、一點の光も無い穴藏の中を搔い探ぐつて、漸々一方の出口を見付けたものゝ、萬一此處を放れて、再び什麽運命に逢ふだらうと、ぐず／＼手を引込ませて未だ、暗の中にうろついて居る樣なものです。

「遠山さん連呼てるぢやないの」

と隣から注意され、はつと我に返へると、

『受信電報、受信電報』、と頻りに音響機は鳴る。

偶と向ふを見ると、苦い顏をした主事（吾々の監督者）の眼とばつたり逢ふ、何だか私の胸中を見破つて、なまけ者と一喝された樣な氣がして一人恐入つて、受信する、頭が變で少しも、受られません、後で叩く送信器の音が、嫌に耳に付く。

突然にドアが開いて、小使がノッソリ、主事に何か云ふと、「遠山さん、面會人だ相です」、と主事が云ふ。

誰だらう、私は首を傾けて、階段を下りますと、其處に茫然、三輪さんが佇んで居た。

「あら、三輪さん！」

「遠山さんと、」三輪さんは、私の手を取つてほろりとする。

「奈何なすつて、善く被入つたわね、私貴女がやめてから淋しくつて……」

「私ね又、勤め樣と思ふのよ」

三輪さんは元氣が有りませんでした。

「え、だつて折角何したのに貴女」

「辭職したつて面白い事も有りませんわ」と淋し相に微笑んで、「それでね、お別れに來たの」

私は驚いて「お別れつて、此局へ被入るんぢや無いの」

「眞逆今になつて、來られや爲ないわ」

「ぢや何處へ、」「相州の方！」と、調子をかへて「ねえ、遠山さん、私が勤める事、默つてゝ頂戴よ」と、顏を赤らめる、「そりあ、云ひませんけど、何處なの小田原大磯？」と又尋ねますと、「まあ其樣な處でせう」と笑ひながら、やけに洋傘の先て敷石を突く。やゝあつて三輪さんは「ぢや私失禮するわ宜敷ね」

「そう、それなら其局へ行つたら屹度知らせて……」

私は少し物足りない、三輪さんは默つて通用門を出ま

した。一月程見ない内にまあ痩せた事、……。

折から溫い南風が吹く。三輪さんの袴に砂ほこりが濛と立つ。

噫塵の世は奈何しても私等が獨身の限りは、自活すべき運命を吹き付けると見えます、何だか私は、勝ち誇つた樣な心持て、三輪さんの行く影を、見送りました。

佳い作だ。三輪さんとの親交の情を今少し前書して置くと、末節の反感がズツと强く利いたのに、是だけが惜しかつた。（評）

五等

○五月雨の闇

凡俗庵主

『お池ん中て、溺れて死んだんてすつて』

といつて濱ちやんは、灯影に背けて臥かした人形も寒からうと衣縫ふてゐた手を休めた。

『お祖父さんなの？お父さんなの？』

と問ふたのは、二つ三つ劣るかと見える垂髮のお鹽ちやんである。

『お父さんよ朝夙く——未だお月樣が淡く山の端にある時分よ、お池へ往つて菱の實を採つたら……』

『あら、鯉ぢやなくつて、伊佐ちやん家のお父さんは始終鯉を擔つて賣りに來るわ。あたいん家も買つたことがあつてよ。——お池なら鯉ぢやなくつて？』

『どうてすか？それても菱の實を採つて、舟から御池へ落つこちて、そうしてね、ばつたん〳〵藻搔いて居ると菱の根が搦んて、沈んぢやつたんてすつて、皆そう云ふわ。……ねえ、姉さん孰つちてしよう？鯉でしようか？菱てしようか？』

と濱ちやんは机に頰杖ついて頸垂るゝ女に問ひかけた。

『鯉てしよう？きつと』

お鹽ちやんは答を待ちかねる。

『どちらてせうねえ、ホヽヽヽ』

と女は床の間の花瓶に投挿の、杜若の寂びしいのを見た。

『ても、伊佐ちやんのお父さんは水泳を知らないの？一寸』

『そりや知つてるわね。知つてるけれどもね、丁度お酒に醉つ拂つて居たの』

『まあ困るのねえ』

『たいそうお酒を召し上るんですつて、伊佐ちやんよくそう云つていたわ』

『誰れか見てゝ助けて上げなかつたの？』

「あゝ、朝夙いもんだから、誰も通らない……」
「とう／＼死んぢやつて？」
お盥ちやんの話は後へ戻つて、鈴の様な一重瞼は羞明そうにして瞬き敢えぬ。
「あゝ、死んぢやつてよ。後て引揚げたらお水を一杯呑んてゝ、お腹が膨れて、白い眼をむいてたつて」
「可哀そうねえ、伊佐ちやんも可愛そうねえ」
また降り出したか、裏の芭蕉の葉を音を立てゝたゝいて居る。
濱ちやんは、袖口を絎けかけた小さい衣を手に取つた。盥ちやんは、きちんと手を前に重ねて、紅絹裏くゞる針の運を見つめて居る。
静かなる五月雨の夜の闇を掠めて、ふくろの一聲。
「あれ！」
と云ひ合せた如くに、二人は突と女の傍に寄添ふた。
「なあに、あれは？」
と、お盥ちやんの聲は優しく震へを帯びて居る。
「わたしも吃驚した。盥ちやんが、あんなに馳け出すものだから……」
「だつて、おつかないんだもの」
と濱ちやんは稍落付いてる様である。

「いやだね、あの聲……ほろ／＼つて、やな聲」
「裏の藪の方から出て來るんてしよう。いつても鳴くの、わたし寂しくつて／＼、いつても寢間なかて、小さくなつてるの」と濱ちやんは女の方を向いて、
「でも今晩は好いわ、姉さんに抱き子して貰つて寢るから好いわ。姉さんそうして頂戴。」
女はわづかに點頭いて見せた。
「はあちやんはいゝのねえ。……姉さんが、あたいの家へも歸へつてくればいゝんだけれども、母さんが……」
と鳥渡澱んて、
「義姉さんがどうしていちや不可いの？つて尋ねても何にも言はないて、たゞ、義姉はいゝ方だけれど身體が弱いからつて、さう言ふの。……義姉さん、どつか御病氣？それならば、あたいの家に居たつて療るは、ですから、明日歸つて頂戴ね？」
女はほろりとなる。
「又鳴いてよ。いゝ、しそちやん」
「あの聲ぐらゐはいゝけれども、お池がおつかないわ伊佐ちやんのお父さんのお話を聞いたゝんだから」
「だつて、それは、ずつと山奥のお池よ。こゝのお池ぢやなくつてよ」

『けれども‥‥』
『わたしも怖いわ‥‥』
『おや、ずつと遠くて鳴いてよ』
『さうぢやないわ。だつて、あの榎はお宮の松よりも大きいんだもの、きつと榎の間へ潜つたんてせう』
『それで遠く聞えるのか知らん』
『彼の榎は、お七五三なんか張つてあつて、よく人が参りして拜んてゐるわ。‥‥何だつけね、あゝ縁切の榎つての』
『縁切り榎つて？』
『あの榎のことをさう云ふの、私も何だか知らないけれども』
『縁切り榎つて、なあに？ 義姉さん』
と、しをちやんは女を見上る。
女は忍びずなつて、目を瞑つて仰向く。
『何てせう、姉さん？』
濱ちやんは疊んて問ふ。
良久して、女は二人を見比べて、
『それはね‥‥』と白い手を鳩尾のあたりに加へた。
『それはねえ‥‥伊佐ちやんの樣に父さんが亡くなつたり‥‥』
『そしてどうするの？』
『そしてね‥‥あの、親と子が別れたり‥‥それから、あゝ、矢張、伊佐ちやんの樣に、お父さんが亡くなつたり‥‥さうさせる神樣の樹なの』
『不吉い樹だねえ』
『義姉さん、あたいの家へ、どうしても歸らないの‥‥？』
ふるへる袂にしをちやんの脊をさと蔽うて女の姿は崩折れた。――雨を誘ふ風が一しきりさつと榎に荒む。

心持ち鏡花式に取つた、稍故とらしい所も見えるが、左に右く作者の顯さうとした寂しい情、其れは充分に出て居る。會話も手饒れて居る。(評)

秀逸

○妙な家

井上笹波女

村の者が三人と集まつた處で浦田屋の話が出ると
「彼家でも太平さんは好人物だが嬶が氣に食はねえ」
と誰かが云ふと外の者は、
「全く左樣だ」と乾度合槌を打つのがお定りてある。
浦田屋は村の中央にあつて奥行の馬鹿に深い家てある。天井も大柱も煤けて居るので家の中央は光線が鈍

新妻　　伊勢　河村富子



くなつて妙に薄暗い。田畑も相當にあるが家内が無人なので他人を置て百姓してもいゝが夫れては損だからと云つて多くは小作に出して置く。主人の太平さんは白髪頭へ向ふ鉢巻て出し殘した二三枚の田を相手に日を暮して居る。私などがどうかして道て逢ふと氣の好ささうな聲で口淨瑠璃を語つてるが常だ。太平さんの心の平和は斯んな時と野良に出て稼いてる時ばかりて日が入つて月が出て家へ歸つて閾を一歩跨ぐとすつかり別の心になつて仕舞ふのだ土間をこつそりそろつと後門の流川て足を洗ふ、少しは踵あたりに泥が付いて居てもかまはない。着物を着變へると馬鹿大い體を前に屈めて濡鼠の様な風をして爐傍て手刻みの煙草をふかし作らソッと女房お作の顔色をうかがつて居る。

子供は三人て末が男、外は女てある總領は十年ばかり前に他家へ嫁付けたが亭主が氣に入らないとか云つて歸つたまゝ今も家に居る。二番目も一昨年の春近所へ嫁いたが財産のないのも前から知つて居ながら何とか理屈をつけて其年の冬大きな腹を抱へて歸て來た。生れた子は無論先方へやると云ふ約束の下に離縁にはなつたが生れた時一月ばかりの間是非育て呉れと人を賴んで先方から云つて來たが、「人の子を育てゝやる理由はない、乳を搾られれば自分の子の體が弱くなりまさあ」とお作が不承知て産湯

もすまないものを其晩の中にやつてしまつた。
昨年の水害後の秋も田畑がみんな流れて貧困者でなくても其日其日の食べ物にさへ困つて居る中を自分の家では米俵を倉へ積んで置き乍らお作さんは小作人の處へ自分から推しかけて。
「穀米で出せないなら金でいゝから出して貰ひますべえ」と云つて一日座り込んで居たさうだ。だから村の人誰一人として良く云ふ者がないばかりでなく家へ出入する人も先代の十分の一しかない。向き合へば浦田屋のおばさん位に云つて居ても陰では鬼婆とか强慾婆とかより外云はない。
同じ村に住んで居ながら私などもめつたに行つた事はないが村の共同水車の普請の事で或る晩行つた事がある。土間へ這入ると折惡く夕飯の最中だつたが出直して來るのも面倒だつたので上りこんで餘り好きもせぬ煙草ではあるがスパリ／＼やり乍ら爐傍で待つて居た暫時くすると太平さんは口を拭き乍らソッと私の向ふへ座つた。
「毎日よく精が出がすねえ」と云へば太平さんは頭をかき乍ら、
「どうも年を取つていけましねえ」
用談―と云つて二十分もかゝらなかつた―がすむ頃二番娘が奥の間から膳やら飯櫃を運んで來る。
「誰かお客樣でありがすかね？」
「ハ、エ、お客樣ぢやあねえが、……昨夜先生が歸つただあね何だか家中が忙しくて仕事も何も出來ましねえ」
「先生つて？」と私は小聲で云つたが思ひ付いた。夫れは前に云つた末の男の子の事である。名を正則と云つて小學時代には頭がよくて常に優等を欠かした事はなかつた。卒業の時も家に遊ばせて置くのは惜しいと云つて校長樣が村の學校の助教に入れた。翌年師範の入學試驗に應じた處が二番の席順で入學はしたが外に何か惡い事があつて本入學の時退學を命ぜられた。然し家ではそんな事は何にも思はぬ。兩親も兩姉も先生先生と呼んで食物さへ一緒には食はない。僞か眞か。奥間では座蒲團を三枚も敷て座つて居る恰で○○の樣だと口の惡い村の若者は云ふが兎に角隨分鄭重に取扱つてる樣子だ。今は東京の私立中學とかに入つて居る相だ。
息子の話が出ると勝手で働いて居たお作さんは落窪んだ眼を光らせて大きな聲で、

一「私らあ今あ苦勞もして居がすが二三年たちやあ先生が出世して大學の先生にても何てもなれるとおつしやりがすから。まあ。はんで稼いて學費を送るてござんす、ふんとに私らが家にやあ過ぎた子てござりがすよ。肥場へ鶴たあこの事てござんせう」

餘り馬鹿らしいので話の切りを機會に私は暇を告げて出た。そんな事が在てから先日東京から歸つた人の話に神田邊の或る待合から正則さんが藝者の手を引て出るのを見たと云ふ事てある。家ては二人の姉が先生の學費の足しにするだと云つて毎日機の音をさせて居る。出戻り娘―總領は三十四―が二人もあるに係らず太平さんは元よりだがお作さんも心配さうな事などは色にも出さぬ。

「今に先生が大學の講師とかになつて見ろお前たちもどんな家へでも嫁けるぞ」とすまし込んで居る。

田舎には恁う云つた家が能くあるものだ。主人の太平も家内のお作も可也寫されて居るし、殊に此所へ目を付けた作者の觀察が頼もしい。今少し一體の描寫に肉が欲しかつた。私といふ一人稱を用ひる必要は無い。（評）

○或夕

丹後　阪井峰子

夏の日は西に傾いて、金色の光を海になげて居る。涼風が絶ず袖を吹いて、心地がよい。今田光雄と自分とは、今故郷の海邊を逍遙ひて居るのである。「川島君」彼は思ひ出した樣に自分を呼だ。「何」「君は此頃の宮城の行ひをどう思ふ」「淸子樣と、怪い關係でもある樣だ子」「僕も左樣思ふて居るのだよ」宮城とは、自分等と同級である。淸子は自分の家の隣りて、今年十八、某女學校の三年級の生徒である。「君昨日は彼方で、二人水泳して居るのを僕が見つけたよ」彼は得意げに言つて、眼鏡越に自分の顏をみる。「然し君水泳ぐらいどうてもない子」「それがさ君、海の中て負てみたり、抱てみたり、まるて小供の樣な事をして居たのだよ」「そうか、」自分は生返事をした。自分は彼等の事を思ふと、どうしても胸が安らかてない。自分が書齋に居ると、度々宮城が淸樣家に遊びに行く。そうして、淸樣と二人門に出てゝは、樂しげに話しながら、肩をならべて歩いて居るのを見ると、氣が焦々する、彼等が自分にわざと見せる樣に、自分には思はれるのである。其度毎に宮城がいやになる。なぜ自分は彼等の中のよいのをみると、不快の念が起るのてあらう。自分は決して淸樣に戀はして居らん、亦戀してもらわふとも思はん。何も自分と關係があるてもなければ、隣りてはあれど、一度も優しふ話をした事もない。それに宮城と淸樣と

は親戚の間柄である、だから中のよいのは當然である。例ひ又彼等が戀の中にせよ、自分には現に相愛せる美しい、今年卒業する橘靜江が居るではないか。「早く成功して下さい、そうして互に樂しく暮す事の出來る迄、妾は如何なる誘惑をもうち破て、待て居ますよ」と、優しう言つて袖にすがつた靜樣が居るではないか。人はどうてあらうと、自分には優しい戀人が居ると、自分て自分の心を叱つてみる。然し靜樣とても十九。それに、靜樣の村にも醫學生が居る、或はそれと關係てもしないかと思はれる。噫！然し靜樣はそんな女ではないと此方は安心しても、やはり宮城と清樣と中のよいのを目前て見ると、人の事だと思ふて居れん。自分は不快て〳〵てならん。そうして一層宮城がいやになるのてある。羨やましいのかしらん。自分の腦は、種種の思ひ出にみだれた。「オイ、君隨分考へこんで居るじやないか」彼は不意に呼んだ。「アノ、一寸と此入日の美を詠はうと思ふて、種々と考て居たのだ」自分は外の事にまぎらした。「其れならよいが、或は君が清樣に戀てもしてはゐないかと思ふて」「馬鹿な……」自分は薄く笑た。折柄晩鐘の餘韻長く響いて、日は全く入りはて、海士の榜聲髣髴に聞えてくる。波は絶ず磯に寄せて居る。どこからか、少女の清い歌聲が流れてくる。自分は。目に入る物がいやになつた。「君歸らうか」自分は今田を促した。「では歸らう」自分等は話しながら、そろ〳〵と吉野橋の傍にきた時、橋のらんかんに寄つて居る男女がある、無論宮城と清樣とだ。自分等が近くに居る事はきづかず、何か一心に話して居る。「オイ、彼方に居るよ」彼は低い聲てさゝやいた。「オ、」「驚かしてやらうか」「いや、いかん」自分はとめて、此處をすたこら通りすぎて、村近くに至り、今田と別れ、家に歸て、火もともさず机に力なくもたれた。噫！今何を話して居たのであらう。自分はひとり心を惱まして居るのてある。どうしても、關係のない人の事だと思ふて居れん。自分の權利を侵された樣て、不快て〳〵てならんふと低い話聲が耳に入つた。それは書齋の窓外の、大工小屋からてある。時々低い笑聲がきこゑる。自分は思はず、されよとばかり、かたく唇をかみしめた。そうして、噫まゝよ、人の事だ。世間には幾人もある。と、思ひなほした時は、早や清樣は處女てなかつた。

戸外は寂として聲なく、夜は一刻〳〵と更てゆく。

戀して居る譯は無いと思ひながら、何と無く動かされる感觸を書い

たものだ。面白い。が、書き方が拙い。（評）

○懺悔

神田　尾立みき子

私は幼少い時兩親に死別れ只一人の叔母の手で育てられたので、姉妹もなく孤獨な身である。其の孤獨の淋しさを慰藉めて吳れる只一人の床しい友があつた、それは私の育てられた叔母の子息の俊雄さんてある。なぜか私には此の俊雄さんが同胞の樣になつかしく、同胞と云ふものが有つたならば斯うもあらうかと思はるる程睦じかつたのてある。

私が十五歲の春を迎えた時俊雄さんは中學校を卒業されたので、何か專門の學を修めると云ふて上京されたのてある。それからは只懷かしい手紙の交換に友情を暖めて居つた、俊雄さんも以前に變らぬ優しい筆に胸の奧を仄した玉章を送つてくれた、けれども其の時の私の心には戀の愛のとなまめかしい心は露程もなく、男文字の優しい美しい玉章を見て人知れず胸を躍らすと云ふやうな事は夢しもなかつた、從つて返信なども友達に出す其れの如く冷靜てあつて、情の焰を燃す樣な文字は少しもなかつたのてある。



花見茶屋　松山市　若葉

それから私の十九歲の時に俊雄さんは目出度專門の學校も卒業されて、衆に拔出る斯道の才は社會の注目する所となつて、絕世の秀才と賞讃の聲は騷しかつたのてある。遠く隔つた私の耳にも其の噂が入る樣になつた、其の時私の胸には嬉しさがこみあげて來て、急に懷しいと云ふ念がむらむらと起つて來ると、以前の返信がなんだか物足らぬ樣な心地がした、もう其の時は俊雄さんからの手紙は斷えて居つたのてある。

それから懷しさのあまり例にない表情に富んだ手紙

を送つた、けれども返事は來なかつたのである。心も心ならず私はいら〳〵して居ると思ひもかけず俊雄さんは既に結婚されたと、其の奧樣はさる良家の令孃であると云ふ事を聞いた時、私の心の奧からは一種云ふべからざる不快の念が湧き出し、何か自分のものでも奪られた樣な、口惜しい樣な、腹立しい樣な思がむらむらと起つた。

それからと云ふものは、私の心は增々亂るゝばかり、戀しいやら、恨めしいやら、憎さも添へば、あゝあの人がなかつたならば私の胸もこんなに苦しい思はなかつたてあらうものをと思ふと、俊雄さんはひよつと病氣にてもなればいゝが……若しそうなつたら私の心は爽快するてあらう!、と、心はいつか咀ふともなしに其の人を咀ふ樣になつた、戀に擒れた女程恐しい者はない、女心の淺果には自分の同胞と賴んだ其の人をも咀はなければならぬか、あゝ勿體ないよく自分は咀ひ死に死なかつたのか、噫それにしても意外、まもなく俊雄さんが病死しようとは……私は全く夢の樣て若しや私の念が屆いたのてはあるまいかとは思ふものの、今更其の恐ろしさに肢體はわな〳〵と震ひ出した私は何んと云ふ恐てあらう、俊雄さんの病死は私が咀つた爲めてはあるまい。全く偶然の事てあらうが私の心の罪は決して消えるものぢやない、俊雄さんの遺骸も嘸私を恨むで居るだらう。世擧つて俊雄さんの病死を惜しむにつけ、多くの想を此の世に殘し最愛の妻子を殘して空しく他界の人となられた俊雄さんの無念、妻子の嘆きに思ひ至つては自分の罪は增々大きい樣でたとへ自分の胸の奧は殘りなく消え去つたとは云へ、あゝよしない人を恨むだのだと悟つて見れば、恥しいやら面目ないやら慚愧の念はいよ〳〵高まつてあゝすまない事をしたと思ふにつけ、昔睦じかつた有樣が目前に浮んで來て慕しいやら、懷しいやら、淋しい哀しい心地に襲はれて私の眼からは涙の滴が限りなくなき人の思を胸に傳えて行くのてある。果ては私は病床に呻吟する身となつた、あゝ之が罪、報てあらうと思ふと私はこのまゝ永劫の眠につきたいと思つたけれども天罪未だ身を滅さなかつたのか、圖らず今總てを神の御前に懺悔する事が出來た。あゝ今日からは私の身は爽快として諸姉樣との交際も永久に出來るてしよう。

何も懺悔して安心しなくとも可い。此の逆情に燃しい人間の生命があるのだ。他に奪はれた戀しい人を咒ひ殺して其死後に取付て泣叫んてこそ、痛切な人情の味ひはある。そこに生た小說がある。（評）

日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以內、用紙前同斷、一人一章限り、投書締切毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

三等　○日記のまゝ

栃木縣　惠女

十七日。木曜。ひろ〳〵としたあい色の空またなくうれし。下舘の藥種屋來る、（一）杏仁水三听（二）クロヽホルム一廾（三）イルコチン一弖（四）沃剝一廾（五）酒精二廾（六）マルシアスターゼ三弖（七）苦丁半打（八）單舍一打（九）十綿花二包右の通り注文す。今日は患者が八十六人もあつて、あまりせはしかつた爲、消毒しておいた器械を皆さびらかして、不注意だとしかられる。又キシロールの口を忘れてしないでおいたので、これもお目玉。午後、水沼から來たヒステリー患者には、妾もホト〳〵閉口した。

十八日。金曜日。はれ。今日はそろひも揃つて結核患者が四人とは、不思議でならない。あゝこの人達は遠からずしてつめたい人となるのだらうかと思ふと急に悲しくなつた。外來患者が七八。內男七分。

十九日。土曜。半晴風少し吹く。午後星の宮に產婦人ありて、若先生往診す。その方はもう三日も苦んでゐるよし。どんなにかつらいでせう。私はお產でなくなられた姉樣の姿が、あり〳〵と目に浮んで泣いた。夜下舘から荷物とゞく。又明日も大手術があるかと思ふと、いやになつてしまふ。患者の數。七二。內六分は小兒。

四等　○小女日記

埼玉縣大里郡玉井村　中村勝子

ほんとに小供の病氣は何より困りますよ、どこがわるいのか、ちつともわかりませんて――自分がわるい方がよつぽどましだと思ひますよ。などゝ話してゐるのは母親らしい、まこと母の身になつたらさう思ふだらう。血をわけし我が子だもの。あゝさるをわが母は何故に私を置いて家出したのだらう、母樣は私を可愛とは思はなかつたのでせうか。いゑわが子ですもの、可愛にはきまつてゐる、しかし何故に身をかくしたのだらう？私にはわからない、あゝ私は何年たつたら母樣とよぶ時がくるでせう。――と思ふと悲しい。九時半床に就きたれど、母樣の事が氣になつてよもすがらねむれなかつた。

（評）一篇ひきしまりて冗句なし。妙手。殊に小兒の母の詞よりして、ゆくりなく亡き母を追想して悲むところ、自然にして感情ふかし

四月八日。友を誘つて歸るさ、上野驛にて汽車發着表をみて有しに、突然後より「姉ちやん」と袖に縋りし者あり。みれば髮お稚兒に結びて、立矢に帶しめし十才程の見知ぬ少女。人違なるをしるや「アラ…………ご免…………」と顏赤めて、羞しやかに去し後姿、不思可愛さに見惚れぬ。汽車中には、丸髷結ひし人の三才許りの小兒抱けると乘合ふ。赤毛を少し立たる小兒、妾を見てはニコ〳〵笑ふに、「抱ッこ」と手を出せば「イヤイヤ」と母の懷中に顏隱す、此小兒は鴻巢にて下車しぬ。

四月九日。昨日の疲れに起もせず、上野驛にて妾を姉と呼し愛らしの少女の事共思ひ居る折柄、五才になる妹の「姉ちやん珍らしいの白い雪がふつてよ」馳來て仰山らしく告る可笑しさ。大方父上祖父上の茶の間にて「舊三月の雪は珍らし」とのたまひしを聞嚙りてなるべし。

庭の植木、垣根の竹など皆押倒されしを妹の「姉ちやん木は雪を蒲團にしてねんねしてるのねー」といふ。可笑しさに失笑しぬ。晝頃隣りの子と人形負ひて土藏の前に遊び居たる妹、大聲に「姉ちやんユダレの上に鳥の羽の生えた虫がゐてよ」と云ふに、ゆきてみれば鬣の上に長き毛の虫のをるなるに「これが鳥羽」と毛を指して笑へば「だつて」と恥しそうに笑ふ。實に無邪氣なるは少女よ、夜はこの話にて皆々お腹の皮いたうしぬ。

（評）押れたる筆つき、何の奇もなけれど賞すべし。

五等

○花日記

愛媛縣　志　女

四月廿九日晴。何處ともなく得ならぬ薫の洩來るに、針持つ手を止めてそと障子開くれば、姉樣の手づから小鉢に植置かれし世界一（薔薇）の綻び初めしなり。蕾は深紅ながら花は淡桃色美はしう我背其儘の形して馥郁たる香は廣からぬ奧庭にみち〳〵ぬ。夕方水遣らんと庭に出づれば初菊の五寸許なるが薄色あつさりと涼しげに數多咲き、垣根の龜山菖蒲、筆の如き蕾三つ四つほの紫の色見せて並び立ちぬ。

四月卅日晴。楊枝片手に庭を廻れば喇叭に似たる海芋いと太やかにさきそめぬ。見やる彼方は高き豌豆の垣根白に紅紫に飾られて、はや青き實のこゝ彼處に房垂れたるいと愛らし。四季咲き絕えぬ樺色の金盞花はゆく春も知らず顏に、露を含める。いちはつの、白く淸きが一輪二輪咲き殘れるを、其儘に朽ちさせん事の惜まれて手折らんとすれば白き胡蝶の夢圓なるに驚きて止みぬ、午後お離に三味線の音す、お祖母樣のお慰みと知られぬ、越後獅子玉川等の曲も幽に聞ゆ、賤さんお出と呼ばるゝに行けばお茶入れて給ふ。廣き庭内の一葉だに亂れず潔められたる、おばあ樣のお手入の屆けるに驚く、斯くてこそ八十の齡も健に保ち得らるゝなれ。夕、雲低う風さへ吹きそめて北の椽側松の花粉に

青うなりぬ。

五月一日晴。とく起きて、いちはつを剪る、今朝は懐しき蝶の姿も見ず。父様の誕生日とて離座敷の雨戸も悉く開かれぬ、今を盛とさきほこる躑躅の色の黄や、白や、燃るが如き紅に、葉も枝も蔭を隠して只一面花に花咲く心地ぞせらる。苔むす敷石の隙々小薔薇、萬年菊の香も床しう雪かと擬ふ粉團や楓の花は海老色に樫の若芽の薫るほとり、白黒縞の粧もとり〳〵に飛び狂ひ舞ひ遊ぶ蝶の姿の繪に似たるなど、春色こと〳〵我庭に集るかと想はれて、心ゆく今日の日よと暫時は恍惚として眺め入りぬ。

五月二日朝晴。午後はら〳〵と小石にても投るが如き響きに頭擡ぐれば窓打雨の音なりき。花の色香の失せんを惜しみて止めかしと祈る甲斐もなう風さへ頓に加はりぬ、あはれ逝く春花の命を散るをも待たで奪はんとするか、心なの雨のすさびや。

花　見　日暮里　丹野さひ

（評）やさしき花守れむれる蝶に戯けるもうべ。



秀逸

○春風日記

大阪市　花子

四月一日晴。昨夜やつと仕立畢つた袷を着て出勤すると、まだ時間が早いので庭の見晴しのよい築山に彳んで、無意味に西の空へ視線を移した、と灰色の雲に覆はれて居た生駒六甲の峯が、いつか生々とした緑色の薄衣と衣更をして、角の多い山もまんまろく見へる、微と吹く風は鬢のほつれを梳る、塵埃を交へない風は恰度垢のつかない着物と同じ様に心地がよい、今朝は仕立直しにもせよ、積のあるのが妙に心を晴々しくする、また破れた胸にも若い血が殘つて居るか、時折襟を繕つたりするのが吾ながらをかしく、人知れぬ微笑を禁じ得なかつた。

四月二日小雨。しと〳〵と降る銀の雨が櫻の蕾を濕して、窓から蛇の目の傘がちらりほらりと歌の一つも讀めそうに見える、吉野や嵯峨野も此雨に四五日早く開

くだらうと、お年寄の某様は花見の日を指折つていらつしやる、午後溪子様から楓會をあすの晩開くとの肉筆のお便りがあつた、晩女子文壇を見てから御老母様に、八犬傳を一時間許り御聞せ申した、傍で聞いて居た弟は、妾の膝ていつか白河の夜船に乘つたと見えて、微かに鼻息が洩れて居た。

四月三日神武天皇祭晴。昨日の雨も名殘りなく晴れて門並に日の丸の旗が朝風に飜つて、木綿の紋付に海老茶袴の裾を、短靴にかろく蹴つていそ〳〵と、三人五人連れだつて行くのが際立つて美くしく見える、まだ房の下らぬ藤棚の下て、朝の讃美を捧げ、終日編物に耽つた、五時頃お風呂から戻つて、芳子様を誘つて共に楓會に望んだ、例の研究が終つてから新たに、春の夜と歸雁の俳題て運座を開き、面白く夜を更して歸宅したら、母様はまだお寢みにもならないので、まことにすまない心地がした。

(評) 流暢の筆。

○あやふや日記

尾張　むらさき子

二月十一日――紀元節――晴。

朝先づ兄様が日の丸の旗を立てゝ下さる。十時頃に小學校て式が始つた、雲に聳ゆる高千穗の――と歌ふ。平和の山村！太古の昔が偲ばれる。

午後の一時頃から氏神様へ參詣する。賑かてある。駄菓子を賣る露店が二、三、それから玩弄物や、繪本など賣る店が一、小供が黑う山の様にたかつて居る。大松の下で新丸髷の若奥様に會つた、申すまでもなく綺羅ずくめでピカ〳〵光る、奥様の奥様たる處のある立派なスタイルてある、が而し美貌てはない、是は花木様のお嫁様てある、五十格好の品のよい奥様が前になつて十七八の侍女と廿四五のよく肥太つた下女との四人連てある、妾が前をひよろ〳〵しながら歩いて居つた十七八の小ざつぱりした姿した少女――村一番の評判美人がすれ違つた。少女はあと振り向いた。「ても花木様といふは！人をば……ば．．馬鹿に……」と恨む様に獨語ちた。其美しい顏、優しい骨姿！人を引きつける様な神々しい氣高さ、あゝ女ながら慕しい、戀しい、妾は此女を憐れに思うた。

二月十五日――花朝の日――雨。

昔は諸花が早く咲きしものか、今が遲うなりしか、何れにせよ、專實遲いのてある、何故てあらう。鹽谷世弘の「遊墨水記」に、既遊之後數日。僚友會超然樓者。各有記若詩篇見示。不堪伎癢。乃追記之以殿於卷尾云。慶應改元乙丑。花朝後三日。とある。又提要錄に二月十五日を花朝となすとあるから花朝後三日なれば二月十八日てある。昔は已に二月十八日前に櫻花さへ爛熳と咲いたのてある。今は莟すら大きくないけれど。

(評) 遊墨水記の日附は舊暦なりのどかなる春の日かげにさきそむる花は昔にかはらぬものを。

○稚蠶飼育日記の三ヶ日分

越後　眞柄ひろ

五月五日、掃立當日。曇。

　昨日の雨の名殘か空は、どんより大急ぎて留やを運て桑摘みに出たら、桑葉は露氣を受けて大きう成つた事、昨日の雨は本當に、寳雨だつたと云ふても好い。

　蠶種は又昔三枚。叔母樣は飼育主人、私は傳習生。午前十一時半に悉皆掃立てた、毛兒目方總體で、十三匁に强かつた、蠶箔は三枚。早速蠶の神樣へ御酒を供へて好結果を祈る。平均温度は、六十五度位にして、十二時、午後六時、夜十一時の三回給桑する。

　桑百五十匁摘み取り——。内九十八匁使つた。

他からお出てる人達が入口を間違ひなさると惡るいからと祖父樣、「養蠶中は此所が入口」と云ふ木札を掛けなさつた。

六日、第二日目、晴。

　朝三時半起床。叔母樣、蠶座が餘り込み過ぎると仰有て、箔數は矢張三枚だけれど敷紙一ぱいに座擴げなさつた。養蠶時は、蠶兒が居家の主人公で家族は其の看護人だと云ふが、本當にそう思はれる、何彼と多忙てお晝飯が平素より遲かつたけれど、あんな氣短な、祖父母樣もお小言仰有らないもの。今日は天然でも、温度は七十度位に昇つた。給桑は、午前四時、八時、十二時、午後四時、七時半、夜十二時の六回、其量は三百匁、摘込みの分、五百匁。

七日、第三日目、晴。

　蠶兒は早や體の半分位、(頭、胸部の方)、薄鼠色と成つて何とも云へない樂しみ。敷紙拔いて、三枚の箔數が五枚に殖えた。去年來た繭買のお客が、通り掛かりだからと一寸寄つて、今年もどうぞ——。と約して行つた。今日も暖かで天然でも、七十五度の高温。

　午前三時、六時、十一時、午後一時、三時、七時、夜十一時の七回、給桑する。量は、四百八十匁、摘み込は、七百匁。地桑でも今相場は一貫目、七、八十錢の高價なのに懸いて仕舞つた。

(評)　眞面目の筆、捨つるに忍びず。

○三日間

静岡市　中村正子

五月八日。珍らしく氣分よき日なり。床を放れて、椽の隅の柱により、眺むるに、いつしか若葉の陰細なるに懸く。糸垂櫻の紅盛りの頃夫の御出立を御見送り參らせし者を。御留守中とかく病ひ勝ちの身心細し、早く御用すみて歸りまさばと子供らしく戀ひまつる折しもパタリと音したるは梅の實の二ツ三ツ。池の八ツ橋のあたり紫衣して立つ花菖蒲の姿見すてがたけれど、庭下駄運ぶ勇氣もなし。

九日。御隣りの太郎樣初節句の名殘りの矢車、クルクルと棹の上にて舞ふ日なり。夫よりの御手紙くり返し拜見す明日午後西京より御歸宅の由、かく承りし故か、頭とみに輕うなりし心地、細りし頰寫す丸鏡に笑みは上りぬ。

午後、乳母の里より、新茶の小包著娘の玉チャンの筆にて、先日頂きし友染の襷して摘み候と優しうも記されてあり。あの娘も早十八。夫歸りまさば折を見て、良き聟がね世話し乳母に安心させたしと思ふ。

十一日。願うてもなき上天氣。今日は殆んど病忘れし樣にて我ながら現金とほゝ笑みぬ。後園の紅薔薇、書齋の瓶にさす折、里の母樣我を見舞に御越し下され、殊の外元氣と悦ばる。早速眉など剃り、髷に結ふて下さる。鏡に寫る母樣の御頭の霜いとゞ置きまさりたる勿體なさを思ふ中、美しう出來上る。午後三時相變らず元氣の夫を迎へ參らす。湯上りの我をほゝゑみて見給ふに、心せかれし化粧のむらもやと觚り氣してうつむき勝ちなるもをかし。到來の新茶に母樣御手製の羊羹、餘りと氣配ひする迄召し上る。西陣織は我への御土産、帶が泣くよ、と母樣の御口の惡さ。夕の食膳の賑しさ、御代りの早さに給仕の千代が瞠目を廻す計り。夫がたつての御引き止めに母樣御一泊と定り淋しかりし一ケ月を今日一日に取り戻しぬ。

（評）實情なるべけれど。あまりに無遠慮にすぐるところ〳〵ありて、うすらさむき心地なきにあらず。

○日記

井上笹波

四月一日。出勤の道すがら新入生を伴ひたる父兄に逢ふ常に左程でもない者迄笑顔を作つて「先生どうかお頼申しがす」。この山村迄も小ざかしい文明の潮流は浸入して居る。學校では地震の話で持切り、地震とは職員更迭の別名である。學期の變り目なので先生達の顔に不安が充ちて居る。私もどうなるやら……愛らしい。兒童と別れるのが何よりつらい。夜は燈下に花瓶敷を編む。

四月三日。學校が休みなので朝寐をした。庭の柳の葉が見違へる程のびた、其下の石に冷いと思ひ乍ら腰かけて久しぶりで覺束なくハモニカを吹いて居ると、後で「ワッ」。振り返つたらお隣の春雄さん手には早咲の櫻を持て居る、私は無言で一番美しい一枝を引き拔いた復讐の積りで……。午後南の窓の下で花袋集を讀む。夕の六時頃松枝さんが來た。今度さる人と結婚して近い中に東京へ行く事になつたと云ふ。私は只「左樣」と答へた。何だか二人の間へ垣でも築かれた樣で物足りない、常の樣にシックリした話もなく、八時頃歸られた。斯くて二人の間は刻々にはなれて行くのではあるまいか！。

四月五日。日曜。目が覺めて友の家に宿つたのに心付いた。文子さんは赤兒に乳をふくませて床の中に居るのに、障子一重向うの勝手から味噌を擂る音がする。夫婦に赤兒一人、下女を雇つて居ない事を知つてる私は「誰？」と問ふと、友は「オホヽヽ」笑つて「坊が可愛いからよ」と云ふ大方察しが付いたので追問しなかつた。中學の先生も又多忙なるかな。午後四時歸宅す。机の上に厚い狀袋がのせて在つた。

てつきり轉任の辭令だとふるへ乍ら開くと昇級!!横から窺いてゐらした母樣は、「ご馳走樣。今夜は何をおごるね」

○五月　上總　ひさ子

一日、靄が晴れても何處かどんよりした五月は、まだ櫻の香が殘つてるのであらう。今日は叔父樣も春ちやんも歸られるといふ。お帶の恰好を直して上げながら（では七月には屹度ね）といへば（は、伺ひますとも）と嫣然なすつた。停車塲迄の兄樣を加へて三輛の俥を、母樣と一緒に門先迄お送りする。中の俥が春ちやんで緋繻子の立矢が午近い日光に燃える樣、菖蒲の田の角を右に曲つた時鳥渡會釋なさつて、徐に洋傘を廣げるとあのお髮の白リボンが隱れてしまつた……春ちやんと呼んで見たい樣、俥はもう松原へ入てしまう。室へ入ると急に寂しい心地がする、並んだ儘のお座蒲團の中にしばしは茫然と立て居て。軒端の桐の花かげが短く窓へうつる。

地引網　名古屋　きよし



二日、くけ臺を引寄せて縫ひかけのお羽織をとる。よだん着だからとお父樣の言はれる儘、葛籠の底から出して、裏地に裁つた絹袢が縫合せて見たら、大變よく合て居る、これなら丈夫で宜からうとお母樣も笑はれる。廢物利用とは此事だらうとお父樣もお笑ひなすつた。それは宜かつたが、夕方私がみいちやんを抱て庭へ出た時、お風呂の火を見るため、其處に遊んでた光ちやんに鳥渡抱いてゝと賴んだら（お祖母樣に賴めばいゝのに廢物利用だから……僕等はボールをするんだものネ健ちやん）だつて、まあひどい光ちやん、其麼事いへば明日は日曜でも雨がふるからいゝわ……。三日、通子樣から藤の花の繪葉書が届く。然云へばもう花盛りだらうに山迄行けば見られぬ事もないけれど、私の庭にも一もとは是非欲しい。紫インキで奇麗に書かれたお歌は斯う。

（紫の羅の袖きたる懐しきみ姿おぼゆ藤波の花）

○雨の日　熊本　うもれ木

四月十日、今日から雨の音が高い、急いで學校に行く、二階の窓から顔を出したら、右側では歴史であらう、切れ〲に話が聞える、左側では黄い可愛い聲で、毬を打つ音ポン〳〵〳〵と手に取る樣、庭では柳の露が、小い菊の葉を叩いて居る、向ふの杉皮の漸く被つた新校舍の屋根ごしには、雲煙の間に淡く溫泉岳の姿が見える、實に長閑な眺めであつた。

夕暮近く歸寓した、夜宿の少女は、桃輪の結ひ初めといつて、嬉しい餘り障子に己が影うつしては、可愛い髮を撫でるので、一家擧りて、あどけなき兒を圍繞して興じた、九時床に入れば、雫の音冴えて、山吹、牡丹等の、うなだれて居る樣が、あり〳〵と浮ぶ。

四月十一日、樂しい土曜、少女の手を引いて、學校に行く、放課後新に來まし〻師の君の、歡迎會があつた、愈興に入つた頃、小使がおささ召上らぬ方へと、菓子を持つて來た、中で煮餅などは早く盡きたが、砂糖菓子は中々盡きない、實に桃よりゃ櫻、牡丹よりもかきつばた! べに白粉の濃厚よりも、作らず飾らぬ、自然をこそは、人の好むのであらう、夜八犬傳を讀んで、暫し雫の止んだ樣な心地がした。

四月十二日、嬉しい日曜、朝から書見した。

上なる宿の少女は、いぬる日、高等女學校に入つたので、留守居の洋琴が淋しさう、一寸寄り添ふて「配所の月」を彈いて見たが、手が儘にならぬ、止めてじつと泉水を見ると、岸の柳の露がポタリと落ちた、波紋は靜かに、いさご形に廣がる、續いて櫻が一片音なく散つた、とたんに金魚が餌爭ふ心か、勇ましく躍る、美しいと思ふ間に、時計が十時を指す、後便に間に合ふ樣にと急いで原稿を書く、まだ出來上らないのに、午告ぐる鷄の聲の幽に聞ゆる。

○青葉日記　下關　すみ子

五月九日、葉櫻かげに櫻ン坊が房々と頭垂れて、毛虫が葉柄からぢり〳〵と葉末に這ひ出す、葉裏には蜘蛛が門戶を張つてゐる。

微かに風が枝を拂ふと、搖々と天地が鳴動して毛虫は遂に振り墜された、それでも白い糸を吐いて釣られてゐる。

母家の鷄が頓死したとのこと、さては今朝しも彼が是音を盜んで、河豚の肝でも喰べたてはあるまいか、虎猫が堺つたひに走つて來たが、滑かな水氣のあつた瓦に足を取られてズドンとばかり眞逆倒、蓋し彼は躑躅の陰に身を潜めて、少さいあの心臟に浪を打たせてゐた、

五月十、日春行くや稍時は過ぎたれどことしの秋の晴にもとかつらやに送られた金糸の刺繡「是非一度見て下され」とのことなれば妹と共にかつらやを訪ふ。妹は薔薇の簪を拔いて比べてみる、蝶があまりに多う過ぎたと云ふ。

新體詩

横瀬夜雨先生選



凡て振假名をつくること
懸賞は甲種の規定に據る

三等　○君が手箱

下総　若杉とり子

疑問の心の底より、
開けてよと響く瞬間、
開かんとしてハッとして手を引けば、
時刻む針の如く、
皷動して止めよと制す、
君が此の手箱の底に、
何物か秘めらるる、
唯見まく欲しさふたをひらいて、
夢現底をのぞけば、
古き香の仄くばかり、
良心は藤蔓の痛きをふりて、
思はざる犯罪を責るよ、

この君、養ふべし。この君愛すべし。

四等　○囚はれ人

信濃　依田よし枝

かたくとざせるわが胸の、
戸ぼそに人の衣ずれして、
跫音をぬすむけはひぞする。――
おどろきの夢よりわれはさめ出てゝ
さとほてり來る頰の下に、
血は燃えて胸こそさわげ――
戀なりしかな。
あり明けの白き灯ともる室の中、
ただ一人しづかなる、
絹の枕をもたぐれば、
誰が呪ふ笛のしらべか、
物の音かすかにひびらぎて、
たぐりよする意志の糸もみだれては
勞れたる魂を、
小暗き國のはてにこそ見れ。
おぞましや、
十九のよはひをかさねつつ、
人にゆるさぬ身もやがて、
『安からぬ心』夢におぼえむ。

科野奈流、知具麻能河泊能、左射禮思毋、伎彌之布美弖婆、多麻等比呂波牟。淺間山麓またこのやさしき人あり。

五等　○桃

あや

後ろ姿を見てをると、紅桃が――
始めて結うてほめられた、
島田の上に散つて來た。
白い元結きりりと卷いて、
ほんのかざりとしたけれど、
挿さう〳〵と七つから、
島田を待つた平打の、
銀のかんざしは、
今ぢやないもの、初島田。
かざりないのをゆるしてと、
見せたあたまにべに桃の
花のかざりができたもの、呼びとめて
髮のこはれぬ日のくれぬ――今、
も一目見せたいと、

見えなくなつた野の道を、
涙にくれて見てをつた、
十八の春のこひしさよ。

われ女子文壇の詩の單調に苦しむと久し、こゝにはじめて百文一致詩一篇を獲て、やうやく新紀運の到來せるを知る、されど「桃」はなほ囚はれたる詩の一なり。

秀逸

○花散る日

常陸　大塚つね子

花散る日なり椽にして、
下の妹の低首るゝに、
いかにしつると、うら問へど
あちらを向いて物いはず。
母や戀しき、都なる
人をや思ふしくしくに
涙あふれて頰にのぼる
血の色さへに美しき。
針をおくをも忘れては
打守らるゝ顏や
衣おしやりてそと抱けば
たまらて膝に泣伏すはなぞ。

人なや思ふの下へ、「粱は、草の名なりき、手まさぐる、袖はなよびて」など、入るれば入るべし、あきたらぬ作なり。

○我が魂のゆくて

信濃　太田喜志女

琅玕のいらかまぶしく、
萬物を魅する靈力に、
そびえ立つ愛のみあらか。
天地のたから集めて、
飢に泣くさすらひの子を、
守護とや慈愛の母神は吾を手招ぐ、
嬉しさに魂は躍りて、
眼は空にあやしき足どり
花の香は漲りわたり
さながらに波うつ如く、
太陽は眞空「ほてり」と熱は、
面ほてるそびらにあつく
若き血のくるめきに、
ひたはするみだれし姿や。
（あゝされど人は知らじな、
我が胸の廣野になせる
今の姿は——）
よろこびの心安さに、
うつ向の默思を忘れ、
息づむ胸にどよもしなせる、
紅き血の戀の歌、
口ずさみつゝたゞ一すぢの
信仰を生命と
黄に青に紫くゆる、
きらびかの扉拜がみ
あへぎゆく可憐の魂。

この人もまた模倣の時代に在りと見ゆ、語にならひ誰に似すとは云ひがたけれど。

○雲雀

上總　森ひさ子

一

うれひなきをゝしき鳥よあら野の、
沼の上に草のへに汝が朝禱美かれ。
天幸や汝が棲むところよろこび、
しるき——噫汝れと共に荒野に住ん。
白雲に高き汝が歌をゝしき、
愛よ、そは力を——愛よそは歌生れし。
露の翅振りていづちへ汝はゆく、

天つ空汝れが歌ふ——汝が戀は野に。
岡の見む泉。沼こえ、みどり、
山を越え、紅薔薇さす流光
を越て。
薄曙き雲こえ、虹の輪こえ
て、
樂の神、あゝ歌ひつゝ高く
も揚がれ。
黄昏れん夕べぞ、ひくき草
野の、
やすらひはひしす花に、愛
和くむかへ。
天幸や汝が棲むところよろ
こび
しるき——あゝ汝れともに
し荒野に住まん。

雲雀は果して雄々しき鳥であらうか、雲雀は遠き荒野よりも近き麥生などに棲む鳥ではあるまいか。句を無茶に切つたのは惡いとは言はぬけれど。

並木　岐阜縣　日野歌子

○春曙怨

越後　河島歌波女

凉の小鼓覆ふごと



衣桁にかけし舞衣の
ゆる
すゝりて春の日に
金絲の縫はみだれたり

朝睡衾の鶯に
小さき夢は破られて
花に曳かれしわが魂の
など再びは歸りけむ

爪紅入れし香箱の
失せしは誰がたはぶれか
人に秘めたる小扇の
歌の心の知りがたく

柳しづれにほのみゆる
裙紫の京の山
七重に包む薄霞
被衣姿と微笑みぬ

夢まだ殘る朝化粧
濃きに過ぎたる口紅も
ふくみし花の染まりぬと

きゝなば人もとがめじを
手飼の兎さかしげに、
此處をながめて何とする
より來小兎紅さして
わが舞衣をなげかけむ
濃厚いとふべし。

○眼を病みて　中津　やま川

春なかばわれ眼を病みて、花ぐもり、
血汐高なる若き日を
小暗き蔭のたれこめに
熱き涙を、押へては
逢ふまが時の面影の
うつゝの人を戀ひそめぬ。
雲一すぢの波もなく
うらゝの空も暮れゆけば
一しほ迫る寂しみや
誰れにたよらん一人子の
あゝ、眼の疾よみのとに
落ちゆく道もかくやあらまし。

眼を病んでらして、どうして暮れ行く空に
雲の無いことを知りましたか。

○あかき花白き花　甲斐　勝村もりよ

いてふ若葉のかをりして
高き梢にゆふづゝの
光かよはくまたゝけば
鶴のもようのふり袖に
錦の帶の眼ゝ眩く
金糸かけたる島田して
花なる人は嫁ぐてふ
兄上在さば我が家に
吾が姉君となりなむを、
せめて車にうつむいて、
常世の白き花かげに、
ねむれる兄の上を泣け君。

○尺蠖　三重縣　山崎初子

白き手拭袂だすきの
久留米絣にうつりよく
曉の光を身にうけて
しほらし桑花盛り、
桑摘む手先いと早く
玉の笑聲凉しらに
歌ひつなほも新綠の
深るかたにと進み入る。
やがて少女はその姉ちの
さつとばかりに飛びのきぬ
紅染めし頰の色は
靑く變りてわなゝくと。
顫ひ戰くやゝしばし
若芽小枝にすくすくと
幹の如くに身を立てゝ
尺蠖ぞ並びたる。

○津輕少女　深浦　白梅子

花菖蒲池の汀に、
化粧せし美し姫を見てしより、
冒知らぬ恍れ心地胸もえぬ。
思へば遠き陸奥の、
津輕少女と生れ來て、
愛の古巣を離れ島、
飛行く方は西の海の、
波の花散る荒磯の、
さすらひの子となりぬれど、
虚榮の花の目に入りて。
今、母が手なれの古鏡取出して、
白き乳房の恥かしけれど、
購ひしレートの瓶を手にすれば、
白きが下の櫻色、
鏡の中のわれや人、
影に見惚るる心かな。

○あはれの弟　仙臺市　早瀬このめ

留きて苦しむ汝若き弟のおもざし

枕邊の薔薇は匂ひ今臨につゝまれて
汗ばめる病人の片頰に燃ゆる惱の燈火
宵〳〵うすれて風なき夜半を炎はゆれぬ
姉君やよ姉君と朧ろげに濁れる眼を
見ひらける刹那永久の別れをかすけくつげぬ
うら若き人の消えゆくかげのげにいたましや
蒼ざめし面輪冷やきむくろよ如何にせむ
あゝ響きいづ最終の靈の梵鐘
泣きしづむ妹凹める母のまなざし
限りなき悲愁に光りはおちて夜はしじま
あはれ弟よ汝心してゆけ黃泉の國に
たのめる人ははや已に〳〵ゆきぬ遠き國に
鎖みたる唇冷き肉いとしき人や
夜のさびしらをわれ戀に通夜しみまもる

○母にまみえぬ

比叡山の麓　加藤　爲子

われに一人の母君よ、
失せ給ひしときゝにしが、
其の面さへもえしられば、
母なる名をば懷しみ、
十六年は經りにしを。

み墓詣でのかへるさに、
今日結びたる我が髮を、
ふさひぬと宣る其の人の、
わが面影の亡き母に、
似ますことよとさゝやきぬ。

人の言葉のなつかしう、
そと小鏡をとり出だし、
たゞ、つく〴〵と眺めけり、
あゝ十七の今日にして、
始めてわれは母にまみえぬ。

○燈臺守

本所　秋山　欣子

烈風あがり、白砂をふみて、
海際の巖角に、
さりげなき潮路ふしみて、
立つや我れ燈臺守よ、

崖岨の十の半杉の、
巣より生ひたちて、
遠渦のうつら〳〵、
少女と成りし我なるや、

獨居の朽木の柱、
宵々を燈に油注ぎ、
注ぎさして何の思も、
なからんと月は笑めども、

石生るゝ平和の夜は、
紫のひとてに似たる、
優照りの星を眺めて、
たらちれの魂にあくがれ、

天の邪鬼祟りする夜は、
よもすがら欄の窓に、
闇黑の沖を見つめて、
幸願ぐよ水夫が運命に、

さはあれどうらぶれの子は、
父を見ず母にも逢はて、
明暮を只何となく、
泣きもせで消えてゆく身か。

○森の沼

信濃　靑木まさち

南歐の野の美し果て、
まつはる草の蔓引けば
こぼれて匂ふ露の實や、
薄葉にくれなゐに
奇し香漂ふ月の興、
足取り輕う野守姫が
失心の憧れに、
茨の刺に裳とられ
ふつ見戻せし行ずりに、
胸なる鏡辷らせて
野の色とこそ碎けたれ、
鬱鬱深き二千年
グエズの夜の歡樂と、
星を浮べて森陰の
底なし沼は花藻吹く、

○雨の音

紀伊　栗山　靜江

故郷を遙々こゝに三井寺
花の都は近づきぬと、
汚血の憂、快樂の惱、世捨人の
うち振る渴の鉦若き息吹に接吻し、
胸の諳や波立つる
かくれ家もなき下露の、
下るさび音やのきのつま。

浮世の覊絆たちすてし
緇衣圓頂の比丘二人
霧こむる浦邊

烟立つ鹽田をば
指ざして雨の中をば辿り行く。

○戸の音　麹町　かすみ

今戸に「ハタ」と　鳴るあり
靜まりかへる　我伏屋
人の毎〳〵　潜み合ひ
我は床にぞ　嚏りつく。

只見る燈　薄す〳〵と
斯くふもの　音絶たば
現ならぬよ　其刹那
十二の時は　眠ふ如。

凶人はなほ　佇むか
穢れになづむ　罪の子の
法なる岩を　踏みにぢり
玉なる財を　毀たんと。

○かなしみ　茨城　秋山秀子

花をかざして蝶追ひて、
少女とわれはなりにけり、
をかしき夢を見そめしが
十才に五つの年たけて、
寢覺の床におくれ毛の、
亂れて苦し胸の内
かうがいゆらぐ花嫁と、
やがて我身のよそふ時
冠れる帽子のかげにして、
うつろは誰のかほばせか
赤き乳房を含ませて、
うい子育てむ身とならば
鬢の毛てらす朧の月、
夢路はいかに母の身の
戀しき人をまづ戀て、
はげしく胸の燃ゆらむか

○浮藻草　神戸　幽霞里

日ねもすを思ひ疲れて、
松青き磯べさまよひ、
風の彈く琴の響きを、
友として思にふける。

澄み渡る海の面には、
山のかげ靜かに浮び、
小蟹よる岩ぶち近く、
浮藻草水に漂ふ。

浪路ゆく白帆かげは、
小羊の色に似かよひ、
綠なす海の面には、
青草の野邊もさながら。

岸近く村のそこより、
船歌は長閑にきこえ、
苔繁き洲崎によする、
小波の音はひた〳〵。

海の面の廣きを見れば、
おもはゆき心地こそすれ、
などてかく小さき望みに、
うつゝ身を痛り泣きけん。

○繪卷物　八王子　花子

夏は滴る濃みどりの、
黑髮山のかげうすう、
映ふ湖のたゞ中を、
いさゝ小舟に帆をはれば、
そよ風やゝにはらみ來て、
舟は正面に走りゆく、

八里の汀かこみたる、
山又山のつたもみぢ、
日の影赤う流れては、
水さへいよゝ華やぎて、
幸の湖邊のながめこそ、
秋姫ゐます住家とや、

出島の藥師あき老いて、
松間をつゞる紅に、
花崗石のみ階あかやぎつ、
鏡とすめる水の面に、
墜ちし鉛のながれてや、
華殿の淵をくゞるらむ。

○廢道　北海道　矢萩池根子

降りつゞく雨にくづれし
廢道の土橋のあたり
埒もなく夏草伸びて
回想の根も長し
野の花のをさなき色は
美くしう胸にうつろひ
二人して逍遙ふ夢路
あゝ今し戀は盜みぬ
廢れたる道のくぼみに
雨溜み沼とひろごり
眞座に蓄み埋れて

水草の花も咲きしか
たまさかに來かゝる人の
笠傾げ行方見つれば
うるみたる聲ふりたてゝ
虫一つ袖にすがりぬ

○皐月晴　三重縣　河原操子

露のたまぬく蜘蛛の宿
主の君はいまされど
軒端をかざる銀のいと
ゆるぎ出たるおどけもの
梅雨が雨うつ青梅の
雫にまじる實もありて
なぐさまるべき無言なり
少年めきし響くよ
藤生りたる皐月ばれ

○しらはと　[illegible]白　波流子

やまないづるゆふのかれの
とほくとほくそらにひゞく
にこげひへてとやにかへる
かれのこひはさめてけるか。
めなるとりのおもひいると
ゆふのそらにたれかもどく
ひろくやみのみてるころだ
こひをもちてかれはかへる
はなにすがるつゆのことく
こひはこゝにもろきさだめ
ゆふのかぜのそよとふかば
れにくだりあさをまてり。
とやにあさのひかりあつめ
かれのむれのちしをもえば
はなのかげにちさくなきて
ひとのこひをまたもみちびく。

花の下　牛込　佐野貞子



○春怨　筑前　田中とよ子

ふともえ初めし戀の芽の
寂びたる胸に根ざせるを
培ふ血潮はみなぎれど
我は母の子涙の子
それとは固く秘めてしが
春なれば名無小草の
花も笑む小さけれど
蕾は柔き紅の花
あたゝかき愛の息吹に
咲きれよ唇つけられて
咲きも得で其なり凋む
うらめしの我身かなあゝされど
母の運命に泣きし我
いでいざ墳にすてんかな
我は母の子涙の子

○行春　北會津　白井絹江

つき眠げなる夜はふけて、
花のうたげの面白く。
牡丹くづるゝ薄月夜。
闇の怨のしめやかに。
春雨來なむ花の御所。
花頂の樓春に醉ひ。
燃えてはあつき戀の緒に。
通へばふるふ君の胸。
あゝその光榮も朧夜の。
夢とさめては春深き。
都をあとに嵯峨のたび。
夜ごとの夢はこしかたの。
花に興あろうた聞ゆ。
頭もる風に目覺めては。
雨に泣きしも幾度か。
あしたさびしき行春の。

寧の破調にことゝへば。
風は悲愁の音さむく。
花は無心にみだれつゝ。

○臺灣の歌妓によす

下谷　藤田　ゆう

汝がもてるその小琴、
ゆるやかにひゞきては、
汝が姿かはるとも、
わが胸の絃は共鳴る。

十四五の頬さかりよ、
橄欖の下ちる露に、
人の世の甘きかをりを、
袖にしめたることなきか。

毒草しげる熱帶の、
棕櫚の木蔭の深ければ、
獸の珍花もとむべく、
あまりに少さし、汝の足。

さはれ奏づるその曲よ、
歌へる歌よ、汝が胸に
一もと奇しき花咲きて、
妙なる香をばはなつごと。

あゝ少女、十四五ならば、
髪を結はせて化粧させて、
親がおらちやの頃なるに。

○胸の小鳥

奈良縣　中富よしみ

靜かなる、時てふ波の、
絶え間なく、よせてはかへす、
働きぞ恐ろしき、
吳はしの、胸の小島も、
覇を競ふ、魂と魂との、
果てしなく、せめぎ合へるを、
のせしまゝ、あゝ波の爲、
紅の花、綠の草葉、
さらはれぬ、あと荒凉と、
香はしき、二つの魂も、
青春の、色香共に消え、
醜き、その姿のまゝ、
ひたぶるに、未だせめぎ合ふ、
あゝいつか、胸の小島は、
たれの手にか、占め得られむや、
ふと見えし、沖の彼方よ、
すさましき、山なす波は、
たまゆらにおそひ來らむ、
かくてこそ、二つの魂を、
のせしまゝ、島は失せなむ、
一生を、戰場として。

○國分寺燒亡

石岡町　今泉磯千鳥

ほこ杉たかき國分寺や
火の神魔徑をあやまちて
春逝く夕に夏の夜に
日み雞の――晩鐘の
今日より鳴らずなりにけり

茨城の縣石岡の、
府中と呼びし昔より
推古の朝の藝術をば
明治にのこして千年の
古き歷史を語りしも。

風は吹き荒び火は狂ひ、
人塊をかける中にして
煙の上に輾うてる
神佛具士の雄たけびに
灰の塚とぞなりにける

風雨の夜はうなゐ子の
眠につくをまもりつつ
翁、媼の語らひし
「女鐘男鐘」の物語。
今より夢ときかざらむ。

○磯の人

某

井上春子か、古賀ひろ子か、板倉くす子か、ていさう子か、臥風子か、春のやか、一篇ごとに名を異にして本名を採るによしなき奇怪の人の作なり、而して一篇は秀才文壇より一篇は萬朝より剽窃して同時に入篇の詩を寄せたる人の作なり、「磯の人」もおそらくは自作にあらざるべし、諸韻の摘發を乞はんがために表示す。（選者）

記者曰、「磯の人」の一篇掲載する答なりしも誌上の都合により見合せたり

新論文

編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歡迎す、同じく二十四字詰三十行以內、半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は甲種に據る。

三等

○女から見たる女

京都市西陣紋屋町　濱部風窓女

女から見た女と申しても十人十色、其の人の性質や境遇や又は立場に依つて色々に見えるてせう。經驗も積み常識も備はつた方はとにかくとして私等少女の眼から見たる女の一面も面白くは有りますまいか。先づ女の虛榮心の强いと云ふ事は女からも許します、鳥渡宴會の女席を御覽なさいまし、女は成る可く自分より見つとも無い綺麗な風采をして居ない人の隣く座るやうに勉めます是等は殊にお夫婦づれていらつした奧樣に多い樣に思はれます、また途中などて同じ年頃の女と女が過つた時の双方の眼を御覽なさいませ、實に機敏なものてす此の一瞬間一方が一方より勝つて居る事を自覺した時には非常なる滿足と誇とを示しますのてす、女としての價値は勿論、顏や形の美ばかりては有りませんが斯樣な有樣てすから醜な人は或る場合實に情け無く思ひ卑下をしなければなら無いのてす、てすから女學校などては妙に美人は美人を友達として居ます、又醜い人は寄り附か無い樣にしてゐらつしやる樣てす。

女は情に動かされ易い、是も事實て一寸した事ても非常に嬉しく又悲しく感じるのてす、女に情が無かつたならば丁度花に香が無いのと同じ事て女の美點も玆に有るのてす、彼の美はしい同情心や優しい慈善心の泉は皆此の情の源から湧き出るのてす、處が世の眞理として、よい事だけに一方には非常なる危險が附いてゐるのて有ります餘り情に走り過ぎて理性を全然沒却すると終には道德を踏み破り何物をも顧み無くなるのてす、男の一念と云ひますが私は女の一念の方が遙かに强いだらうと思ひます、又女の嫉妬心は非常なものて表面にこそ顯はしませんが內心は勃々として處に依つてはうつかり人も褒められません、隨て競爭心も强く其の癖割合に範圍が狹い樣に思はれます、とにかく人には長所も有り弱點も有るのてすからお互ひに注意をすれば完全に近づくのて有ます。

成程女から見たる女だけありて、平凡なやうて觀察が細かく、動かない處を言つてある(評)

○本誌投稿家諸孃の一口評

阿備の里　木下みさほ子

四等

山田邦子樣。貴女は餘程感情の發達した人らしい、貴女の文をいつも拜見すると、こう何だか魅（チャーム）されるやうな瞑想的の悲痛を感ずる、しかしあまり思想は千遍一律に失しはしますまいか。

田中久子樣。何をお書きになつても相當にこなし得る作家、筆は思ひのまゝに働いてゐる、益本誌の爲にお勵みあらんことを祈る。

深瀨ます子樣。先小說欄ての勇將でしよう、昨年十二月號の「軒の雲」の如きは實に感心、しかし欲をいへばまあ少々深刻な處を願たい。

鹿間久子樣。貴女は秀才文壇の投稿家鹿間尙斌氏のお妹さんてはありませんか、そして面白いことには文章までよく似て居らしやること、何しろ有望なる作家てしよう。

根本松江樣。御結婚なさつたてお目出たう、此からも相變らず永久に、お作を拜見いたしたいものです、文もお上手、詩もお上手。

中宮よしみ樣。每號の新歌謠は實に感服、着想が面白い。

中村勝子樣、いつもながら輕快なる筆、寫生文派の上乘なるもの。

朝井松子樣。あまりお作に接しませんが實用文はなかなかお上手、思ひのまゝに筆が働いてしかもやさしく出來てゐます、しかし文章はあまり長過ぎはしますまいか、規定の二倍も三倍もあるじやありませんか、これは此の作者のみならず一般の作者に御注意を願ひたい。

未だ〳〵澤山の作家がありますがあまり長くなりますから今回は之て筆を擱きます妄評多謝。

一口評とは言へ、殆んど皆的中してゐる、具眼の讀者（評）

五等

○選者の俤

本所區菊川町一ノ三八高橋敬介方　高橋妻子

前號で鹽見さんが、誌友の俤てふ題て、皆樣を評しました、妾は此に各選者方の御肖像を、畫うと思ひます、失禮ては御座いますが、暫く筆を動かさして下さい。

先づ頁を披いて行くと、一番前に被居るのが、お伽噺の巖谷先生、他て見たのとは少し違う樣うだが、洋服姿の凛とした犯すべからざる御態、何處かに和かそうな點が見へ、何となくお伽噺の大家と稱さるべきお顔付、だが少し御耳が大きい、とはまあ失敬な妹がつい……彼の耳から世界の事を聞き込むて、形好い頭てお伽噺をお作りになる、見るさへ懷かしい。次に新派

和歌の與謝野先生庇髪の御出立、口元をぐつと〆めて、歌を考へて被居るかの樣、少し頭が短かくはないてしようか。今度は小說の小栗先生、眼鏡掛けての和服姿、〆つたお顏に、世間の有樣を見透うして、刻々と紙に彫む樣が顯れて居りまする、口が大きく唇がお厚く、八字髯を貯へて被居る、アラ姿はこんな事を書いて、蓮葉女の題で小說にても作られはしますまいか。次ぎが日記文の中村先生、一見西洋人の感がする、何となくお顏に細々しい處が見へて、萬事に御注意が屆く樣、だが、氣難かしくは御座いませんでしようか。進むて新體詩の横瀨先生、弓張眼鏡の御出立、御病身の樣思れますが……、憂欝の有樣も見へます、御心はたしかと考へられます、失禮にも支那人に似て居るとは妹の評。次ぎが和歌の佐々木先生、お名前は兼兼承つて居ります、何日も眼鏡掛けて被居る樣、〆つたお顏に嚴格な態度、髯の格好もよう御座います。今度は俳句の內藤先生、俳界の大家、昔堅氣のお顏に、多年の功が顯れて居ります。次ぎは實用文の谷先生、洋服の紳士出立、ちよつと銀行員の樣思はれます。



わが家

北多摩　石ヶ谷菊子

當り障りないやうに批評してゐる處が、一通り以上の苦勞と察する、紙上の顏だけで其人を判斷するのはむつかしい事であるが、此作者ぐらゐならば未だ〳〵も能く言つてゐる方である（評）

秀逸

○時間を貴ぶ

熊本市　峽　貞子

時、あゝ貴いものではないか。何をするにも時が必要である。集會のときなどには、一定の時刻にまで來なければ、會を始める事は出來ぬ。又學校などでは非常に貴ぶ。なぜであらうか。學問をする時はちやんと時をきめて、その定つてる時間に一心に學ぶ。少しでも、粗末にすると十のものは、八だけしかおぼへられない。それ故に、貴ぶのである。又田舎

ては、時をきちんとする事を、御じゆん行時間と稱してゐる。そのわけは、殿下などが、御出になつて、八時なら八時に町を御見物になるといふ事であつたら雨がふつても、風が吹いてもきつとその時間にはお出になる。それで時間をきちんとする事を御じゆん行時間といふのである。一たい西洋では時を非常に貴んで一分でもまちがへるような事はない。それではあるが、日本ではまだ〳〵それまでには、いつてをらぬ。その様にする人はあるが、多くの人はさうでない。私は一日も早くこの悪習慣をやめて、よき方になる事を、望みます。

能く分るやうに論じてある、引例もよし（評）

○文章について

備後　井上年子

文章について私の感じた事を少し云つてみませう。本誌でも他の雑誌でもですが、賞に當選した文も、落選以下沒書に成つた文も、決して文字に變りはありません。されば文章の優劣等級は、たゞ文字の使ひ方の如何にあるのです、たとへば日本三景の一たる彼の天の橋立の如きでも其通りで、決して白沙や青松が橋立個有のものではありません。全國至所澤山あります。澤山あるがつまりあの位配合の宜敷を得た場所がないのです。其他書籍でも工藝品でも皆其通りで、近くは皆様が日々編みに成つてる編物でもそうでせう、同系同色のもので編んだ物が、其の色の宜いと悪しいとで大變な相違があるでせう。

されば言海や會玉篇でも探さなければ解らないやうな堅くるしい文字を澤山並べた所で、やはり其配合が悪かつたらそれこそ難字の行列に過ぎないでせう。

幸にも本誌は總ての文章が皆平易で興味を持たすと云ふ事を主として出來て居りますから誰が讀んでも面白い、確に是進歩した文壇と云ふて差支へないでせう。殊に投書家諸嬢が皆文字の配合に重きを置いて、成る可くむつかしい文字を除ると云ふ事に勉めて居らるゝやうに思ひますが、誠に喜ばしい事です。

尚本誌の論文ですが是は皆様に始終論文は堅くるしいものとか、むつかしいものとか云ふ事が念頭を去らない。然し是は大なる誤りで、決してそんな堅くるしいものや、むつかしいものではあるまいと思ひます。たゞ感じたまゝを書けば宜いので、つまり感じたまゝを書くと云ふ事を念頭に置いて貰ひたいのです。尤是は獨論文ばかりではなく總ての文章に皆必要であらうと思ひます。

美文などでも勉めて美しく書いたのよりも、たゞ感じたまゝ見たまゝをすら〳〵と書いた方が比較的成功するやうです。

容態もお氣がついたと見えて、此頃の論文は皆やさしく、分り易く、率直に、又適切な論文を寄せられるやうになつた（評）

○厄　年

徳島縣　吉田紫花

人間一生には厄年といふのが何度もあるさうて、其の年には家も建てられんし、縁付きもせられんとか、殊に女が十九て縁付きすると、其の前途に於て必ず不幸に逢ふといふことてある、妾は今迄そんなことは知らなかつたが、今年隣の娘が突然一日の間に嫁にてもさらはれた様に嫁入りして仕舞つたので、不思議に思つてよく聞くと、つまり其晩は舊曆ては年の夜とかいつて其の夜を越すと年が行くさうてある、それて十八てあつた隣の娘も明日から十九といふので取るものも取りあへず嫁つたといふことてあつた、厄年といふものそんなに恐ろしいものかと思つた。

次に妾が或時或人に、體が弱くて困ると話すと、其の人は第一に妾の年を聞くから妾が十九だと云ふと、其人は滿面に信仰の色を漲らして、さもありなんと云ふ様な目付きをして、ア、御厄年てございますか、それなら御心配なさるな、御年廻りが惡いからてございます、女の十九は妙に何か事がございますものて、まあ御弱い位いは好い分てございますよ、來年が來ればきつと御丈夫になります、御心配ございませんといつた、妾は之を聞いて息を吐かずには居られなかつた、病氣といふものそんなに氣安いものか知ら、ちやんと此の人は厄年だと知つて居て、其の年中苦しめて置いて、翌年が來ればすつぱり退いて呉れるとは有難いことてある、して見れば十九て病んて死ぬ人は無い筈てある、世に云ふ獏といふ獸は夢を食ふと聞くが、厄年といふものは病を食べるのてあらうか、兎に角厄年といふもの病氣とそんな有り難い關係のあるものなら、病身な妾、一生厄年てあつて貰いたいものてある。

もう少し厄年に就いての意見が聞きたかつた、妙に諧論に逸らして了うたので、味ひが乏しい（評）

○早　起

丹後　高田くに子

私が實行して、尤も利益てあると感じて、毎日行つて居るのは朝起きてす、早く起きると謂ても二時や三時ては無くて、大概東天に紅紫の雲が棚引く頃てあります、起きて、庭に出てますと、青々とした草木の葉には、瑠璃か珊瑚の様な露が、曙の光にうつすらと照て居て、靜な細流れの神秘な音を聞くのは、誠に身も心も清々するのてす、朝の清淨な新空氣を一ぱひ吸込みまして書齋に歸ります、そして日課の講義錄を繙くのてす、傍りは靜て、心は落着いて居ますから一度讀んだ事もよく解るのてす、殊に數學などは朝に限ります、私は何時も、勉學殊に獨習は朝が第一てあると思ふて居ます、定めの日課も樂しく終りますと、私は臺所に行きます、恰度下女が朝飯の仕度に掛つた時位てす、

私は之れからは毎日も坐敷の掃除をするのです。兎に角早起きしますと、遲起よりは心忙しくなくて終日樂しく仕事が出來るのです、また夜遲くまで起きて居て、坐眠しながら針仕事や、讀書する事も無のです早くさへ起きれば一定の就床時間までに、そんな事をする餘裕は充分に在ると思ひます。

寢坊の諸孃は必ず一讀を要す（評）

○男女交際に就て

神戸　光川もと

男女交際に就ては屢々本欄に現はれましたが、見るなと云ふと妙に見たいと云ふ論旨を基礎として開放主義を稱へらる如きは餘りに皮想的の論てはありますまいか、歐米諸國就中男女交際の盛なる米國に於てすら決して諸姉の想像せらるゝ如き自由の開放主義てなく多くは一定の嚴重なる監督者が附隨せる事を記臆に置て頂きたいのです、而して我國では成程高等女學校等に於きましても男女交際に就ては消極主義を取て居られますが、夫れてすら男女交際は頻々として行はれ、其効果神聖の交際を全ふして利益を得らる人は幾人ありませう、其過半は裏面に至れば敗德醜行が現在か未來かに於て行はれ、會ま新聞に現はる青年男女の華厳病鐵道病等は、其原泉に逆ぼれば神聖の交際は親密の交際となり進んで肉交となりし三時期を經て居ます、是等の弊は男女交際に原因するもので今日一般に男女學生の墮落とか或は淸き交際も尙人目に怪しく映ずるのも皆之に原因するもので現代に於ては寧ろ善良の者は彼等の犧牲となるの止むを得ない勢てある、之我國の男女共に品性を重んぜず自制心に乏きに因るならんも、異性索引の法則に依り親密の結果索引せらるゝは青春の情に滿てる男女間に寧ろ先天的弱點と云はなければなりません、換言せば相互の間に情に打勝つだけの決心と行が無き以上は男女交際を神聖に全ふする事の出來ないのみならず却て弊害ある事の例證と云ふのてある、而して以上の例證は消極主義の現代にあり、然らば此上更に開放主義を取るに到ては其弊害の倍加すべきは火を見るよりも明かと信ずる事が出來ます、されば私は開放主義に反對しなければなりません、と云ふて男女七才にして坐を同うせずと云ふ支那道德の崇拜者ではなく、私の意見としては女學生や少女時代に何も危險多く利益少き男女交際を强て求むるの必要は無い樣に思ひます、各自良心に問ひ、强て神聖の男女交際を希望するものは男女共に情を殺し理につく決心あるものか、將來必ず夫婦たるの決定あるものか、若くは互に夫なり婦を有する者の何れかに限るとしたならば、神聖の交際も得られ而かも比較的利益多く且つ安全なる方法と信ずるもので御座います。

否男女交際論としてたしかな方てある（評）

○表紙の繪について　神戸　みなしご

書肆の店頭に立つて初めての雜誌を見た時、其表紙の繪によつて内容の善惡を判じるのは、世間一般の人情てすから、表紙の繪を論ずるのも、あながち無益の業てはあるまいと存じます。私は第三巻第十號からの愛讀者てすから、先これから始めます。花の中に團扇を持つて涼んでゐる少女の腰掛姿どんなに好いでせう、フックリとした前髪奧床しい容貌惚々と致します。新體詩でも口ずさんでゐるのでしやう唇が微に震つてゐます。全體が神秘的にできてゐて私は大好てす。次に第十一號の白萩は大層氣に入りましたが、花鋏を持つて立つ少女はどうてせう。いやにヒヨロ長い身體に紅い帶、それに鋏の持やうの可笑しい事、手がゆがんでゐる樣てす。私は初め幽靈かと思つて悸としました。それから十三號のは何だか流し目でものを見てゐる樣で、厭な感じを起させます。第十四號のは倚更いやらしいてす。何の爲に鳥と處女とをとりあはせたのか私には解りませんし、處女の身體のやせぎすなのにも似ず、襦袢の襟の出てゐること、一目で身嗜みの惡い人と點頭れます。第十五號の人形を抱いてゐる西洋少女は、可愛くつて〳〵接吻してやりたい程ですけど、頭の紅リボンがちよつと載せてある樣で、見る私の頭までが何だか動かすと、落ちるものでもある樣です。其次四年第一號のは之もリボンがあぶなさうに見えますが、却つて愛嬌になります「あたしこいだけよ！」とでも云つてる處でせう、右手の指を三本と左手のを一本と重ねて笑顔をつくつてゐるのは。これを見ては誰しも幼時を追想して、無限の感に打たれませう、私はいつそもの悲しいやうな氣が致しました。第三號のはグッとそり身になつて、日本一の美人は私ですと云つたやうな顔をして居ます。おまけに前髪を出したこと〳〵俄雨の時、二人や三人の雨宿りには充分でせう。それからずつと飛んで第七號のは風に吹かれてゐるところなのでせうが、何だか、芝居の身振のやうで隨分滑稽に感じられます。東京てハイカラ女學生とはこんなのを云ふのでしやうか？學まだ淺い私が、盲蛇に大家の繪を評論しました大罪は幾重にもお詫を致します。

無遠慮の批評も却つて愛嬌がある、あたつた處もあり、あたらぬ處もあるが（評）

散歩　陸奥　松尾千代



和歌

佐々木信綱先生選



△規定　殊更に舊派と言はず、從來の如く清新の調を望む、原稿は半紙を用ゐ一人一首を限りとす、本名を記入すること、締切は毎月十五日、懸賞品は乙種の規定に據る。

二等

うちけむる小雨の中のあぢさゐに部屋の灯ぬれて雫しにける

陸中國一關大町　黒澤美津子

三等

むらさきに桐の花咲き靄かをる山邊の月に啼くほとゝぎす

上總國君津郡馬來田村野村秀吉方　山口芳子

四等

雨の日や晴れての後のあを空に虹わく夏の湖おもふかな

岡山縣上房郡高梁町御崎町　西原發郎子

秀逸

○長崎　一瀬みどり

鑿とりし神の巧か天の扉に今かけわたる虹の彩橋

○下谷　玉野清子

鶯のぬれ羽の色の若芽して柳ならびぬ春雨の國

○伊賀　三浦志加

わが老に心づく日のさびしみに面やつれたる人の戀しき

○八王子　登美子

江の南笛の音もるゝ賤が家の燈淡き宵月夜かな

○京都市　山口愛華

佐保姫の天馬驅らし宮殿に還幸し賜ふ卯の花咲く日

○岐阜縣　吉田美知子

瀬をはやみ春もながるゝ長良川藤ちる雨に鵜舟上りぬ

○本郷　美野柴二

花の精とよべ語りたる夢なりや非ずやとまどひ白躑躅見る

○靜岡　植木いし

小窓あけて暮ゆく空をながめやる尼若し桃の花散る

○本郷　朝井松子

金屏にあかしゆらぎて岸岱の描きし虎は今吼えんとす

○本所　秋山欣子

曇り空雉子なくなる野の果てを鉦つかて行く小巡禮

○石川縣　木原蓮舟

池をわたる夕風涼し河骨の花ほの白う浪にゆられて

○上總　山口いく子

山の沼や藻の香たゞよふ夕ぐれを月ほのめきぬ霧のなかより

○やみませる母をいたはる湯の宿のあした冷たき秋の初風　肥後　茂里百合子

○鶴二つ湖を横ぎる影みえて浦の寺々いまひるの鐘　石川縣　濟田芳子

○汐かをる海原遠くもやのして月の夜國につゞくと　陸中　黒澤美江子

○花園やなやみ心にもの云はず少女ならびぬ月のぼる　松山市　草村瑩子

○水車著莪さく屋根の二むねの中にまふたり曙の里　風俗莊主

○おもひ／＼衣に香たく三千の美姫にも似たる紅薔薇哉　靜岡市　中村まさ子

○露重き青葉若葉に風立ちて絽蚊張にゆらぐ朝月の影　京橋　細川榮子

○十日あまり病みての後のみだれ髪むすばむまでは君にまみえじ　金澤市　高村やすえ

○文机のすゞりの海は淺くともこゝろ／＼を浮べぬるかな　羽前　高橋きみ子

○あは雪と倶に消えてもこの春は玉の臺の花や觀るらん　紀伊　高森涙子

○烏羽玉の闇路を縫ふて行けるかなつきぬ名殘りを船跡に殘して　廣島市　中島清子

○白波の寄する汀に櫻貝花とやならむ雨あがり哉　下總　三森ゆき

○春の夜は月もをしむか明空にうらみ顔してかげ殘るなり　靜岡縣　豊澤きく子

○樺吹く風に散る櫻花した行く水に影ぞ浮ぶる　千葉縣　西村春夢子

○我が妹は君を待つ夜のはかなさに琴の音さびし五月雨ふる　神田　尾立三樹子

○長閑にも降る春雨に濡れ染めてねむげに見ゆる海棠の花　紅泉女

○温泉の宿暖に日のさして湯煙白う桃の花咲く　神戸市　幽霞里

○みだれ髪洗ふ温泉の朝ぼらけ霞む谷間に鶯の聲　京橋　平井たけ

○亡き父の面影夢にあらはれて語らん程に黄鳥のなく　横濱市　初野子

○朝露を保つ千草を踏みわけて行きにしあとぞ哀れならんや　常陸　鈴村かつ子

○水車かすみを出てし春水に繞うめぐれる音の長閑けき　磐城　久田勝枝

○ただ一人冥府の大野をたどり行く心地おぼへて古里をさる　豊後　菅原芳子

○眞帆片帆浪路ゆたかに風おびて沖に消え行く春のあさなぎ　月島　田村ゆかり子

○かきならす月の琴音のさえ渡るあはれを添えん虫の聲々　沼津　長井とら

○眞砂路に男波女波の打ち寄する渚のほとり濱千鳥啼く　日向　渡邊みどり子

○美しき南の島の港町船より船へ渡る夕鳥　埼玉縣　岩田江舟

茨城縣　鈴村はるえ子

○戀しくば尋れ來れよ我が里に我れは常陸の霞が湖畔　岩手縣　熊谷文子

○少女子の鞠つき遊ぶ庭先にはら／＼と散る紅梅の花　下谷　伊藤いと子

○つれなくも過ぎ行く春のをしまれてけさもなくらむ谷のうぐひす　德島縣　四野花淡

○行春が歸るものなら散花が永世に木枝に咲ものならば　日向　かう子

○大海を渡り給ひて外國の花咲く今日は如何に居まさん　長門　吉村てる子

○竹の音は戀の暗地を通ふらし何れの人の琴に添ふらん　淡町　錦かつ子

○さくら花にほへる春をあとにしていづちゆくらむ天つかりがね　相摸　藤原下枝

○君挿し瓶の姫百合ちる夕ふとおの丶きぬ寒き思ひに　君津郡　勝月子

○暮果て丶田植の唄も絶えて後月影すみて蛙なくなる　豐後　板井きみ子

○木隱に鶯なきて面白く木魂に返す長閑けき里よ　奈良縣　福西田鶴子

○おばしまにより添ひながら月待てばむすぶ袂に秋ぞ通へる　大分縣　工藤しらつゆ

○わが魂と君が想とあはんには植ゑし牡丹の紅おほからむ　遠江　田口津多子

○打ち寄する波物凄き岩の上に誰を待つらん痩せし少女子　大坂市　木村花子

○春風に父島を出る嫁の船船を乘せ行く花潮かな　上總　長谷川芳枝

○藤咲ける上に丹塗の塔見へて鐘なる晝の日は霞みけり　東京　香雪

○さし出る朝日に君を思ひだすかたむく月にわれを忘るな　廣島縣　中島しげ子

○いそ山はまだ白雪の消へなくに海原とほくかすみそめたり　下總　加藤つた子

○思はじと思へど物の思はれて人はこれをや戀といふらん　茨城縣　村野春子

○花を賣る嵯峨の小家の小娘を興じ行かばや菫咲く道　埼玉縣　萩原ゆた子

○桃咲けるみ寺の庭は廣からで法の師獨經讀みゐます　宇都宮　玉野露子

○旅人の行くあしのろき奥州路杉の並木に夕日しぐる丶　越後　伊藤幸女

○節々と雨ふる朝に阿賀野川舟こぐ音のかすかに聞ゆ　三重縣　紅子

○村人がわれみ迎ふる渡場の川添柳はるの風吹く　新潟縣　岸はつ子

○木下風葉の香も澄みて心地麗し汚れし胸の鏡も晴れぬ　靜岡縣　清水新子

○春風になびき／＼て朧夜の月にしづまる糸柳かな　佐渡　相田かすみ

○枯れし木もみな若がへるよそひして卯の花垣にほと丶ぎすなく　若狹　早水その子

○名札見れば我名と同じ若狹路の木犀さける山家の家　周防　かつ子

○さなきだに寂しき袖のこの夕君行きますか遠き御國に　遠江　小林とし子

○綾う菜の花咲ける江の南草の家見えて雉ぞ鳴く　京都　武部柳葉女

○君戀ひてなれし我家を立ち出てば思ひておほき殘る夜の月　遠江　岩淵紅子

○ほろ／＼と散りしはちすの花びらに君に送らん歌かきてみぬ　武藏　萩原ひろ子

水清き小川に櫻桑洗ひつゝみず繪に似たる遠の山みる

○ 三重縣 多氣邦子

浪のおと松のひゞきも涼しきな月さへ清しいそのまさごぢ

○ 鹿兒島 露萩子

燭映ゆる欄に寄る君なつかしみ仰ぎ見勝の春雨の闇

○ 薩摩 山下浪子

亡き妹の愛にし花は咲きしかど辿りとゞけん道しらずして

○ 讃岐 河合菊子

限りなき青海原の眞帆片帆に人目に見えぬ神風ぞ吹く

○ 三河 藤野ふさ子

美しき戀の譜彫む音にも似て葉ずれやさしき森の宵かな

○ 伯耆 久子

夏川の流れしづけき森かげに小舟浮べて友と語らん

○ 小石川 梶水仙子

春の日の靜に暮るゝ道の邊に小唄歌ひて少女草刈る

○ 下總 青雲子

野に立てば唄ふ小鳥や樂の音やわが世平和の日はうららなり

○ 熊本市 加納白薔薇

紅に牡丹は咲きぬ夕暮を細き雨す夏るの狹庭に

○ 岩手縣 不二根柊子

美しき日影あびつゝ少女子が菜の花つゞき蝶追ふて行く

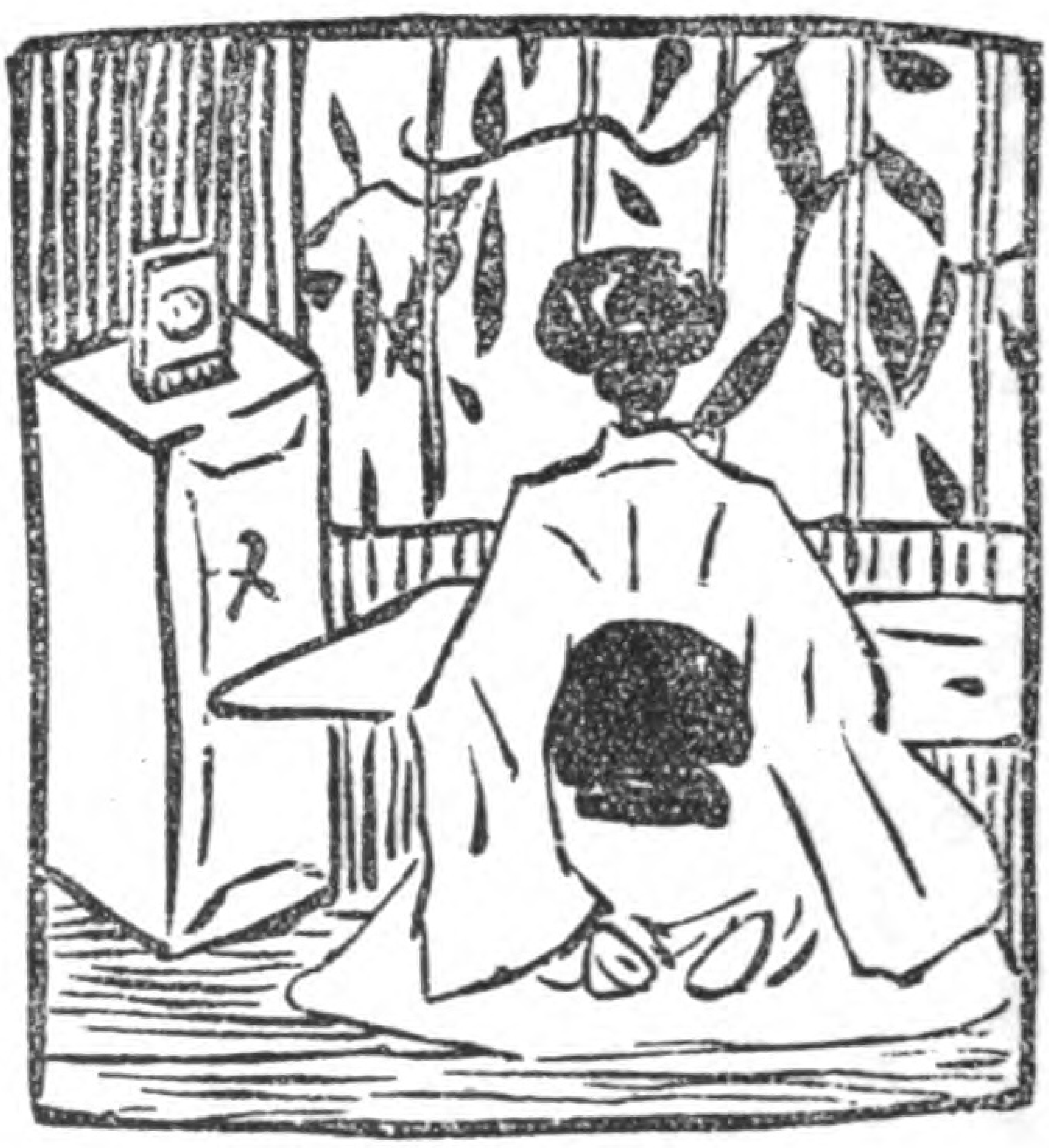
○ 靜岡縣 絹村伊知子

村雨の晴れて萩花うなだれて胡蝶すがりて羽動きもせず

○ 埼玉縣 岩田文窓子

歌人のさすらひ來り手折るらん青き深山に白百合の咲く

○ 山梨縣 有賀久代



南窓 千葉縣 松ヶ枝浪江

杉の花こぼれて落つる森のゆふかへり見がちに君と別るる

○ 福岡縣 還はる枝

麥生の畑に菜の花彩りて青空高く雲雀なき寄る

○ 廣島縣 池田まさよ

病む身獨り砂にやせたる影ふみてありそに立てば春の日落らぬ

○ 上總 北澤信江女

人心おほかたたがふ世の中に花は櫻といはぬものなき

○ 日本橋 森茂枝

嵯峨野より駒忍ばせて歸りくる狩衣の人よ有明の月

○ 安房 池田秋子

山深み人も訪ひ來ぬ村里に春を知らする鶯の聲

○ 秩父 近藤登久子

胸に秘む若き思ひを語りつゝそゞろ歩きぬ菫咲く野路

○ 和泉 藤原美代子

み社の森にひゞきぬ拍手は我が戀ふ君によく似たるかな

○ 芝 黑野信子

野みやきて榎の夕我れたてば橋場のさとを杜鵑啼く

○ 仙臺 しらぎく

なつかしや緑の色の濃き庭に咲けるしら百合君と思ひて

○ 埼玉縣 ちやう子

早暁をもとめあぐみて躑躅山かすかに利根の白帆見えけり

○ 越後 眞柄ひろ

日もさゝぬ木かげに生れしかひわれの萌えに針刺す心怖はしや

○ 石狩 西部秋江

玉の宮の黄金の柱それよりも萃しげれる我が家戀しき

○ 攝津 和久薫子

粟田口大津へくだる朝まだき青葉がくれに杜鵑なく
大和　豊田秀子
○
道づれになりし都の女給師月の小舟に鐘聞く夜哉
大阪　久代
○
たち迷ひに身はひかされどかたときも心にやまぬ歌の道かな
上田あい
○
春もゆく片山里の此夕卯の花白し野の一つ家
三重縣　川原操子
○
きみが代をおもひ出らむ庭かげに打かたぶける姫百合の花
大阪　山内溪子
○
白菜咲く黄色菜畑や麥畑の末はおぼろの村の美し
下野　青木その
○
埋火のぬくみ競らう窗のゆふべなに祈るらん夜鳥の聲
熊本縣　宮川鈴子
○
賓客の歌のなる間に夜は更けて片野の櫻月おぼろなり
宮城縣　花江女
○
あゝ寂し天地くもる野に立てば心亂れて吾涙しぬ
富山市　小林芳枝
○
かくあるも期しぬといひて薄ふ笑み棄てゝ去りぬゐ友もかなしき
三重縣　川原操子
○
逗ひよりて膝にたはるゝ稚兒のほゝ笑みればほゝ笑まれけり
佐渡　中川花子
○
鶯のなきつる方をたづぬれば今きりすてし松の一枝
上總　椎名てる子
○
花うばらかをり冷たき夕ぐれの野にたつ人の鐘ひゞくなり
上毛　飯塚登里子
○
茶の花のかをりつめたき朝の窓はるかに遠き富士の山みる
岩代　月村なみ子
○
細殿のほかげ小暗き薄月夜おばしまに思ふうら若き人
美濃　日比野小霞
○
のどかにも霞をわけてぞあさにほふ梅咲く庭の春の夜の月
大阪市　生田みのり子
○
ほろ／＼と芥子の花ふる夕ぐれを尼となりけり美しき人
新潟　大淵貞子
○
物思ひ思ひに沈む闇夜に冴え行く笛の胸ふるはして
静岡縣　照子
○
古里の父母思ひ姉思ひ月にふけ行くきしく舎のまど
牛込　山本とら
○
荒波をこして行くなる人の身の岸をのぞむは皆一つにて
松園すゞの
○
幸多き女と人はうらやめど知らずな胸の深きなやみを
愛知縣　新美清子
○
君は花我れは小馬とよそへ見てそぞろあまるる春の野邊かな
静岡縣　良水孤蝶
○
あめつちの春はあとなく逝きにけり富士の白雪今海に入る
三河　宮田梅子
○
外國に住みます君を忍ぶればつきに語りし昔戀しき
紀伊　岡村ふさ子
○
夜雨ふる宿の小窓にうなだれて君と別るゝ日を思ふかな
下野　三浦梅香
○
つくしつむ少女は乙振の袖あげて蝶の行方を打ち守る哉
千葉縣　關屋すま子
○
薄月夜馬子の謡歌おぼろなり桃の花咲く追分の路
大和　豊田晴子
○
いもうとゝ摘りし蕨の小さき束に櫻まじへて雨細うふる
千葉縣　葛岡はな子
○
蚊遣火の煙の末に日は暮れて十里の青田霧たちこむる
静岡縣　香川むら子
○
うつし世の何を嘆きて夜もすがら池の汀に蛙なくらむ
静岡縣　杉山じゅん子
○
しげりあふ森の水枝のわかみどり薄きは何の梢なるらん
下野　下河邊なみ子
○

○
病むわれの胸に亂れて響くかな奇しき其の音山寺の鐘　廣島縣　和田しづえ

○
我が思は都の少女夢に見る黄金の花に胡蝶舞ふ圖　清國　藤本まさ子

○
牧舎を出て羊の群の行く方に春の水見ゆ草青き中　和歌山　南出靜代

○
我がいほは白帆も見えぬ奥山の蜜柑花さく草しげる里　信濃　岩波二葉子

○
我が思ふことの半もなりはえて今年も春は行きにけるかな　熊本縣　金子靜子

○
しめやかに春の雨きゝ文よめば花瓶のさくら靜かにちりぬ　中原　小高はる子

○
時ならぬ櫻に雪のかゝれるは冬を忘れて醉ふな世の人　但馬　仲村芳子

○
花霞たなびき初めて昨日今日賤が伏屋も長閑なるかな　濱田町　和田岩子

○
みだれ咲く紅花は妹が頬に似たりと桃の日記に　茨城縣　花野子

○
村雨は露を殘して晴れにけり蟬の音涼し夕顔のやど　大阪市　梅女

○
きのふまでなれし軒端の山の井も掬ふに堪えずなれる頃哉　三河　宮田梅子

○
長き日を田の面にくれて少女等がうちたれ髮にとぶ螢かな　丹後　桃花女

○
ひとたびは忘れ得し人思ひ出て涙して立つ五月雨の窓　下谷　平野曉子

○
君逝きてあらぬ病に冒されぬ涙かはかぬ五月雨の時　神田　杉本朝子

○
夕風に池の白蓮さら／＼と袖に玉散る夏の夜の月　熊本　靜間まさ子

○
梅雨はれて匂き夕日やはら／＼と薔薇の露ちる蝶の彩羽に　秋田縣　三浦ふみえ

○
象潟や蛤あさる少女子の籠に散り込む入豆乳花　山城　村田政女

○
ふとつみてふと口づけてふと捨てし野の花われになにのよしある　肥前　藤本薫子

○
わけくれば袖うちしめる夕霧に梅の花門あらはれにけり　遠江　平野すみれ

○
春の野や草はむ馬の背に乗りて笛吹く顔に櫻散りぬ　茨城縣　西野春淑

○
家二軒となりの遠き山里に昔ながらの山櫻さく　越後　横山文枝

○
曠野行く吾魂よべど答なくたそがれの月にまた獨り泣く　岡山縣　播磨吟子

○
昨日まで花にくるひし園の蝶今朝は何所に春雨のして　大阪市　北村春千

○
神のますエデンの園に世をさけて睡めずれむれよ牧の小羊　日本橋　岡本梅子

○
生垣の内より洩るゝ琴の音にふと立止る川添の道　程ヶ谷　中村清子

○
なつかしき花の故さとふりすてゝ旅路の今宵君をゆめ見る　長崎　辻みつ

○
庭の面は月もらぬまでなりにけり楢は夏の影茂りつゝ　豊後　松岡こう女

○
白虹のまばゆきなかに聖歌うたひさましまつらむなき母の夢　茨城縣　西野春淑

○
歌をうむ村とし思ふひくき家の薔薇咲きけり初夏のあさ　靜岡縣　水野秀子

○
いさゝ川清き流れに影見へて吹く風涼し夏の夜の月　上總　四之宮姿子

○
しろがねの鐘のよき音は夕霧の廣き野見せて上總は暮るゝ　茨城縣　秋山芳子

ちひさなる望にいきて小さなる望もとげてうせぬべき身か
○　上總　秀月女

離れても君や如何にと忍ばれて眺むる空に雲の絲かな
○　福岡縣　青山の女

山の端はそこともわかぬ夕ぐれに霞みて出づる春の夜の月
○　大阪　今阿こゆき

山の沼に漂ふ藻の仄き香や南の國の磯思ふ哉
○　駿河　宇佐美克子

思出てぬ月こそなくも春の夜の空に見えけり古郷の山
○　千葉縣　落合靜子

うつくしく咲き揃ひけり薔の花はやく見せたやわが父母に
○　尾張　つばき女

夏の夜に笛吹きゆかばほのかなる誰がすむ里か小百合眞白き
○　岐阜市　篠田とみ子

君が胸に丸き波紋を幾重ね月も宿るよ蓮の葉のつゆ
○　若狹　津田汐汀

我が胸に戀のうまれし日を思ふ落葉の森に芽の出てし時
○　伏見　山田幸子

緑こき鎭守の森に日は落ちて晴れ渡りたる夏の夕雲
○　後志　橘本千草

別れては又逢ふ事も片糸の思ふ寢覺めに五月雨みだるゝ
○　みなしご

川沿の青柳ゆらぐ夕まぐれ音なく落つる紅椿かな
○　横濱　増田辰子

春ざさの晴るゝあしたのつみ草をあさるやぶべにうぐひすの聲
○　丹後　河島美年子

小雨降る秋の夕日をたど／＼と旅僧一人山路へ登る
○　島根縣　岸臣幾代

故郷の青葉の家に極貫る初夏日かやみ母戀しき
○　徳島縣　照子

夫とふたり田うち畑うち今終へて月のかへりぢ菜の花にほふ
○　越智郡　佐野雪枝

佐保姫の凪れし凝を解くかとも三日月かゝる青柳のかげ
○　伊賀　三浦くま

いたづらに旗ふめづる子ならねど別のきはに君つよかりし
○　福島縣　笠岡きの

咲きそめしみぎはの櫻さかしまに見せて霞み行く春の河かな
○　羽前　高橋たか

山里はまだ雪深く積れども時を忘れぬうぐひすの聲
○　中津　やま川

やはらかき東風いつか雨をよび月は蝕しぬ峡みの雲に
○　尾張　鈴木詠子

野も山も見渡すかぎりみどりして朝風いともはれやかに吹く
○　千葉縣　みさを子

青葉吹く風の薫りの床しさは花を恨みし心にも似ぬ
○　下野　玉野清子

岩清水底の眞砂は白銀の魚とならまし此の春の日に
○　本所　高橋葵子

母君の靈に手向けし花椿入相の鐘にはら／＼と散る
○　神奈川　津呂木鶴子

舟一つ又舟一つこぎ下る夕立ち過ぎし玉川の里
○　遠江　小林とし子

夜の霧月の光りと見る人の胸くもらせてうすく流れぬ
○　泉　たつ子

張板の更紗に散るや柿の花眞晝靜かに炎陽もゆる
○　山口縣　酒向とし子

夕がすみうちながめつゝつく／＼し袖につゝみてのらかへりけり
○　北總　浮船

春なれば萬物笑ふ昨日今日病に惱みぬ我身一つは
○　岐阜縣　とし子

藤の花深紫の影うつし物靜かなる山添ひの淵
○　靜岡縣　植田清子

ふくる夜に亡き兄上を思ひつゝ行く道ばたに蛙飛び飛ぶ ○ 大阪府 岩根春江

たがあとゝ思ふ心の夢のあと打忍ばれて夜ぞ更けにける ○ 三重縣 山内絹子

夕月のかげの上こぐ舟の内にすゞしさそうるいほのまへかぜ ○ 遠江 寺田はる子

我が病める身の邊をそよぐ風さむく露おく顔にうすく月宿る ○ 豐能郡 寺部君子

おかひこの桑はむ音のみ高うしていとしづかなり夏の日ざかり ○ 愛知縣 内山ふみ子

清く澄む小川にそへる花野道苗田守る子のいと長閑なる ○ 大阪府 金田芳子

岩が根を踏まへて谿谷をのぞきなば白百合の香の袖に馨れぬ ○ 佐賀縣 松本都留子

うつゝなの人にほゝ笑むさまにして櫻散るなりおぼろ月夜に ○ 神戸市 高橋紫峯

京の鐘花の瓔珞緒をたえて紅のにほひに鳴りつたへきぬ ○ 廣島縣 兒玉苺葉

君と別る晨波止場の月影に香り冷たき紫陽の花 ○ 伯耆 竹本春江

從姉君のみ膝にもたれ春の野に歌ひ暮らせしむかしを思ひぬ ○ 岩代 梅せん子

鬼面のたかれな西にながめつゝひろき野のはら我あゆむなり ○ 美濃 飯島敏子



紅椿一つこぼれし小なゐにひいなのかむり中ばこけたり ○ 大阪 ます子

池の面に降るとしもなき梅雨に音こそしきれ軒の玉水 ○ 西海浪女

菜の花に遊ぶ胡蝶の影消えて燈火かすむ春の夕暮 ○ 常陸 あさ子

初夏 青森縣 田島まつ

早苗とる人は歸りて夕月の影仄かにもなく子規 ○ 下野 栗原くに子

何神の秘め給ふらむ花畑此世にあらぬ心地こそすれ ○ 上總 久子

露のあるまがきに咲ける朝顔のひるがほの世を知らでしほるゝ ○ 相摸 鍊田笑代子

乳母君の死せし夢見し淋しらの夜あけの頃か時鳥なく ○ 上毛 飯島喜代子

夕まぐれ吹く山風に散る花を一人見て行く旅の法の師 ○ 安藝 すゝき

絶へず戀ひし人は隱れぬ山吹の咲き滿つ川の磯を辿りて ○ 山口縣 深山露

名も知らぬ山の端近くさし出てし月も朧ろに小雨降るなり ○ 廣島縣 國信露笛

君や來と燭をかざして花の扉を押せば蛙の遠鳴きもるゝ ○ 高松市 伊藤やえ子

花うりの少女のあとをしたひつゝつばさゆたかに飛ぶこてふ哉 ○ 深川 小泉すえ子

[illegible]從や花は實なき君が門こゝろ靜くも咲けるしら梅
○　臨たき子

ちぎりてしかたみに植ゑし白藤のかげに苔むす君がおくつき
○　埼玉縣　柏原ます子

妹の手折り來りし櫻花繪の具とかして寫し畫せむ
○　近江　菊笠みつ

夕ぐれな寂びし顏仰げ涙する人につめたき星のまたゝき
○　牛込　市田輝子

島かげに月さし昇る夕まぐれあまがとまやに煙白く立つ
○　大坂　木村春江

なき人のめでけむものと庭の子百合手折れば袖に露ぞこぼるゝ
○　山口縣　新田俊子

たのみてし命の吾子なさきだてゝ添乳の夢やさびしかるらん
○　橫須賀　佐藤菘枝子

窓近き花に身た寄せ指折りて君の在はせし昔をぞ思ふ
○　千葉縣　有無名女

春風や朧月夜に庭端の見えて隱れて散る櫻哉
○　伊賀　山村すみれ子

かりそめにみづからゆひし洗ひ髮絽蚊帳にふれてくづれけるかな
○　神戸　久野子

初夏や庭の白ふぢちり失せぬつゆも涼しき若葉がかげに
○　玉香　玉井玉子

今咲きて一夜の花と滿るらむ涙と別れ又明年の春
○　信濃　伊藤利子

神前に灯火ともり古の匠がほりし狛獅子動く
○　東京府　ほたる草

山櫻ちりぬ少女の鬢の上に春の夕日のこぼれさすとき
○　千葉縣　すみ女

このまゝにゆけばいづこの人里や春の夕をしらぬ河原に
○　千葉縣　三橋愛子

頂きりや行基は去りて一千年寂しき鐘に一人物思ふ

葉櫻の窓なつかしや五月雨の日記つゞきぬ初たびの空
○　沼津　渡邊とよ

少女子よ一つはのこせ花すみれやどなき蝶のいじらしければ
○　京都　岩淵國子

日は落ちて五色雲の流れ出て山寺の鐘の音遠く流るる
○　岡山　吉井貞女

戀しさのあまりに母の墓とへば若葉がくれに郭公鳴く
○　上總　松崎かつ子

戀猫の別れて戻る森陰の草の庵に春の月照る
○　千葉縣　松ヶ枝浪江

故郷のあれまさるこそ悲しけれ野末はるかに煙吐く山
○　岩代　根本[illegible]女

五月雨の霧とも見えず一すじに薗の横よりのぼる白煙
○　備後　井上年子

限りなき大海原は目の前に松風涼し見晴しの庵
○　京橋　細川榮子

三保うらて天つ女神が羽衣を廣げし如き庭の櫻木
○　越後　かなる

富士見えて風そよ／＼と夢畑空に雲雀の聲消らけき
○　伊勢　かすみ

衣更へて絵日傘さして乳母連れて姉許ゆくやいたいけの顏
○　橫濱市　三橋喜子

見えがくれ青葉の奥に進み行く灯を追ふ灯あり不如歸なく
○　奈良縣　中富よしみ

藤なみにそめし衣をぬぎかへぞ山郭公しらずかもあらん
○　奈良縣　下階すま子

みだれ刄に春の香ゆるゝ夜もあらば忍べ吾兄京は花ちる
○　信濃　安坂富美子

雨そぼる若葉の森に風過ぎて病舍小暗く郭公なく
○　茨城縣　村野靜枝子

さびしらに今日の一日は語らずと朱書して見たり五月雨の日記
○　豐後　加納豐子

短文

藤紋局選



規定　十六字詰七行以内、總て振假名を付くること、締切前月同斷、懸賞は乙種に據る

二等　○花束

麹町　野村　光子

天上に輝く星の花と、地上を飾る美しい花と、私の心に咲く花をも、一所に七夕樣の時の五色の絲で結んで、私は花の神樣に捧げ度う御座います。

胸の花は紫か緋か

三等　○四つ辻

愛知縣名古屋市大阪町一丁目　坂野　宮居

私はいつも夕方になりますと、幼い弟を眠さしがてら、門外を散歩しますが、程近い四つ辻まで來ますと、必何方へ行かうかと思案するのですけれども何時ても足は知ずく\の内に、南の方へ向つて居ます。此通は蓮華の咲いてる野へ出る、唯一の道てす。

迷ひ易い十字街頭、行け花の咲く道へ

四等　○女子文壇の置き場

信濃　太田黃紫子

お天氣の好い時は畦の草かげ、雨が降れば袂の中、ふところ、または座布團の下にしばらく苦しさを忍び時によると便所までもお供をする夜は枕邊にお伽、ほんとに正しく棚に置た事はありません氣の毒てせうか。

飾る人てなく讀む人、女子文壇曰く、此君の爲ならベラ／\になつてもい／\

五等　○但馬

兵庫　明月

私は都から當地に參つて居る者ですが、全體但馬といふ國は一年の六分の三は雨天、六分の二は雪、六分の一は晴といふ風に實に晴天の少ない陰氣ないやな處でございます、然ども此地の人はこれに滿足して、但馬ほどよい國はないといつてよろこんて働いて居ります。

評は不滿足の國を造らず

秀逸

○見ぐるしきもの

四谷　網野　田都子

四十五六て厢髮にして居る人、四五日前に降つた雪が道傍に泥と交ざつて高く積んてある樣。其からカラもカフスもねずみ色に染まつて居ながら髮ばかり、とんぼの樣に光らして居る人。此の三つが私の一番嫌いなもの。

此嫌なものは東京に限る

○山中

靜岡縣　絹村伊知子

妾の家は山中です、木の花草の花年中たゆる事はありません、なほ此頃は西の谷に藤の花下がりて丁度紫の布を掛けた様でありまず、其の上の山は一面つゝぢがおびしげり赤い敷物をしいた様です。

山中の花、自ら光澤あり

○炭つけ　磐城　片野よし子

今朝も例の哀れな炭つけ女は誰よりも早く上つた。何となく悄々して鹿毛馬の後をついて行く姿。妾は夫を見るともう胸が一杯になります。彼れの夫と云ふのは五年の昔鴨綠江で亡くなりました。彼女は一人の義母を引き受けて。僅かに馬の背をたよりに細き烟を立てゝ居るのです。

願はくば彼女の上に冥恩あれ

○袖の經歷　本郷　朝井千とせ

二尺の袖丈を一尺八寸五分に詰たのは小學校を卒業仕た時、七寸五分に仕たのは女學校を了へた時、七寸は御嫁に行く時、六寸五分は初めて母様に成つた時、是が姉様のお袖の經歷てムい升、私はどうぞいつ迄も七寸五分で居度いと思ひ升わ。

友禪になり、飛模様になり、紬になり

○虹　仙臺　白菊子

虹がかゝつたとて、弟と妹が大さはぎをして居りますから、私もそつと障子を開けて椽側へ出て見ますと、成程美くしい恰ど七色に染めた反橋のよう、松葉に宿つた露もぬれた椿の葉も皆七色に光つてゐる、乾度佐保姫様があの虹の橋をわたつて天上になるのでせう。

天女が隨喜の涙

○こてふの歎　丹後　鹽見千代子

非常に風が烈しかつた日の暮間、ぶらぶらと二十坪の中庭を彷徨ふてゐますと、花散り盡した海棠のあたりに二つ、木犀の下に一つ、いづれも白い蝴蝶が、破れた羽根を廣げて、死んでゐました。

例の甚へ

○よだれ掛け　越後　伊藤幸女

私が極く仲の睦い友の君の御妊娠と、聞きまして、漸く出來上がりました、幾日も苦心して、よだれ掛け、思ふともなく女向きになりました。眞心込めました印斐有りまして、女子御分娩との今朝のお知らせ、本當に嬉れしうムいますこと。

女は女びいき

○ゆめ　遠江　芳子

菫の花の黃色や紫や紅や白のそれはそれは美しく咲き揃つて居る春の野へぶら〳〵と來た私は思ひのまゝに其花を摘んであゝ嬉しいことと思ひましたらゆめでした。

簡にして盡

○妹のばら

下野　磯　みい子

私の妹は一昨々年の丁度、櫻の花が咲く頃に病みつきまして、同じ年の白萩がこぼるゝ頃にはもうとうとう彼の世の人となつたのです、不思議なことにはうちの庭にあるばらが其の年からは、春夏秋とたえずに咲いて居ります。

妹さんは十二とやら

○新體詩

伊豫　しづ子

私新體詩を讀む毎にいつも斯う思ひますの、是に悲哀歡樂それ〴〵相應しい節をつけて琴に合せて謠たら、まあどんなに心ゆく事でせうと、そして此度文壇の花に入撰せられた方々の御作を見て一層此感を深めました。

追々はさうしたいものです

○新歌謠

丹後　桃の花

妾は鄙唄が好きで御座いまして、姉樣と桑摘みしながら女子文壇に出る新歌謠を、姉妹聲を合せて唄ひます

恥かし　仙臺　金德子



が、其愉快さはとても妾の筆では書けませぬ。あまり面白いので姉妹で唄うのみではと思ひお友達にも敎へてあげて居ます。

淨山の方に敎へてあげて下さい

○玉川ざらし

青梅町　雨宮　琴子

私の家では夏季に成り升と淸流の玉川で布晒が家業で、天氣なればよく白く上る、雨天ですと上りがわるいので、皆樣方に着ていたゞくのに、天氣から選び升、朝起升と一番先に天候を見定るのが父上の役、只今迄たいてい見そこないした樣な事一度も有ません。

此文の作者までが美くしい方のやうに思はれる

○父樣　鹿兒島　みゆき

モウ僅だ故つて母樣が仰る故今日も桃割に結んて根掛は櫻色を重ねた白の丈長にしましたお鐵のお湯を金だらひへ移つて顏を洗つてるとおい〳〵つて離室から父樣がお呼なさるハーイつて何心なく行つて見ると机の上に白い奉書紙を二に折つて墨の匂濃く目錄と書てあつた。

近づく吉日

○五百羅漢　　岡山縣　寒菊

今日は何だか淋しいので、死んだ方の顔が必ずあると云ふ五百羅漢へ母様を探しに行きました、暗い濕つぽい御堂に入つて五百の靈像一々見てゐますと隅から四番目に母様そつくりのお顔が、私は身戰して飛出しました。

母上、明るい處へ出てたまへ

○山吹　　伊狹曉子

お床の花をさすのは私の役目です。百合でも櫻でも十日の餘も生きて居ますが山吹計りは二日計りで凋んでしまひます。山吹は七重八重に花は咲けども實のなきもの、子なき女のこゝろもあの様に凋んで淋しいのかと氣の毒に感じました。

女らしい

○秋ごゝろ　　[illegible][illegible]　代美子

月もなく星もなく薄どんよりと曇つた晩でした、御奉公に上るとて初めて懐しい我家を後にしたのは。そゞろ名殘りの惜しまれて見返り勝ちの我家の門に母様も立て私を送つて居らるゝやうで、たまらなく熱い涙がほろ〳〵と落ちた。此夜私は世の中に出たのでした。

おもひて

○入賞祝　　上毛　伏島納尾子

父上は此間の論功行賞で勳七等青色桐葉賞を授けられましたので入人にお祝だと被仰てうな丼をとつて下さいました、私も今日から一錢づゝ毎日貯金して女子文壇で入賞になつたら貯へ得ただけの御祝をする事にしましたお蕎かお汁粉かそれとも西洋料理てしやうか。

其時は記者へも……

○花神の少女　　[illegible]島縣　西野ひさし

私の家の裏は、廣い廣いれんげ畑でございます、昨日も八つの君ちやんと、蝶の様に花に浮れて紅のもうせんの上に座りまして、私が糸で花をつゞり、大きな花わをこさえ、妹の首に掛てやりましたら、大そうよろこんで、ニッコリ笑うた其顔其姿『妾は姫のみ使なり』と云ひそうでした。

其姿にて舞ひ出でよ

○織機　　熊本　ふさ子

私はこの頃母様に教はりて、織機のけいこをしてゐますの。中々むつかしいのですよ。一梭でも不注意だと、取りかへしのつかぬきずが出來ます。そして、面倒なようで早いのはこの織機！　私はつく〴〵さう思ひました。ちようど人の一生もこの織機のようだ。と。

とん〳〵はたり、とんはたりと織られてゆくは何の摸樣ぞ

○雲雀　松山市　草村瑩子

雨はいつか晴れた。すゝり泣く美ちやんを負つて野に出る。しめつぽい風がおくれ髮をふいて、白い蝶が低くとぶ。雲間から白く幾千條も日の筋がさして、どこかで雲雀が囀る。泣きやめて、じつと聞いてゐた美ちやんは、自分でも何か小聲で唱ひ出した。

嬰兒も自然に感化せらる

○五月姬　上總　ひさ子

逝れた姉様が月宮の侍女になつた夢を見ました。窓を推すと穩な夜の光は青葉を辷て琥珀を湛へた池汀には菖蒲花が浮繪の樣に咲てます。珍しく蛙の聲も聞えぬのは今お使の五月姬が玉の壺を抱て天降られるのでせうか。妾はそれが姉様だらうと思ひます姉様はあんなにお髮が黒くて美くしかつたものを。

文、いよ〳〵絢爛に進む、進んで平淡の域に入るは何の日ぞ

○高瀨の曳船　京都　綿引眞砂

流れは北から南に木屋町の路と平行して船が二つ竝ぶとすれ合位に川巾も狹く深さも一尺はないが水の淸い事は川底が透き通る樣麗らかな春の日影をあびて多くの船頭が綱を引きながらエンホイの掛聲で上つて來る岸の青柳はそよふく風になびいて何となく趣がある。

花實るは白河女、傘させるは祇園の舞妓

○青葉寺　東京府　飛川眞琴女

涅槃會の鐘の音は、郭公の一聲二聲と變り、花の寺は寂びて青葉濃やかになつた。板朽ちた御堂の椽に、頭下した若僧が、赤塗の机に椅つて、頻と經本を寫してゐる。鐘樓の邊りには白鳩の群れ。

○淚　下谷　藤田ゆう

花には奇麗なものあれば奇麗でないものあり、薫のよいのもあれば、いやな匂ひのするのもあります、けれども淚は奇麗です、死刑の宣告をうけるやうな汚れた心をもつてゐる人の眼から出ても、淚ばかりはすきとほつてゐます。

○裏庭　秋田縣　三浦ふみえ

柳の芽が一寸ばかりに伸びて居る、櫻は滿開だ。蜥蜴でも見つけたのであらう、アンダルチヤンがクヽと、啼いた隣りから眠むそうに梭の音がもれて來る。桃がひら〳〵と鳥屋にこぼれた。

○雅號　府下　並木蝶子

私は投書される度毎に雅號を換へました、今迄には眉月、秋水、紫蘭、菊江、梅二、なぞとしたが、皆投書ばかりして仕方なしに此度からは本名の蝶子として投書する事にしました。

○寂寥　愛知縣　成田いし子

妾は淋しい思ひて門の柳に身を椅せた、何故妾はこんなに心淋しいだらう、その原因？自分にも解らない、と見る鎭守の森の上に美しく輝いて居た二つ星のその一つがつるり辷つて、あとは一つ、急に光が鈍くなつた、それだ、呼、自分のもそれだつたのだ。

○私の身　宮城縣　小野寺りよ子

世の中に私程不幸な者はないかと思ひますお母樣には八つの年に死別れ力とたのむ二人の兄樣は遠き米國とやらに今家に居ますのは八十　になるおばあ樣と五十一になるお父樣と十九にな

る姿と十一に九つと五人ですお父樣は村役場に小供は學校に姿は內のことを働て居ます殺草餐畫も忙しいので目のまはる程働かればなりません。

○麥の秋　讚岐　寺部君子

麥穗が赤く色附いて來て、早い處は刈りて居り升。此秋は後に田植を控へて居り升ので、後れまいと、皆我一に慌てゝ仕升から誠に多忙いのです。其に其處此處で柄竿の音がトンカンと仕て頻りと長う引いた歌聲を開くと何だか懐くなつて眠氣を催し升。

○初めての仕事　常陸國　鈴村かつ子

姿は今年から農業見習ですから、母上樣といつしよに、麥作切に、行きました、そして、半日ばかり切りました處が、姿の手に大きな豆が、三ツばかり、製造致しました、一日仕事をしても、母上樣の半分もやりません、なんだかきまりのわるいのよ。

○村の規則　安房　櫻子

日が沈むと同時に風呂の湯がわきましたので、兄樣に拍子木をうつてもらひました、之は家に御湯できましたと云ふしるして十八戶の私の村の一大規則なのです。

○黑髮　島根縣　釋臣幾代

一日、舍内に獨り殘つて、髮を解いて居ました。すると、七歲の時分採の袖長うお母樣に添うて立つた、おぼこ姿の邪のない……其當時の面影を不圖思ひ浮べました。嗚呼十年！今は丈に餘る此黑髮ですが……。何故か得知らずの涙がハラ／＼と落ちました。

○三色菫　山口縣　深山篤

私が大事にして居ります三色菫の花が此頃二つ三つ開きました、花の形がまるで可愛らしい蝶々のやうだと云ひますと、姉さんは人の顏の樣だつて云はれます、そしたら兄さんが傍からまるで猿の樣だと云はれました。

○あらぬ噂　秋田縣　佐々木貞子

垣根の卯の花あまり美しいので、毎晚眺めて歩いたのが思はずもあらぬ噂を立てられて、母樣からも散歩を禁んじられました、姿口惜しくつて／＼三日三夜閉ぢ籠つて泣いてゐる內花はいつしか散つたけれどあゝ姿の噂はまだ消えない。

○私　伊勢　中谷ひさ子

私は何故こんなに成つたんでしよう、二三ヶ月前から人に逆ふのが嫌やでいやで、斷然が一寸耳へ這入つても氣に成つて仕方がありません。そして今迄の樣に着物や、リボンなんか一寸もほしくありませんの、本杯讀んで居つても、おきに厭きて參ります。

○病氣　韓國　原登里子

好んで病氣になるのではないが、生れつき弱いのだから仕方がない、兄樣は本を見るから病氣になる、これから本を見て居たら取あげてしまへと醜姉樣に被仰て居られた、あゝ姿が唯一の友たる女子文壇を見る事が出來なければなほ病氣になるでせうと思ひます。

○胸にぎつくり　松代町　すみれ

私の讀書する時間は夕飯後と定めてあるけれども今屆いた斗の女子文壇が裁板の上にあるのでどうしても仕事が手に付かない縫さしの弟の羽織を下に置いてたれか來はしまいかと四方に氣をくばり乍ら見て居ると突然後から早く縫つてお仕舞よと繼母さんの聲がしました。

○蟻　愛知縣　永田舞鶴子

私いつも畑から歸つて來て晝飯を食べて居まするとも數知れぬ蟻が、餌でも強請る樣に遊つて來まするので、飯を一粒遣りますると、蟻は大勢掛かつて自分の家へと運んで行きます。

○春の火事　信濃　小林しん

四月廿二日二十八戶の淋しき組あの大南風に出火し十戶燒失して殘るは十八戶實に淋しいやけどは火におじるとやらて、其後は煙草の吸がらにも氣を付、近山の野火も、おそろしくてなりません。

○讀書の競爭　茨城縣　石川とよの

姿の家では毎晚ご飯がすむとお父樣は新聞を兄さまが中學世界姿が女子文壇妹が少女世界に末の弟が日本少年と銘々に讀み初めるのです、すると弟はいつでも大きな聲を出して讀むものですから他所の知らない人なぞが通りかゝると書いて立ち止まるそうです。

○天國　本郷　肇子

しと〳〵と春雨の日庭の花菖蒲が咲く、原稿を書くと思ひの外氣に入つた時『お茶がはいつたよ』と母様が香ばしい新茶と好物の栗饅頭を下さいます。私の思ふ天國は正に此の時てす。

○猫の子　土佐　弘光　芳子

多くはいらぬからと隣の小母さんは生れたての猫の子を紙に包んて川へ捨てにゆく處私は思ひまゝ.たこんな罪のない小さな子を可憐そうに、若し是が人てあつたらとあまり見るに忍びず私はそれをもらつて飼ふてゐますおゝ早く生ひ立てや猫の子よ。

○咲かぬ花　横濱　荒井　とく

叔母さんから頂いた朝顔の種を蒔いてをりますと四つになつた澄ちやんがめづらしそうに見てをりました、私は今是が美しい花をもちます、と教へました、澄ちやんは、あといくつ寢ると咲くのと待遠しがつてゐました其後花は美しいのを持ちましたが、澄ちやんは見ない中に死んてしまひました。

○時鳥　岐阜縣　柘植ちか子

時鳥の啼くのを聞て、紙を屑にして、畑から家に歸ります、そして夜業など色々して床についたと思ふ間もなく、又時鳥がなきます其の頃は雨戸の隙が明るくなつて、弟の武ちやんの寢顔がよく見えます、此時起きて茶を沸すので、時鳥は妾の時計てあります。

○御裁縫　仁川　吉谷　美津

私は家事の都合て學校も高等二年限り止しましたので御裁縫が一寸も分りません餘り恥かしいから母の手將の暇々に向の姉様から教はつて居ります今から何月位したら御姉様の樣になるてしようか。

○犢牛　紀伊　木下　操子

丁度お正月の三日に生れた犢牛、妾は何日も學校から歸ると直ぐ草をやりに參りますと、それは〳〵可愛ベツチリとした眼てうれしさうに、妾の顔を眺めて小さな口て食へ始めます。

おんぶ　水戸　北川　うめ



○島巡り　近江　太田　靜江

太湖汽船會社の遊覽船は乘客に便利の好い樣にして殊にこれから水の上も靜に成ると沖の島奥の島多景島竹生島等在ゆる島々に遊ぶことが出來ますのてすから方々の學校の生徒は修學旅行に此船にのつて島巡を致します。

○春夏の花　大阪市　山内　溪子

もう美しい春の花は、深山の奮樣を喜ばせて、堤や川にかくれてしまひましたが、これからは夏の花てす、五月花の白百合、白牡丹や朝顔までも、皆な美しく咲いて皆樣を樂ませますから、私も花の樣に、勉强をして、お父樣やお母樣に喜ばせましやう。

○茨　伊豫　稲井壽美子

私の庭に茨が有ます。今朝は美しい花が二三輪咲いて、それが丁度好き人の唇の樣て、優しいものてすから、一枝手折らうと手をかけました。氣付た時には早やおそかつて、指先は血に染まつて居ました。私は美しい物には棘があると言ふ事を忘れて居ました。

○田舍娘の試驗　羽前　湯野村千代子

今日は初田植ゑ。妾達の試驗が來たのてす、田舍の娘は、田植も上手て田植歌も美くなければ、お嫁に行けぬので一生懸命てす。妾はこの試驗を受ける事が今年て三年、未だお嫁に行く資格がない樣てす。

○無病　下總　越川　つね

私は高等小學校三年級て退學しました丁度同年の友も三人退學しましたが二人の方は女學校へ一人は東京へ見習ひに一番不幸な私は賤しい女工の生活をして居りますだが幸福なことには十五歳になりますがまだ一度も病氣にかゝつたとがありません。

○私の村　埼玉縣　中村　勝子

僅々四軒しかなかつた私の村、今度停車場がて

きるので料理店や迎送店、旅宿等が続々出來ます。隣りの祖父様は喜て『昔はは此様になると夢にも思はなかつた是ては己が生てる中に汽車とやらも見られるだんべい冥土へ土産話が大層あるぞ』と申して居ます。

○雀の宿　山口　酒向とし子

私方に緑色美しう宿り木の生えた本年廿四歳の柳の木が御座い升がいつ出來たのか一つの空虚が御座い升そこを此頃雀が宿かつて雛を育てゝ居りますので友なき私は間がな隙がな訪れてやります。

○夕暮　下谷　細谷紅花

私は寄宿にはいつてから今日て丁度三月になりますがいつも日が暮れかゝつてそこいらが薄暗くなつて來ると必と古郷の事を思出して何だか淋しい様な心細い様な氣がして茫然と外を見つめて居るのが常なので時々同室の方に後からワッと云はれて驚く事が度々有ます。

○春の日　中津町　やま川

さらゝ〱たる小川の岸の柳一本、緑の糸垂る下に稚子は乳母車に眠りぬ。守る人もなく小さき魂は何所の春に彷徉ふらん左右の手にせる花たばを慕ひてか蝶一つ夢の面影ぬけしが如く繞り繞りぬ。

○不幸の妾　尾張　鈴木詠子

妾は産れつきの跛足です、妾は何時も自分の不幸を思ふ度毎泣いて居ました。つひ此の間の事てあつた、妾はいつもの様に泣きくずれて居るとお母様が見えて『お前はさぞつらからうが、お前を産んだ此母の心も察してお呉れ』と言つて泣き伏された時、妾はハツと感じた、そして母上の情に泣かされた。其後妾は決して泣くまいと思つたのです。

○願はくば神よ　徳島縣　照子

寄宿舎の夕、神もし我が願をゆるすならばといふ題のもとに、先頭、宇宙旅行を叫んだのは羽根子さん、四季の景色を一所にして見たいとは星子さんの希望、萬物の敬愛を受けたいのは私。なぜか靜子さん一人は笑つて答へぬ。

○お味噌つくり　徳島縣　野菫

私の村ては庚さるに、お味噌をつくるとよいのが出來ると云ひます。丁度今日は其日、幸にも日曜日なので母様は大豆をいり、それを私と妹とが粉にして、大兄様と小兄様とがうすにてつきました。夜は晝の仕事を語り合ひ色の良いのをと、祈りました。

○どつち　京橋　澄子

一言芳談とかに『しやせまじやせずや あらましと思ふ事は凡せぬがよき事なり』とあるを兼好法師も心に合て覺えしと仰せられましたが私は大方したがよくいつも後てすればよかつたと後悔します、是は私が幾度も經驗しました事。

○假面　靜岡縣　吉川敏子

假面を被つた蝶子は花子に交際を求めた。『親しき君よ永しへに変りてよ』と。假面の花子はよろこんて之に應じた。『なつかしき蝶子の君よいつまでも』と返した。されど互にそれゞ悟つた三度目の手紙て其の交りは絶えてしまつた。

○裁縫帳より　香湖

裁縫へ上つてから滿二年目縫つた物の數が九十六帶が八本小供物が十二枚羽織が二十二枚後が着物内三十一枚が男物其中重が入組此間帳面をしらべてこんな事てはいけないと先生に言はれました又はげみませう。

○好きな花　奈良縣　武村滿壽野

妾の一番好きな花は春蘭てあります、一昨年の春姉が學校の歸りに春蘭のかぶを買つて歸りました其の時は三本てありましたが翌年即ち去年は五本になりまして今年はとう〱八本となりました花が咲いたらお床へ生けようと思ふて今から樂んてゐます。

○私のさと　栃木縣　惠女

山又山と重なりあつたずつと山奥の、いつもさらさらと流るゝ水の音と、名もしれぬ鳥のなき聲との外は、時々杣の木をきる音が一里四方にもひゞき渡るかと思ふ許り寂を破つて聞ゆるのみ。ごく靜な處にすんてゐる少女です。

○燕　佐賀縣　橋口御幸子

妾の家には燕の巣が丁度四個御座りますの、一番二番……と番號を附けて居ますが只今て

は二番と三番巣の燕は宿つて居ますが他の二個が未だ宿りません昨年の日記を見ますと丁度十六日間後れて參つて居ますが今頃は何處の海を渡つて居るのでしよ。

○眞晝の光　　日本橋　森　茂枝

眞晝の光が野に充ち渡つてる時、私は薄色の洋傘を傾けて岸の毛氈の様な草の上に座りながら恍りと其處等に麗しく咲き亂れてる菫、たんぽぽを摘んでは水に投げ込むのが大好き何故つて油の様な水が美しい花を乘せて行くのはまるで美しい詩が流れる様だから。

○山吹の生け花　　越後　眞柄　ひろ

たに間に山吹の花が、なよ〳〵と枝垂れて咲いて居りますのを、其儘の如に活けましたの、優美て、そして柔和の女の如に見えて、本當に好きでムいます。今年も、單瓣のは、薄端の花器に、重瓣のは、廣口の花器に、ひとむかひ、活けてながめました。

○庭　　熊本市　江添ちじ子

傾きかけた軒先に大きな楓、其先が幅十間許の蓮濠で花の開く時朝風が清い香清い音を傳へ來る不忍の辨天樣を思ふ其の向ふが汽車の道をおいて青い〳〵早稲田である遙に九州富士の金峰山が聳えてゐる稲が刈取られる頃は私は此庭を去てあの山越した村の人……。

○讀書　　福島　野の花

私は何が一番好きといはれると讀書と答へます、世の中に何が面白い何が樂しいといつて讀書程樂しいことはありません、それでいつも母上樣に叱られますが食事する間も惜しいのです時々本の世界があつたらと思ひます。

○蠟燭　　陸奥　姫百合

私は朝夕母にかはつて、神棚と佛壇に御燈明をあげますが、或る日ふと、この蠟燭は何時位で盡きるだらうと思ふて、燈明の消えた時、時計を見ますとつけた時から、丁度三十三分過ぎて居りました。

○解剖室　　東京　秋草

見習看護婦として病院へ參りました翌日室長さんが解剖室を掃除してと云はるゝので參りますと昔々噺の婆の穴倉も斯くやと偲ばるゝ様な骸骨がずらり並んで居る怖々はたきますと今拭えた棚の上でごろ〳〵音がしますはつと驚き見れば潤ひ桃の様なのが轉がる音なのです。

○懷中物　　上毛　元子

よい孃樣方のふところにはにせこ。お隣の花ちやんのには小さい紙人形が眠つて居ります。お金はお向ふのおぢさんで空財布は花ちやんの兄さん。お祖父樣は眼鏡。おばあさんは鼻紙。私の懷には亡き父樣のお寫眞とかなづかひ自修便。

○縫代　　横濱　淸水千秋子

花子さんのお宅では先頃から給とネルと單衣との縫代を十六圓も仕立屋に拂はれました幸に宅では母と私とで縫ひますから其費用だけは省けます。

○幸福　　福井縣　片山千里

私は世の中で最も幸福なのはよく働く人だと思ひます働きさへすれば身體は丈夫になり家は富福になりますから　いまはしい家庭の風波などは決しておこりませぬ、平和なる家庭に住む程樂しいことは世の中に又とありますまいと思ひます。

○何の涙　　宮城　遠宮まさ

エビスビールと書いた赤い提灯を持た機織工女の行列を私は見とれて居りました。中頃には福島養育院と染ぬいた大旗を先だてゝ樂隊が來る皆十歳位の少さい子供許り、之を見ると私は今までの樂が夢の様にフツと消えて俄に胸がせまつて人しれず暗涙に咽びました。

○兄樣のお召　　沼津　八代美代子

兄樣は御召物の仕立が八釜敷く、仕立人は定まつて居り升、けれど今度私の技倆を試驗して下さると仰つて羽織を仕立させて下さいました、其は半絹の常着ですが、私は無上の光榮と思つて、何卒、引繼いて仕立の御許が出る樣にと祈り乍らこしらへて居り升。

○淋しき夜　　沼津　三枝子

今夜から從弟は一人でやすみました女學世界も此本も見ましたら十時になりますしするから床に入らうと思と誰も起てる者もなく俄に淋しくなつたので枕を引寄ると波の打ち上る音がサアサアと段々高く夜がらすは鳴くし身はゾクゾクして手と手を握つてゆめに入つた。

俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は乙種の規定に據る。

二等

漣や志賀はいくよの朧月　東京牛込　川瀨一瓢

三等

凩に笠傾けて別れけり　越後國頸城郡寺野村　藤原菊子

四等

三千の客をやしなふ牡丹哉　愛知縣碧海郡鷲塚村岸本方　神谷らく

秀逸

五月雨に濡れて聞く夜や時鳥　尾張　秋波子
おとなへば君はあらずよ春の雨　福岡　菊の露
田芹つむ女戀しと思ひけり　信濃　駒澤ひろ子
夕顏や野風呂に人の小室節　奈良縣　よしみ
木綿白し神馬嘶く若葉蔭　伊勢　かすみ
東明や若葉の匂ふ霄の雨　京都　大井かずみ

三百の墓門暮れたり蚊喰鳥　越後　藤原國子
ゆく水や落花に布を洗ふ人　伊豫　賤子
夏の月松と杉との二た心　安房　吉田やす

春の夜は梨の花より明けにけり　青森　新井山けふ子
掌に臙脂なときけり春の水　上總　四之宮淀子
茶商人繭商人や初袷　大分縣　工藤しらつゆ
釣舟に女一人や春の海　若狹　澤田あい子
百本の桃の花蒸す天主臺　京都　田中文月
古里を訪ふ袖笠や散る櫻　美濃　佐野澤子
花賣を追て川越す胡蝶哉　上總　長谷川芳枝
短夜の街を偵ふ一騎哉　常陸　中内泉子
新らしき笠の匂ひや早苗時　府下　並木蝶子
雨晴て草に星降る月夜かな　下野　青木その子
水折り〱石に嘯く柳かな　茨城縣　宮本竹風子
悲しくも嬉しくもなし入梅の雨　安房　つぎ子
新茶煮てほとゝぎす聞く鼠竈かな　仙臺　白菊子
春雨の中に夕餉の烟哉　下谷　平野曉子
食ひこぼす牛の秣に胡蝶哉　熊本　靜間まさ子
盃の漣にちろ櫻哉　三重縣　杉田たか子
ひたものに風はらむなり五月鯉　奈良　武林風子
峽になく駒鳥の音遠し夕霞　秋田縣　三浦ふみえ
据風呂を手てかきまはす若葉哉　千葉縣　葛岡花子
菜の花やむしろ帆掛て里の船　靜岡　杉山じゆん子
人れむる鎌倉山や春の月　濟國　藤本まさ子
美しき石拾ひけり春の川　信濃　岩波二葉子
どう見ても案山子と見ゆる案山子哉　大分縣　板井曉子
螢追ふ少女の聲や夏の暮ろ　北海道　鎌田繁香
薬玉や姫に照る月美しき　大阪　山内渓子
田の畔に由緒ありげの櫻かな　大分縣　岡田房子

砧の音のぞいて見れば桐落つ　南豐　安岐子
なつかしき乳母が手織や綿の花　芝　今川ひさし
五月雨にあせし牡丹の崩れけり　埼玉縣　萩原ひろ子
紫陽花や筆洗あらふ繪師の妻　三河　藤野ふさ子
五六人一かたまりの田植哉　岩代　荻岡松江
蝶捕や女計りの覺束な　京都　山口愛華
見るうちに暮れて行野や草の花　佐渡　相田かすみ
足元に入る日の近き汐干かな　熊本縣　寺田歌子
古屋敷に小猫眠るや栗の花　山口縣　長沼かつ子
雲出てゝ岸の青柳しだれたり　遠江　小林とし子
緋牡丹や神の使の蝶一つ　小石川　植木渓水
姉妹しのび笑ひや春の宵　下總　脊霞子
五六人月見る椽の蚊遣かな　熊本　加納白薔薇
筑曇る朝の小雨や子規　山形　秋海棠
雨を呼ぶ寺の木魚や蚊喰鳥　茨城縣　村野春翠
藤棚や蜂と少女と相知らず　岩代　月村涙子
蝙蝠や四十八灯明滅す　越後　藤原容子
嫁入の馬につけたる新酒かな　茨城縣　秋山秀子
垣越しに櫻を手折る腕かな　千葉縣　みさを子
卯の花や女馬ひく朝の月　西多摩　森田なか子
風折々我が髪なぶる柳哉　讃岐　森たか子
傘さして藤の雫に千みぬ　横須賀　飯島登代子
海棠をさげて小粂の君通る　紀伊　室井奕那子
里に來る燒野の灰や夕嵐　靜岡縣　牛尾愛子
行く春を歎くもなく唯だ惜みけり　程ヶ谷　中村濟子
鎌倉やみどりの夢の夏の月　豐後　松岡こう女
落武者の女姿やおぼろ月　下野　永山ちか子
鯉の餌に浮交りけり桃の花　信濃　節子
烟一つ金色はげし涅槃像　大分縣　後藤はま子
山やせて水音高し秋の森　伊勢　すみれ女
人住まぬ藪屋一けん春の月　札幌　藪むらさき

冬の菊折々蝶のかげもして　濱田町　和田岩子
松多き大仙陵や鳩の聲　大阪市　生田花桂女
夏に籠る僧の白衣や竹の風　上總　森ひさ子
初夏や湖を斜に帆の走る　大阪市　生田みのり子
吾宿や破れ硝子にはつ日影　千葉縣　關屋すま子
閨を焚く匂ひや花の餘雨　愛知縣　伊藤正子
永き日や終日のろり／＼牛　富山　小林芳枝子
ゆく春の眼を病む女詩人かな　廣島市　愛春子
栴檀の花も散りけり月の庭　臺灣　中村政子
朝心眺る百合の垣根哉　小石川　中司元子
吹く風に香る野梅の皆白し　下野　下河邊なみ子
あやめ切る人うら若し夏の水　上總　山口いく子
大凧を下ろす人數や夕霞み　肥後　茂里百合子
つれ／＼に古朗を愛する五月雨　和歌山　木下操子
女多き八丈島や春の風　靜岡　大石幸子
あら濤や千鳥も聞かに沖泊り　紀伊　高森涙子
大佛も欠伸し給ふ日永かな　川崎てい子
梅日和椽に鞠つく少女哉　岩手縣　熊谷文子
妹のかざす日傘や蝶々飛ぶ　名古屋　理子
涼しさや舟に水汲む月明り　千葉縣　三森ゆき
春雨や傘は最合の神參り　上毛　小板橋露子
朝ぎりやかすかにそれと浮見堂　茨城縣　永井誠子
春雨に善き道づれや蛇目傘　奈良縣　下澤すま子
短夜や一の鳥居の明け殘る　上總　鶴操女
橋一つ行き戻りして涼み哉　神田　林芳子
筍を喰て七賢を氣取りけり　備中　大西好子
猿や秋の中の小短冊　往郷庭　花園守
野社や御鏡光る木下闇　陸中　黑澤美惠子
げん／＼の束捨てゝある土橋かな　土佐　弘光芳樹
朧夜の物問ふ人や京言葉　馬越白笑子
馬に積む刈草吹くや青嵐　長崎　東蘭女

風やみて雲雀の空となりにけり　常陸　藤本幸子
陽炎や染めてまだ乾ぬ紅木綿　上總　ひさ子
散る花や晩鐘江を渡り來る　京橋　里輪子
島守りの古い寺いふ時雨かな　茨城縣　川上代賀子
ぬれ椽に花散り溜るあしたかな　萬千田町里子
打水や蝶々一つ飛びて去る　大和　小橋きく子
晴るゝとて啼く山鳩や栗の花　千葉縣　渡邊恒子
朧夜や頭巾着て來る歌使　本所　秋山欣子
髮洗ふ水に若葉の恨かな　牛込　春の舎
化粧して團扇片手や夏座敷　岡山縣　廣江露子
眞砂路や松をこぼるゝ月の露　香川縣　橋本かすみ
櫻日和田舎の祖父を尋ねけり　北海道　石川秀子
紫に暮れ行く森や時鳥　岐阜縣　柘植ちか子
月冴えて地に鳥影のうつりけり　静岡縣　淺岡せん
草鞋解く埴生の宿やほとゝぎす　上野　山田きみ子
杜若咲くや五重の塔の下　信濃　久保田きく子
青麥や啼かぬ雲雀の舞上る　茨城縣　村野たけ子
青桐や雛を飼ふ埒の内　下野　岡萩枝
人戀し千疊敷の青嵐　横須賀　齋藤松代子
花咲く峠や嫁の馬て來る　伊豫　芳枝
大水に斧うつ人や月明り　茨城縣　三好ふみ子
たゞずめばたゞずむ人や朧月　福島　八登小蝶
朝霞に庭はく僧や道の花　京橋　細川絲子
酔て寐る簾の茶屋や時鳥　信濃　駒澤登美子
春淺く旅の枕に句を題す　越後　藤原富子
春風や籬にもつるゝ釣りの糸　常陸　蘆女
卯の花や繩幾すじの崩れ垣　大阪　櫻井ふく
夕顔の宿に長こき使ひかな　上總　春枝子
古寺の屋根に來なくやほとゝぎす　静岡縣　青木静山女
戸明くれば物干竿に初つばめ　山口縣　松浪博子
葉櫻やこの山寺も名のみ哉　舘山　山本道子

少女子の遊んで居るやせみの聲　熊本縣　杉守みの子
山吹の泥にこぼれて匂ひ哉　廣島縣　國信操子
畑打ちて田打ちて櫻ながめけり　千葉縣　松ヶ枝源枝
栗の花散るや茲屋の夕灯　下野　栗原くに子
渡場の茶屋の垣根や月見草　長門　藤井韻子
春草やぬぎ捨てゝある女下駄　廣島市　紫英子
傾城の昔がたりや春の雨　静岡縣　吉川敏子
戀猫の障子を覗くおぼろ哉　廣島縣　上田まさ子
うつむきて夕日のわびし美人艸　羽前　齋藤萬猶女
聲高き女の連れや春の宵　大阪　四戸政江
山吹や順礼宿る草の宿　廣島縣　すゝき
干梅の鼻をつく日や雲の峯　美濃　笹島敏子
菜の花に嫁入の荷のつゞくなり　上毛　飯島喜代子
往來する人に匂ふや草の花　上總　久子
抱籠に鶴飛ぶ夢の涼しさよ　金澤　高村やすえ
蕗の葉の水なき露をおほひけり　茨城縣　戸張小金子
鼓に水酌む庭の月夜かな　廣島縣　賀岡萩村
山門を推すか敲くか今日の月　熊本　岡島嘉數子
涌風や麥の島に蝶々飛ぶ　泉たつ子
陽炎に迷ふ蝶羽の光りかな　廣島縣　兒玉たつ子
五月雨や電燈くらき街にして　遠江　菊笠みつ
水鳥のとび立つ音や橋の月　石狩　王子淸志
雲の峰崩れて宵の月夜哉　遠江　小林とし子
夕顔に米磨ぐ宿の女かな　横須賀　藤野百々子
湯浴る狂女の聲や蟬時雨　三重縣　川原操子
朧夜を猫の喧嘩や屋根の上　京都　武部柳翠女
坂の上に風船賣や春の風　賀茂保子
街道を後に田打つ女かな　伊賀　三浦志加
驛の灯の赤きが見ゆれなく蛙　伊勢　葉津惠
みかづきに何思ふらん立つ少女　山口　湖向とし子

實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以內用紙も締切日も前同斷、懸賞は甲種規定に據る。

二等　○昨日の義姉上へ

京都西三本木丸太町上、杉本方　柴山ゆり子

唐突なる妾の音信に嘸や嘸御心の緒を亂し給ふらむと思ひ出でては今日まで幾そ度取りにし筆を擱き候ひけん、さはあれど斯て沈まぬ心の泉湧き出だしてはとゞめあへぬまゝ且は兄の言も有事とて一筆申上候。

あゝ妾は遂に〳〵御身の上を姉上と呼び參らせ得ぬ今日の身となれるをばいとも味氣なく思はれて候よ、ゆめ忘れ得ぬみ言葉の「御身の如きやさしき小姑ならばよしや幾人ありとても――」とほゝゑみの御戲れ、吁かくまでの間となりしわれ等の中を、蒲柳の質なる互の體軀故との餘りに弱き叔父の理由の下に――げにやげに御兩親の御怒りよりも御義姉上の胸の裡、兄の歎きを見るにつけ御いたはしさの思のみいや增して候、俄に東都の巷に隱れ給ひしも自暴の御心とか承りてはわれらの犯せる大なる罪の天の報ゐも如何ぞと恐ろしさの念さへ堪え得ざりしに、あな優しさの御心よな、かの美しき年賀のおハガキ數行の文字に眞心こめて御怨み言のつゆもなく御名も東都の「くに」とのみ、去年の冬には既に他姓の人とならせ給ひしとは露知らざりし兄妹は、御住所の記もなきに御便りせむ由無かりしをいかに思ひ惑ひしと推し給ふぞや、吁一昨年の御いたつきに侍りし御病室の庭のさまや笑顏かすかに時折お越し給ひしわれらの元の宿の態やそれやこれやの小さき歷史思へば坐ろ涙の種に候かな。

圖らざる友を得て御身の上の昨日今日大かたは承り盡し候なよやかなる御體を以て御心硬き背の君共に海山遠く御國の爲とあした夕べにいそしみ盡し給ふとやまこと榮ある御身かな、徒らに內地などに齷齪して妾等と共に過し給はむより今日の御地位なか〳〵に幸多かりしと今更に羨ましう候て、ひたすらにおん成功の只一日も早かれとのみ、さるにてもふさはしかりし目出度き御緣類稀なる優しき御心根の、背なる君の御慈しみの程も思ひやられて、ゆめ隔たりの有らむやうもなくとことはに御睦言の盡きざれとこそ神かけて祈り居り候へ。

さりや弦月淡く渤海の果てに沒し闇より寄せては打かへす汀の波の遠音には、加茂の河邊を彷徨ひてはるか

の西にまたゝきする青き星かげ數へつゝ御噂する二人が聲のささやきを偲ばせ給へや、そなたよりよしなにとかねての兄が言葉も默だしがたく筆の外なる兄妹の情緒は思ひやり厚き御胸に任せて只短き御挨拶の一言のみかくは。

（評）文題既に嶄新、句々又痛切情の溢るゝを見る、而してはかり難き運命のその歸する所を暗示ありて感ことに深し。

三等　○母より寫眞を送られし返し

三重縣津市岩田町　越村ふみゑ

かねて御願ひ申上置候御寫眞御送り下され、昨夜確かに到着いたし、取る手おそしと拜見仕候。誠や御膝下はなれ候てより、早や二年の月日相暮らし候事とて只管御なつかしく慕はしく御寫眞かきいだきしばし涙にむせび入候。わづか二年の其間にいみじく老いさせ玉ひし樣なるは、全く寫眞師の不手際に候や、父上樣かなしき御上とならせ候ひしよりは、一家の萬端皆母上樣の御身に歸し浮世の波風いとはげしくおはしまし候に、多き子供も未だ幼少にて漸く御手傳なしまつるべき私は、いち早く良緣ありしとて、御膝下はなるゝ事と相成、御胸にあまるうき憂の御程、察し奉るも涙の外無之候。不孝の私うけし御恵の萬分の一も報ゐ得ぬのみならず、千里の他鄕に朝夕を異にし、風につけ雨につけ慈愛の御心痛めさせ玉ふ御事、誠に何たるいふ甲斐なくも罪深かき我身にやと、口惜く空おそろしく存じ候、妹弟とたはむれ母上樣に御無理なる御ねだりいたし候ひしも、昨日の夢かとばかり思はれ候に、今は早や私も一人の子供持つ母と相成、母子を持ちて知る親の恩とは古き諺に候もいとゞ身に思ひ當り申候。御なつかしき此の御ふところに、乳房ふくみてうまゐせし昔もありしよと、抱ける我子のいとしきにつけさまざまにはてしなき思ひにかきくれ候て、つくづくと拜しまつる御おもかげの、文枝よとやさしくよばせ玉はする如き心地いたし、我をわすれて母樣と呼び試み候、おろかや三百里の雲井の今更かなしくうらめしく打仰がれ申候。追々暑さに向ひ候間、かまへて／＼御無理なる御働き遊ばされまじく、御隙には隨分御うさはらしに相成樣御保養なし玉ふべく、返す／＼も御わづらひ下されまじき樣、神かけて祈り上候、二年振の文枝が姿、子供諸共寫し候まゝ御目にかけて、いかにも世帶じみてよと御わらひ下さるべく千々の心のいとかぎりなきを寫眞にこめて候かしこ。

（評）あじやれたる節はいさゝかもなく、母に宛つる文として申分のある所なし、ことにその言その辭肺腑より出でたらんと思はるる所ありて誠に讀みごたへのする文なり。

四等

○轉地せる友の許に

芝區中門前一丁目十一番地 長谷川靜枝

過日は御水莖に添へて美しき御歌賜はり御禮の申樣も無之候、此頃はまたつれなく春雨の降り候ものかな、都にある私すら何となうつれ／＼を覺ゆるにまして訪ふものは浪の音、松の調のみなる九十九里の濱にをはす御許樣、など寂寞の感に打たれ給はざるべき、げに春雨も一日ふた日の内こそ興あるなれ、かく日も夜もわかずひた降りに降られ候ては胸に秘めたる思ひ出の繪卷もあやしうときみだされてうれしからず候。さはれ如何にうつくしき御歌なるよ、御病の爲とは云へ遠く俗事をはなれて風月を友とせらるゝ御身の上の誠に御羨しき限りに候、私なども偶々歌心の浮ばざるにはあらねど唯々机の上の工夫に過ぎず候て眞の心の聲にては無之候へば、一文の價値も無之ものに候、之れを思へば私のごとき病なき身は乾燥無味にて誠につまらなきものに候、何卒今後とも續々と御咏草拜させ給はる樣待入り候。昨今の如き氣候不順にては自然御身體に影響すること尠からざるべくと存じ候間尙一層の御自愛を祈り奉り候、末筆乍ら御母堂樣へ吳吳も宜敷御傳へ下され度希ひ參らせ候。かしこ。

（評）枯れた繪だとか枯れた手だとかいふことがあるが若し枯れた文といふものがあらば即ち是れ。

子守

芝 黑野信子



五等

○子規きゝにとて誘はれしかへし

金澤市野田寺町四丁目梨野方 高村安江

花は散りて蝶も來らず流るる水の音さへ何となく物淋しきに、空には鈍色の雲の低くゆきかひて今宵のほどにも降りいでなむを、いかに眺めさせ給ふらんと、ゆかしう思ひまゐらせ候折から、御なつかしき御玉章たまはり、いとゞ嬉しう卷返し卷返し拜し上まゐらせ候ふ。向山の御なりどころへ子規きゝにとて、こなたをも御

誘ひ給ふみやび心の御すさみ、いと〳〵おもしろう見まゐらせ候ふ。

卯辰の社のあたり、松の風笛の遠音にまがひて、ほのかに名のり出でたらむは、いかにをかしからむとおもふにも、御供は願ひてもせまほしく、雨は物かは、なかなかにをかしさてこそ添はめと存じ候へば、よろづをさしおきても、仰せの時刻に御宿をおどろかしまゐらすべくと一言かへりごときこえまゐらせ候ふ。

つねよりも一入なるみだれがきも、よろこびのあまりの筆の狂ひと、なか〳〵にみゆるしたまひてよ。

（評）みやびたるすさび、みやびたるふでのあと、さりとは偲ばるゝ君にもあるか。

秀逸

○御安神まで　　本所　田中久子

暫く御心配をかけて居りました事は、昨日兄から手紙がまゐりましていよ〳〵と極りました。

赴任地は和歌山、慥か山の中のひどい所ださうですが、私は却つて喜んでをりますの、御安神下さいまし。私には芽出度い初陣の門出で御座います、と口には强うも云ひますけれど、矢つぱり涙が多くて困ります。五六日前から溜つてをりました涙が、昨日の兄の手紙で直と出て了ひましたんですの、馬鹿な、十日も半月も母に見せまいと苦心してをりましたのを、つひ取り亂した弱い心を見せて了ひました。夫から母は又一層、氣の毒だねえ、を言ひ續けてをります。

淸子も置いて參る事に致しました、只一人で參りました方が却つて强くなれるかも知れないと存じまして。

今日午後から父の墓參にまゐる心意でをります。荷造りを早く濟ませて是非一度お目に掛りに上る心組で御在ます、何も彼も其節、承りもし、お話しも致しませう、先は取あえず御安神まで、かしこ。

（評）聊かも冗言らしきはなく、文の熟せるもの。

○可愛き弟に　　栃木縣　惠女

國夫さんや、もうお前さんも二年生におなりだからしつかり勉强なさいよ、けつしてお友達と爭ひなどするてなく、目上の方の云ふ事はよくきいてね、何事によらずすぐ一口に上級生、二年生といはるゝのですからよく〳〵我とわが身をかへりみて他人にうしろゆびさされぬようにしなければなりませんよ、とかく、下級生の中はどんな事でも、上級生のする事なら眞似をして見たいものです、それ故なほ更つゝしまなければなりません。殊にお前さんは勇氣をやしなはねばなりませんよ、いくらラッケットをふりまはす勇氣はあつても、ほんとうの勇氣がなくてはだめです。そして講話

會の時などは自分から進んでお話するやうになさい。又、お辨當や、靴の始末は下女の世話にならないでも自分で出來るでせう。姉さんは時々國さんを考へては泣くのですよ、あゝ今頃國さんは亂暴な事をして先生にしかられてゐるのではあるまいか、などゝ思ふとほんとに悲しくなります。國さんやくれ〴〵もいひますがけつして亂暴な事はおしてないよ、そして今年こそは中學校の入學試驗に合格するやうに、しつかり勉强なさい。

（評）筆つきやさしきながらに言ふべからざる力あり、情に偽りなければなるべし、佳。

○遠き姉に

瀧野川　菊垣田鶴子

降り初めてより、早三日と數られ候今日此日、俊樣の御襯の先づ心に掛りて、下女室の炬燵は、定めしの繁昌と、見ぬ御家の樣迄も、心に浮びて、朝な夕な母と語り暮し居り候、さ霧深き其頃より、月影淸き夕迄、文机により給ひつゝ、作り物に心奪はれ給ひしは、つひ昨日の樣に覺えられつるを、早二人の母樣とは……。束髮は暇惜しければとて、結ひ給ふ御髷の手柄さへ、早赤は止め給ひしとや、さて〳〵變り易きは人の身の上と、思へばひたすらに昔のみ戀しうて……怨しかりし御叱言も今と成りては强ひても給はり度きほどに御座候。五月雨時のとかく濕り勝ちなるに、況て惜しき袂別ちまゐらせしも、同じ春の暮なりしよと思ひ出ては御慕はしさやるかたなくて、今日は朝より灰かぶりつゝ、作り候このデセール、不出來ながら通夫樣御相手に御試み下され度候。今少し近かりせばなど、愚痴たらたら小包作り居り候を「何上等々々きつと大喜だらうよ」と微笑み給ふは父母君、「君ちやんも其中に入つて行きたいわ！」と妬しげなる君子の樣など、せめては思ひ浮べ給へかし。

（評）詞少なけれど情味ふかし。

○『あうむ』に添へて

大阪　木村春江

降りつゞく五月雨に御わびしさは一しほとこそ推し上候へ今しもおとづれ參らせんと身づくろひ致し候處あやにく遠來のまらうど有之候に付本意なくも便して此鳥のみさし上候こは兄に賴みて取りよせしものあはれ御病の御なぐさめにもと心して種々の言を敎へつ自ら御枕邊にはこびてほゝゑみ給ふ御かんばせを拜し參らせんと樂しみ居候ひしに、名はしづと名づけ申候「しづちやん今日は」とあふせ下され候はゞ覺束なけれどお目見えのあいさつ致すべくと存じ候萬事は明日にても參上致し候上にとあらあらかしこ。

（評）可愛らし。

○歸省を知らす　奈良縣　よしみ

收穫も片附も共に終了して漸く淋しき山畑の生活を捨て、本日無事に故鄕の山河に接し候、貴女樣には其後何の御變りも御座なく候哉、度々御尋ね申すべきが本意なるに失禮致せしは、何卒御察しの程願上參らせ候。人里はなるゝ二里の山奧、ましらも叫び狼も吼ゆる深山の間に、僅に十餘の人と共に傾斜急なる山畑に鍬鎌をふるひては、いぶせき假家に儚き夢を結ぶ事實に九十餘、げに思へば太古の民にも似たる生活にて候ひしよ。兄につれられ初めて山に入りしは過ぎし四月の上旬にして、春の女神はかゝる山奧にも天降りし給ひて、古木鬱蒼たる間に山櫻のところどころ咲けるを見、畑の間に愛らしき草花はほゝゑみ居り候ひし、畑は溪の兩岸に廣く連なりて七戶の假家は散在し、一つの桃源的部落の形作られ居るを認め候ひき。九十日の間我が同業者の外には一人も他の人を見ず、珍らしき動植物や不思議なる自然の現象もなれたる目には露程も感ぜず、且親しき友とてあるにあらねばそゞろ故鄕の戀しさに堪えやらず、種々の想ひは絕えず小さき胸にわだかまりて、果てしもあらぬ空想に憧がれては、思はず一雫の涙を禁ぜざりし事もあゝ幾度なりしか、殊に深夜たゞ一人孤燈の下に端座して我身の果敢なさを恨み、そゞろ厭世の念を起せし事も之れあり候ひしよ。かくて櫻は散り春は逝き、青葉がくれの時鳥溪間の河鹿を聞く頃となりて、全く業務を終へこゝに歸省致せし次第にて候。書き度き事は尙山々あれ共いづれ近日中に御訪ねの上御話申すべく、先は御知らせの序に一筆申述べしにて、心弱き者と御笑ひなさるゝ共妾は是非なき事と存じ居り候。

（評）詞づかひにやさしみなきは傷なれど力ある文句々心の奧に響く。

○おさなどち　みゆき

雪とけぬまにとて母が御年始に參りしあと、先頃たまりたる友仙にて花樣のお振袖松やに手傳はせて縫ひ居り候、夕暮おとなひ玉ふ迄にはふさわしき此衣きせて御目にかけむとてかしこ。藤子より。

今朝の初雪に時ならぬ花をつけたるお庭の景色如何と思ひ參らせ候折からの御文、お前樣お年幾つと伺度う存じ候、さはれ憂も涙も知り給はぬまの長からん事をこそ、たそがれには必ずかしく。照子より。

よべの歸路心細う候ひしよ、けふ伯父上がり音づれ候處巖上の松なりとて示されし歌。日頃此道には御志あつき御許樣へとて。(歌は別紙) 照子より。

伯父上の御歌目出度う拜誦致し候、まけぬ氣の私頭かたむけ强てもえんとあせりて、動きなき御代のためしやめをと松いはほの上におひ立にけり。藤子より。

（評）氣のきゝたる筆のゆきゝおもしろし。

新歌謠

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謠と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は乙種送呈



二等

◎　上總鶴枝、村上永吉　葛岡花子

むかふの畑とこちらの畑はなす使は蝶一羽

言へさうな事て言へないことです、蝶のうたは何百羽も來ますが、遂に此一羽に及びませんでした

四等

◎　豐後臼杵町　菅原芳子

流に映つた撫子摘んで濡れた手て挿す洗ひ髪

選者のなほした處もあります、里の流れとなでしこと洗ひ髪との配合は舊てすけれど、田園の趣味があります

五等

◎　丹波國綾部町本宮町　白波瀨芳子

妾の投書が載つたが最後毎日つくゑに向ひます

此通りまちがひないところてせう

秀逸

◎　松代町　すみれ

並べられたらどの花指さう百合と牡丹とふぢの花

◎　羽前　千代子

妾しお嫁にいつ行くのだと聞いて見たいが親はゐぬ

◎　北稜　浮船

かつれなぜ降る昨日も今日も戀し御山も降りかくす

白註「かつれ」は初夏の頃、土の降ること

◎　府下　森田しま子

梅は下村桃は二股尾櫻小金井菜は築地

◎　安藝　兒玉苺葉

私は酒屋の水汲み娘袂かわいた暇がない

◎　信濃　小林みさよ女

夏は魚類になりたいものよ川の底行きや海へ出る

◎　茨城縣　今泉磯千鳥

香水香油もそのもとたゞしやみんな花から絞り取る

◎　南豐　安岐子

茶つみ行かねば芽がのびすぎる行けば留守になる

◎　山形　秋海棠

里のお山の筍姫は十二一重をかさねきる

◎　茨城縣　村野春翠

眞帆に朝日を片帆に風を出島あやめの湖來節

◎　山梨縣　有賀久代

人形可愛いがおとなしすぎてだゞをいはぬがものたらぬ

○櫻草はこぼれたけれど一つ凋まぬ花がある　丹後　鹽見千代子

○優しい姿に迷招かれて今日も行きます花の家　下野　青木たか子

○比叡のお山を六十餘町上りや一目に京の町　京都　綿引眞砂

○短册形した苗代小田に撒いた籾の銀砂子　和歌山　加藤重子

○故郷の母より屆いた袷着るも惜しいが着ぬも惜し　本郷　足利順子

○山のましたて月の夜様か落ちて來た様な松のかげ　金子片枝

○花のような數へ子見ては引きたい學校も引かれはせぬ　薩摩　みずゑ女

○來るにや畫も欲しさてご座る摘まにや歸らぬ二人連れ　信濃　駒澤登美子

○靡く柳の枝から枝へ附けて見たいよ銀の鈴　下野　岡　萩枝

○雨がふるのか私の家の倉の壁のよに黒い空　德島縣　西野ひさし

○星の姉様電話の口でサヨーナラとてしたひうつ　越後　かなる

○月は戀ふのか日は慕ふのか毎夜毎日追ひめぐる　秋田縣　園　子

○妾の故郷は製茶の名所母も妹も茶を摘みに　長門　藤井誠子

○傘も暑さてさぞ熱からう蘿枕の蝶の夢　常陸　船屋内朝子

○霞の上には雲雀の歌よ牧の原には茶摘み唄　遠江　菊笠みつ子

○　若狹　早水その子

○愛しられたい乙女の姫に天の御殿へ行きたさに　南品川　山田秀子

○脊戸を一寸出りや菜の花畑廣い蝶々の運動場　磐城　齋藤きくの

○家の竹やの破ぼけた様は丁度ポンチ繪にあるような　神戸市　柾　子

○草や木にさへ惠みの露があるに妾にや母がない　近江　朝みどり

○姉は神戸に妹は奈良に妾はむかしの滋賀の浦　竹本春枝

○春は逝くやら海原越して軒に燕が來たわいな　岐阜縣　秋本美子

○見ても涼しい藤の陰に寢かして置く子のうつゝ矣　伯耆　武　子

○憎い蝶々よそと手を延ばしやまたも隣の花へ飛ぶ　島根縣　釋臣幾代

○搖籃にや緑兒お守りは麗田には夫婦の謡ふ聲　茨城縣　中山道江

○菜種花咲く田で蛙啼くほんに寢むいは此時節　相模　岩田小春

○哀れ田舎の三軒家でも晩に讀書の聲もする　美濃　日島眞砂子

○早くきませとまつ間につんだわらび兩袖みちてきた　大分縣　蓮の屋操子

○私が住居は豐後の別府山と海見てお湯に入る　丹後　阪井峯子

○赤いたすきに姉様かむり私や行きます桑つみに　磐城　白ばら

○虫じや蝶々で花てはすみれ鳥じや鶯春の精　三河　鳥居ふき

○こよひ茶會と約束したが母が病氣で行かれない

滑稽談

編輯局選



十六字詰七行以内締切日は毎月十五日、懸賞は乙種。

三等

○そゝつかしい奥さん　三重縣津市岩田町　越村ふみゑ

「成る程」と詩人が夢中になつて居る所へ人が來て、「天才の火が燃えてると云ふ所だな」詩人の奥さんが「いゝえ貴君あの煙の出て居るのは煙草で御座いますよ」

四等

○大聲て　福島縣江沼郡飯谷村字藤　笠間きの

田舍人一枚のはがき持ち來り、郵便局の前のポストの口を開き大きな聲て「郵便入れますぞー」

五等

○凸凹　仙臺市東六番町六五　早瀬てのめ

けふの理科の時間の。面白さといつたら。何ともいへなかつたワ。『凸レンズ、凹レンズ』と先牛が板書なすて、『コレ讀める方』と仰つたら、あの滑稽な、朝子さんが大聲で『デコレンズ、ボコレンズ』と答へたのですもの。皆樣もびつくりしてしまつたのよ。

○だから降る　茨城縣　今泉磯千鳥

私の地方では夕方になると役場で天氣豫報の旗が揭げます。ある日のこと妹が「あの赤い旗はなに」って聞きますから「あれは明日雨が降るしるしてす」と敎えてやりますと暫く首傾けて居りましたが「姉さん役場の人は隨分馬鹿れ、だから明日雨が降るのよ」。

○歌人　伊賀　山村龍子

甲女學生「貴女のお歌はたいてい同想ですれ」乙女學生「はい、だいぶん一家が見えて來たと思ってよろこんて居ますのよ」

○電報　長岡　中山いつ

妹娘「父さん東京の姉さんから電報が來たよ」、父「どれえッこれだから娘を東京へやつておくのはわるいてんだ、おれが字を知らんと思つて假名てなんておこしたわい生意氣なッ」

○日本　群馬縣　大墳千代

日露戰爭當時の事今年九十六になる婆さん孫が戰地から歸つてきたら田吾やお前何處へ行つてきたへときく日本と露西亞の戰爭へ行つてきたのだと云ふと日本て何處だへと婆さん又聞く日本て此處だと云つたらこゝは日本か己は上州だと思てた。

○寒暖計　安藝　すゝき女

甲「君今日は隨分暑いれ、大抵明日は降るだらうが君の内の寒暖計はいつ見ても不動的だれ」乙「そうさ此位な暑さに狂ふ樣な安物ぢやないさ」

○病氣見舞　長野縣　節子

友「今日は如何て御座いますの」病人「有難う大變よくなりましたよ、あのれ大澤樣と小林樣からお見舞狀を頂いたのよけれどお二人とも同文章なんてすわ」友「一寸見せて頂戴アラ此文は先生が作つてお手本に皆に下さつたのよ」

○電話　丹後　衣子

二三日前から電話が開通致しました、今日は私の番て早速飛んてゆきますと長沼さん、云はれることが少しもわかりませんので、わかりませんと申し上げると、さうてす、私は長沼てすとの御返辭。

○かてい　岐阜　澤子

家の下女竹やはいつのまにか家庭と云ふ語を聞きかじつて居ます、或日お友達の利子さんの處へ少し用事が有てお使にやりまして歸つて來ると直ぐ私が「利子樣今何してゐらつしたの」と聞くと、「ハイ只今は家庭をなすつてゐらつしやいました」



東京（課題）

一等　湯屋

本所　秋山欣子

初めて都の地をふんだ晩、叔母樣と御湯に行きました、只見る十坪の板間、湯氣はもう〳〵と濃くなり淡くなり絶えず搖る丶中に、電燈の花は夢の樣に霞み、肌白い人は幻の樣に動いて居ます、息の亂れ、湯の匂、石鹼の品佳き、白粉の媚かしき薫に交つて、都の風は斯うよといふ樣、草の香に馴れた鼻を襲ふ、毛穴まで寫る大鏡の前、叔母は四十の艶やかな顏へけば〳〵しい厚化粧、私は湯槽に浸かり乍ら、落葉焚いて湧す故郷の五右衛門風呂に終日の汗を流して石鹼だに用ゐぬ人を思ひ浮べると、同じ姉妹でも、とあらぬ方を向いて思はずほろり。

二等　二十歲まで

小說風に見たる東京

琴子

私の一家は此四年前に東京に出ました。但し一粒種の私一人を祖母の家に預けて。私は悲しんで泣きました。父は殊更の笑を湛へて次ぎのように云はれました。お父さんやお母さんはなぜ御前を殘して行きたから う、まだお前にはわかるまいが、東京で敎育せらるるよりは田舍の方が餘程よいよお祖母さんの傍て善い子になつて廿歲になつたらお出て！と、自分は何の事か、さつぱりわから無かつた。私は今年其廿歲です。此間母から來よとの手紙が、然し私もう行きたくないの、父母に逢ひたいはお腹一ぱいだがお隣のお千代さんや、おみつさんのようになるかと思つて。

三等　死んでもよい

敎訓的に見たる東京

備後　土井澄江

東京々々と云つて近頃のお方は皆東京でなければならぬように申されますが一體東京とはどんな所なのでせう私は見たくて見たくて仕樣がありませんわ。

其れていつぞやもお父樣に「私等はいつ東京を見られるのでせう」と云ひますとお父樣は笑ひながら「お前等に東京を見せたら目をまはして死んて了ふ」と申されました。私はたとへ目をまはしてもよい死んでもよいから一度東京を見て置きだいもの

てす。

少女的に見たる東京

四等　感化力

池田町　寺部君子

或人から、大坂の道巾を笑ふてそして、東京の道幅の廣い事を聞かされてから、東京といへば直ぐ道が廣くて、兩側に高い建物が並んで、空迄高くて、世間見ずの私などが行くと小溝の目高が大海へ出た樣な氣持がする事と思ひ升。そして京都の樣に山に圍まれては居ず、何處を見ても目のとゞかぬ位廣くて。首府丈に人の氣も高く、都鄙の區別の甚しいには驚き升地方から、暫く行て居ると、直ぐ都人に成り澄して歸て來升、何でも東京は感化力の强い處と、私は想像仕て居ります。

理論的に見たる東京

五等　新

福井縣　片山千里

約二十戸程しか無い山家の村から、炭をつけて來た馬方の子百戸程の村へ來て「おつさ何だえかい村ぢやろの」親「をいやなあそふじやけど東京ちふとこはこんな村十程合せた程あるんぢやつてな」子「ふむそんねぎよさんしてたくもんやなんぞどこの山へひらひに行くんぢやろ」親「そりや日本一の富士山へ行〻ぢやらうよ」。

滑稽的に見たる東京

秀逸

閑話　京都　濱部風窓女



○住み安い事　伊藤曉子

東京には多く渡り者が住んて居ますから田舍の樣に近所と酢飯や萩の餅の贈答をしたりする事もなく從つて氣兼も遠慮も無用なのです。隣りに誰が住んてゐるかそれさへ知らぬ事もある位てすもの。それに地方とは違つて上は一天萬乘の陛下から下は花うる少女に至るまて住んて居るのてすから風態も千差萬別て、それに人が絶えず活動して居る道を歩んてもサツサといつて終ひますから決して田舍の樣にあの人の風がなかしいとかハイカつてるとか云はれて批評の目を集めると云ふ事もありません。住んて見れば生活の費用も思つた程は入らず氣樂さは日本一てございました

○時間　沼津　八代美代子

私が東京と地方と比べて一番羨ましいと思ふのは時間の事てす。每日丸の内て正午の砲が一發ドーンと鳴ると家々は云ふ迄もなく、學生等も皆ソラ砲だ、と云つては各々時計を合せるのて何處のも誰のも大概は一致して居ります、其を私等の田舍ては宅の時計が八時打つも間もなくお隣から九時が聞えたり又廿分も經てお向ては八時を打つたりするので何れが正時間かさつぱり解りませんのてす、私は其度に東京を思ひ出しては家中て噂します、私が何よりも羨ましいのは此事ばかりてす。

○百三十里　丹波　伊東菊枝

東京と聞いてさえ賑かな立派な樣に思はれますが、何を言つても百三十幾里と隔てゝ居る丹波

の大江山に近い田舍に生れた私ですから中々東京を見物に行くのは愚か、繪に見たとも數へる位しかありません、せめては夢になりと見る事が出來たら如何様に嬉しからふと時々此の様な事を思ひ出しますの。そうして亦或時などは斯麼事を考へます、幾千里も隔れた外國より、わざわざ日本はいゝ處だと愛て來る異人さんが澤山ある様に、お國の先生から聞きます、私は日本に生れ乍ら日本の首府を知らんのでそれはそれは殘念に思ひます。

○覺えがない　仙臺　岩田よし子

私が始めて東京へ行つたのは入学の時祖母様の家へ着いた時泣いて〱どうしてもはいらないだましなだめられて漸くはいつたそして一ヶ月も居て仙臺へ歸るとなつたすると此度は歸らないと云ふ、どうしても動かなかつたそうですですから今でもそれを父母に笑はれて居ます其時分ですから何所がどうだかちつとも覺えはありませんの。

○東京の花　中澤町　やま川

私の阿母様は常に子供三人の中、一人は東京の花を見せて與るゝ者もあらうと、夫々娯しみに寡婦暮をして居りましたが間もなく亡くなられ東都の花を見たしと言う希望を遺らして其骨を埋めましてから春は何度も參りましたがまだ誰一人東京を知つた者がありません、地下の魂は定て私等の不甲斐なきを怨んでをるでありましやう。

○知り人　岐阜　篠田とみ子

私は文壇が受取ると直ぐ表紙の人物に依つて名を附けますが、今年の分丈を申ますと新年號が艶ちやんと云ふ愛らしい子で、第二號が初子さん第三號が八重子さんで四號は一寸田舍ぶつた正惠さん五號が別嬪の芳子さん、チエレ、ノグチさんが六號の臨時増刊で七號のハイカラ先生は、蓮子さんでありますが此人達は皆東京の御出生です、右の親友の他に往々噂致します方が五人計りと餘りせない方が十人計りと單に知つてる人が卅幾人あります。

○山また山　舞鶴　高田邦子

四方どちらを見ても山亦た山、の深山の里に住む私が想像致しますと、まあ關八州は四方山が見ない、其の中に東京は晝夜の別なく自働車、電車、馬車、俥等の行來の繁き様から西洋造の屋並、常燈燦いて晝の如き夜。などと私は目の前に夢の様に見えますが、すぐ後から山亦た山が眼に映じます。

○親疎　京都　田中なみ

私の十四の時、親しい友だちが東京へ行かれました、其時は私も行きたくて〱率行てもよいから行つて見たいと思つて居りました、年月の過ぐるのは速いもので二年經つて歸つて參りました、それで先方からも行きましたがいつも、そうだわ、とか、そうなのよ、とか云つて言葉が合はないのでいつしか言葉少なになり何となく親しさがなくなりました、それてあんなに仲がよかつたのが何してこうなつて了たかと思ふと情けなくてたまりませんそれからはあまり東京へ行きたいとも思はなくなりました。

○戀しい　羽後　菊池りう子

昨年東京からお歸りなすつた姉様はいつても「東京にあこがれて居る内は最も心の華々しい時だ」とおつしやいます、私は毎日「東京」を夢見ない日とてはありません、これが華々しい心か？と思ふとつひ情なくなります、私が何故東京がすきだ？こうきかれてもそれは貴女は何故春の宵が好だ、何故詩が好だときかれると同じて答へる事が出來ません、然し東京とても汚い塵はありませう、けれど又其塵をかくす丈の或美しい物がたしかにひそんで居ると信じますて或物から私の心はチャームされてこんなに東京が戀しいのでせうか。

○何故に東京を愛するか　豐多摩　西野秋子

私は親の代から東京に住んで居ります、今でもこの都ほどよい所はありません、無論京都へ行かうが、大阪へ行かうが、この東京で見る様な偉大な處はありません、私も田舍に親戚がありますから、暑中休暇などにはよく行きますから、少しは田舍に就て、觀察したこともありますが、さう申すと誠に失禮の様であるけれども、ながく田舍に住んで居ると、どうも活氣に乏しく、向上の心などとんと消え失せる様な氣はいたしませんか。それに比ぶると大都會の生活は日々活動の中心點に接觸してありますから、自然と心を勵まして、女ながらも、誠に鋭氣な元氣を出し、遅れつゝも、日に月に進む、文明の世界に立ちて、時代の潮流に棹さすことが出來るの

は、何ともいへない愉快であります。

○生れた地　伊勢　中谷ひさ子

東京實に誠に懐かしう御座ります。今から十七年前私の呱々の聲を擧げた處ですもの。此地へ移り住みましてから、七年此方一度も行つた事がないのです。どんなに變つて居るでしよう、兄様から御手紙で色々東京の事を知らして下さると、わけもなく淺草や、上野の、公園が眼に、胸に、浮んで直ぐ飛んで行かふかと、思ふ位です。ですけれど、此間歸つて入らした、綾子様の金縁の眼鏡なんかお懸けなさつて、「孫氏三十九度强のラバーのハンド握るこそ」と歌つて入らしやるのを、見たり聞いたり、しますと、何だか嫌に成るのです。それかと言つて、東京の二字は、どうしても、私の頭を離れて、行かないのですよ。

○利不利　廣島　野の花

東京程便利な又不便利な所はあるまいと思ひます何故ならすべての機關といひ見る物といひ欲しいものといひ何でもあらゆるものがあつて此上もない便利な處ですしかしすべての物價は高く何から何まで御金が先で水まで御金を出すとはさて〳〵不便利な處ですこと。

○嶮しい山　奈良縣　よしみ

東京は非常に嶮しい高山であつてその絕頂に奇麗な花が澤山五色燦爛と輝いて居ます、多くの青年男女は花を手折らんが爲登山を試みますが、餘りの嶮しさに中途から引返す者もあり、一歩ふみはづして深い谿間に落ちる者もあり、漸く頂上に登つても餘りの疲勞に花を折るだけの精力を失ふ者もあつて、首尾よく登山の目的を達する者は誠に少ないのです、しかし實地に登つた者でなければさほど峻嶮である事がわからず、登山者は必ず花を手折るに違ないと思はれますから、この嶮しい恐ろしい、高山は、地方幾十萬の青年男女が憧れの的となつて居るのです。

○一番　名古屋　吉田たま子

地圖を繙くと一番印の大きいが東京で、日本一の都が東京、日本の首府が東京に在つて、名所勝地も東京が多い、何も彼も東京が一番ですネ、昨年の三月綾子さんは東京の學校に行らつしやつて此お正月に歸郷なすつた時お友達衆は非常に綾子様を歡迎しました、此間隣へ越して見えた仕立屋さんは東京辨だと謂ふて組合の人々は何んとなく貴びます、什麽しても東京の地を踏んだ人は崇められますヨ、私も東京の學校へ入り度事を時々母様に願ひますが、母様は墮落の二字を案じてお宥しがありません。

○女子大學　新潟縣　野澤照江

學校を卒へて、一年から家庭に居ります内に東京地圖におなじみになりました、そして、聞くと、小石川區の女子大學に眼が、ひきつけられます。

○東京だより　鹿兒島　みゆき

縣外へは未だ一度も出て見た事のないお察さんは花もそろ〳〵といふ彌生上旬お父様と遙々東京見物にいらつしやいました而して一番最初のお便りは「街頭の賑はしさはかねてより想像も致し居候ひしなればさまで驚き不申候へ共お江戸の方々の顔立ちは臨畢の人々と背丈に於て非常い相違を認め申候かれ〳〵承聞きて候タダイ蘿根と申者只今拂底の頃にや未だ味ふ事を不得殘念に候國などは芽も出る頭に候へ共當地は羽織ははなし難く云々。

○往來　播磨　おみな子

廣い道幅を、ステツキ持つた男學生やら、ひさし髪の女學生や赤の帽子の近衞兵やきれいな奥様が愛らしい坊チヤン嬢チヤンのお手をひかれたのやらが皆、角の巡査の奥様のような、お言葉で話ながら…………二頭だてのお馬車やら自働車なぞで、おひげの恐ろしい方や洋裝の夫人も通らるゝに違ひない。

○都戀し　水戸　千石さだえ

私は在京中都會は繁忙な所、惡魔の巣窟塵や芥の巷と恐れていました、然し人影まれな鄙に住んでみれば、いと淋しく、お薩をとるにも八百屋の「下りてござい、」と前置、小間物店をたづねても「東京の品なればお直段もよろしく、」凡てがこんな風です、やはり御地がよい十五年餘も東京の空氣を吸たのですもの東京の外にどうして好い所がありましやうか。

○目に浮ぶ東京　薩摩　瑞枝女

東京と聞と、賑かな有様が目にうかぶと同時に、又、裏通の汚らしい下宿屋の二階に、破れ机にひぢをもたれたまゝ、渺茫然とした、空わひを、見つめて、深かき物思ひに沈む一人の女性が目にちらついてなりませぬ。

學校生活

三等 ○あの教室

京橋區新佃島 澄子

懐しい〳〵私の母校は日本橋區の片隅淺草橋の直傍の千代田小學、何だか大變戀しう御座い升て、いつも麹町へ行時等わざと兩國回りに乘て學校の方の側へ腰を掛けます、そして門が見えだすと、どなたか先生が出ていらつしやりはしないかと思つたり女生徒でもいると妹のやうな氣がして可愛う御座います、でも直目につくのは最後に居ました高等四年の教室、オヽあすこ懐しいと思ふ束の間、電車は直に通り過ぎてしまう其時私はほんとに殘念て御座います、ですけど私は其殘念を幾度くり返してもかまひませんと思ひます。

四等 ○山の學校

千葉縣印旛郡成東町寺崎區 小倉すみ女

私の居ました小學校はごく寒村の山又山の其の間てす生徒は男女合せて八十人許り、草花は庭から咲て居て蟬やとんぼは運動場の植木にきます、これを獲えて理科の材料等にしました、前は一面の楢若葉、裏山は小松が連つて、秋は生徒全體が先生を先に菌採をします、又春は花つみやわらび折と四季折り〳〵先生と野遊びをします、吁かうして自然と共にしあげた卒業生が本年て十七回ださうてす。

五等 ○畫中の父

肥後國長洲清源寺村 中島はな

私の親父は漁師てす。私が小學校に通つて居ります時分、教場は非常に眺めがよくて、まはりに見ゆる一幅の風景畫の中には山もあり海もあり丁度親父が仕事してゐるのも手に取る樣に見えて居たのてす。

○習字法

兵庫縣 柾子

妾の通學して居りました女學校には一風かはつた習字法がありました、それは教育勅語を行草の二體で習ふのてした、卒業の折には其れを臨書してじくにしますそして學校次第の紀念と致しましてお目出度い時にも悲しい時にも出して追想するのであります。

○望の松

天憧女

京都の御所を狹んで、高等女學校と相對立してゐるのが、私の母校平安女學院てす。正門の横にみどり滴るやうな、一本の松があります、學院建設の時に植ゑられたので、今年て十三年目になります、同窓會雜誌と共に「望の松」と申しまして、さまてひねくれた、風流な枝振りは持ちませんが、學院の隆盛と共に年々、天に向つて高く、大きくなつて行きます。

○害虫驅除

舞鶴 高田邦子

私が卒業した、尋常小學校ては、毎年春になると、麥の黒穗を拔き採るのてす。それは放科後に生徒が里に歸りて遊ぶ時間を利用して拔き集め、翌日學校に持ち集るのてすそして集まつた黒穗は石油をかけて燒くのてす、亦た五月になりますと協同苗代に行くのてす、先生が指示の木に皆な水田に入りて苗葉に産附てある卵を採るのてす、誠に手補となるのですよ、それに町から御來ての教師樣が蛭に靈いて、瘋狂な聲をお出しになると、農村の兒童は一時に笑ふて居ますよ。

○通學簿

近江 朝みどり

私が通つて居ますのは裁縫學校て生徒はあまり多くはありませんがよく規則を守ります生徒は毎日通學簿といふ小さい帖を持ていつて出席の日は先生に印を押して頂きます縫物の出來上つた時はこゝへ書いて點をつけて頂きますそれ故月末には出席日數や點の多い少いなどよく知れて自然みなよく勵むやうになります。

女醫顧問

東京女醫學校長　鷲山彌生

○分娩後の經行　妾は三月十二日に分娩しましたが、今に經行がをさまりません、何故てしやうか(心配女)

『答』分娩後の惡露は、普通廿一日間位あるのが、普通であります、若し、三十日以上に渉る時は、子宮收縮不全であるか、或は内膜炎にても罹り居るのであります、故に、醫師の治療を受けねばなりません。

○月經と食物及び冷水摩擦　經行のある時には梅干のやうな酢いものはいけませんか其他食べてならぬものはありませんか又入浴は如何てしやうか冷水摩擦は差支へありませんか(野花)

『答』梅干は一ヶ月位を、一度に食するは差支ありません、其他、凡て酒類、及び辛いものを禁ずる必要があります、何となれば、此等は月經の量を増し、子宮に炎症を起す患があります、要するに、月經時には消化し易きものを食し、平常よりは、幾分食量を減ずる方が宜しくあります。

冷水摩擦は、誠に結構であります、其外、垢を除く爲め、毎夕幾分熱き湯にて、全身を拭ひ、殊に局部の周圍は、石鹼を用ゐて、始終清潔を保つ樣になされたし。

○兒を儲くる養生法　(一)地腹の大きいのを治する藥(二)兒の出來る養生法(三)顔色櫻色となす法(四)腦を健全にする常備藥(五)耳鳴が治する藥のお敎へを乞ふ(靜岡縣、御願女)

『答』(一)地腹の大きいのには、皮下脂肪の過多なると、腸の働きの惡いのとの、二種があります、乙は醫師の治療を受けねばなりませんが、甲の方でありますなれば、可成、芋類餅類等を、食せぬ樣にし、常に肉食を主とし、運動を、充分ならしむる事が、肝要であります。

(二)常に精神を爽快ならしめ、房事を節する事が肝要です、而して子宮に疾患があるか、又夫に花柳病等ある時は之に向て、治療を講ずる事を忘れてはなりません、(三)(四)に對しては、常備藥等よりも、寧ろ日頃の攝生が第一です、(一)の攝生と同じ方法を御取りなされたし(五)耳鳴は耳其ものに病氣ありて來るものと、腦病の一症候たるものと、又咽喉の腫脹し居る爲めに來るものとの、三種があります、依て診察の上ならでは、治療法を御授けする譯にはまゐりません。

○人の前で出る汗　式場などで祝文など朗讀すれば直ぐ額に玉なす汗が流れるのです何か防ぐ法はありませんか(愛讀女)

『答』他人との對話中、又は公衆の席等にて發汗するは、多く精神作用でありまして之を防ぐには精神修養が肝要であります、先づ虛榮心を去り、正義を重ずる樣御心懸けなされたし。

○鼻血　南風が吹いて少し上氣氣味になりますと直ぐ鼻から血が出るので困ります全治法はありませんか(困病女)

『答』頭部に鬱血を來す爲めでありますれば、食物を攝し、便通不調なる時は下劑若しくは灌腸を行ひ、若し月經整順ならざれば、之が治法を行ひ、毎朝新鮮なる空氣中を、運動なさるのが宜敷いです。

○聲を美くし、毛を拔く法　妾ことは性來聲惡しく困つてをります美しい聲になる藥はありませんか、又毛の拔ける藥はありませんか私生際と眉毛との間が一寸程しかないのです何うぞお敎へ下さいませ(山城、山里の娘)

『答』性來の惡聲は、如何なる藥も卓越したる技術も到底矣はし、聲を、發せしむる事は出來ませぬから、御諦めになつた方が宜いでせう、又毛のぬける藥も無い事はありませんが斯の如き藥を使用すれば、必ず身體に害を及ぼしますから、御敎へする事は出來ません、然し生際の所のみなれば、支那婦人に倣ひ、拔き取れば自由になります、其法は毛根に火鉢の灰を擂り込み、一本毎に毛拔きにて、毛根を鋏みて拔きさるのであります、斯く致しても再び生えますから、生えれば拔き、生えれば拔きして、四五回も繰り返す中には、終に生えなくなります、併し餘り一度に多數を拔く時は、其部に炎症を起す事がありますから、注意して少しづゝ度々に御實行なされ度きものです。

○●●●咽喉病

妾は一二學年の頃はよい聲の方でしたが咽喉病に罹りまして聲が曇り音の時など困ります療法はありますまいか（新潟縣、つた子）

『答』咽喉病の爲め、聲の惡しくなりたるは、內服藥にては、治りません、專門家の治療を受け、其病根を斷つ樣になさるのが、第一であります。

○●●水虫

毎年四月頃より八月頃まで掌一面水虫に食はれて非常に困ります好き療法お敎へを乞ふ（東北の者）

『答』水虫は多く水使ひ後、手の拭ひ方の不足なる爲め、起るものでありますれば、充分乾かす樣に、よく拭ひ、其度毎に石灰をつけ置かれたし、斯くして一ケ月も御試みになり、尙ほ治せざれば、水揚酸と云ふ藥を醫師より御貰ひになり、之を粉のまゝ每夜寢る前につけて御覽なさい。

○●●●近視眼

妾こと學校にて身體檢査をしましたところ兩眼とも$\frac{20}{30}$と云ふ視力ださうですが之は最も著しい近眼でしやうか、もう取返しはつきますまいかお伺ひ致したう御座います自分ては今別段不自由は感じませんのです。（光借女）

『答』視力$\frac{20}{30}$とは、輕度の視力減弱したるものを示したるに過ぎされども、此減弱近視より來たりしものと假定すれば、今後其度の進むこともあります故、前回掲げたる近眼の豫防法に御注意ありて、之を御實行なさる樣御心懸ありたし。

○●●●●ニキビとフケ

私ニキビが發生し其跡が黑くなつて困りますが如何したら宜しいでしやう又頭垢を去つて再發せしめない藥がありましやうか御教示を願ひます（備後、石田女）

『答』「ニキビ」は前回、詳しく掲げてありますれば、其欄を御熟覽なされたし。頭垢とは多分「フケ」の事ならん、此「フケ」は身體の新陳代謝の結果出來るものでありますれば再發しない樣にとは、六ケ敷あります、然し一ケ月二回髮を洗ひ毎朝髮をもむ湯の中に、盃一杯の「アルコール」を混じ毛根の處を、充分に御もみになれば、始終清潔に保たれます。

○●●●ソバカス

顏にソバカスが出來て困ります、療法お敎へ下さい又鼻の惡いもの程澤山生るとのことですがさうでしやうか（愛讀女）

『答』「ソバカス」は御說の如く、鼻に病ある人及び、胃病、子宮病等の人に多く出來ます故に之等の病氣ある時は相當の治療を加へ、之を根治せしめ、一方には滋養分を充分攝取して血液の循環を高め、顏面は毎朝糠にて御洗ひなさるが宜敷あります。

質問諸孃へ

總て藥は其用法如何によつて奏効もあり亦害にもなりますから假令普通藥とても專門の智識なくして用ふることは危險ですそれ故此の欄では絕對的に藥液療法は申上げぬことにしましたから諸孃も其お積りで質問を願ひます。

女子文壇の誌友倶樂部欄内へ掲載

希望廣告を開設す

（文明の世、何人を問はず、此欄へ廣告すれば、便利多し、有効疑なし、速に試よ）

●就職を望む方

一件（五號活字十六字）二行金貳拾錢

一件（仝　上）三行金三拾錢

●人を求むる方

一件（五號活字十六字）二行金四拾錢

一件（仝　上）三行金五拾錢

右申込の際原稿と共に前記掲出料金送付ありたし。爲替は日本橋區本材木町局宛。郵券代用は一割増。振替貯金の拂込は第一七二九番女子文壇社宛の事。

東京市京橋區大鋸町十一番地　女子文壇社廣告部

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし博士令夫人よりの奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所へ毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ



東京市京橋區越前堀　河村愛子

あざ　赤鼻　なまず●ほくろ●そばかす●いぼにきびの新療法を郵券封入御申越の方へ敎示す

●東京小石川區久堅町五十八　池田兵三郎

色黑　にきび　吹出

好評嘖々たるクヴルーの最新療法にて全治せし故同病困難者へ數ゆ郵券三錢送れば誓て全治美人の幸福を與へます

東京下谷區初音町四の十四女子美術學校前　長田

本社へ申込めば至極安全且輕便てあります



東京買物便法

今般本社にては愛讀諸孃の御便利を計り東京市内に於て發賣する**書籍、雜誌**は特別に**定價の壹割引**其他**文房具化粧品、西洋小間物、玩具**等有らゆる百般の物品は**定價の五分引**其外は手數料申受ず誠實に御用達致しますから多少に拘らず遠慮なく左記の注文心得を御覧の上御申込下さい

申込の心得

○注文

▲必ず▲品名▲大小▲形狀▲品質▲定價▲使用向を始め販賣又は製造元の番地名稱及び自分の住所姓名等を明細に申越下さい
▲送金と同時に振替貯金用紙裏面通信文記載欄に注文の用向を明細に記載あれば別に手紙又はハガキにて申越すには及びません

○送金

▲必ず注文と同時に割引に相當する金額と郵便小包料又は鐵道運賃とを合せて郵便振替貯金又は爲替金にて本社へ送つて下さい

○見計ひ送品

▲賣店の名又は代價等不明のときは品名と大體の豫定金とを合せて御送りあれば便宜見計らひ精選買入れの上御送り致します

○送出

▲堅牢に荷造しまして小包郵便又は鐵道便脊通運送便にて送り届けます

○問合と宛所

▲買入依托に關する問合せは返信用切手封入又は往復ハガキに限ります
▲申込は總て女子文壇社買物用達部宛にして下さい

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
（振替貯金口座第壹七貳九番）

女子文壇社買物用達部
（電話本局六百七番）

（後付の三）

大好評

小說もあり**文章**もあり**詩歌**もあり**文學**一通りのものは揃つてゐます。皆之れ花の如き**女子**が**大懸賞**の應募熱心に作られたるもの眞に**文章速成**の最新良書なり



▲全一冊▲洋裝▲大判▲紙數▲二百▲五十餘頁▲入賞▲肖像▲寫眞及び原色作家▲密刷
▲石版彩▲色密刷▲睡蓮▲花苑▲皆美麗の口繪澤山

▲定價金貳拾錢
郵税壹錢五厘
（郵券代用壹割增）

本書目次

○小說
○おとぎ文
○美文
○論文
○日記文
○書簡文
○新體詩
○短歌
○和歌
○俳句
○圖畫

附錄

○官吏の死……瀨沼夏葉
○笛……田山花袋
○木の花……與謝野晶子
○文藝の材料と其扱方……片上天弦
○蛤（五句）……高濱虛子
○暖爐……三谷蘆華
○家出……水野葉舟
○暮れゆく光……三木露
○卒業して故鄕に歸れる數へ子におくる文……武島文學士
○いさ子の日記……中村文學士
○川の少女……巖谷小波
○朧夜……佐々木信綱

◎空前の大安賣

諸大家選評

女子懸賞文集 第二

（四六判五百頁）

▲定價卅五錢　特價金貳拾錢　郵税六錢

國學院學士小森松風先生著

美文作法

（菊判二百卅頁）

▲定價四拾錢　特價金貳拾錢　郵税四錢

國學院學士小森松風先生著

言文一致文範

（菊判二百卅頁）

▲定價四拾錢　特價金貳拾錢　郵税四錢

報知新聞記者中村木公君著

實地精査 女子遊學便覽

（校長肖像入）

▲定價參拾錢　特價金拾五錢　郵四錢

右の外『玉蟲』及『朝ばれ』は既に賣切れ申候

前記の四書とも殘部僅少、賣切れますと增刷せず絕版になりますから、此際至急愛讀を願ます、出版界空前の大安賣なり

東京京橋銀座大通り十一番地　　**女子文壇社出版**　　振替口座第七九壹貳番

誌友倶樂部



書籍の集りたるは則ち眞正の大學校なり　カーライル

注意！注意！

誌友倶樂部投稿の諸孃に一言します、原稿は多々益々殖りまして漸く增刊て補ひをしてゐる位てすが、其文句が如何にも單調て、模倣て、人こそ變れ皆さんは一つことを繰返して居られるやうてす、是ては見る人がたいくつします、誌友倶樂部は**初めから開放**して諸孃の利用にお任せしてあるのてすが、皆様は交際を求めるにしても、御挨拶が極つて了つて、名前だけにしても好いくらゐてす、そこて此等の弊を矯め、且誌友倶樂部を愈よ面白く、愈よ有益にする方法の一つとして**特色ある投稿を優遇**しやうと思ひます、人より善く出來て居る文章、又有益な交換や、成程とうなづかれる交際の仕方や、人眞似てない眞情のある交際法などて記者が特色あるものと認めた場合には、普通の分とはなして、前の方に出します、然れば從來の圖書、寫眞、繪葉書、編物の交換は勿論其他の交際を求めるにしても、特色をつけて下されば、**目に立つやうにして掲載**しますから、自然早くに好い友人を得られ又交換が出來るわけてす、次號の定期增刊「美人草」から二三の例を示して實行しますから諸孃も特色ある投稿をたまへ。

文學顧問

問　ハイ子の詩とは如何なる書物てすか（滋賀縣、西尾）

答　獨逸の大詩人ハイ子の詩を譯して集めた書物てす。

問　俳句の選者に先生と宗匠とありますがどう違ひますのてすか（大阪市、花子）

答　別に違ひはありません、先生とは新しく言ふ語て、宗匠とは古い語てす、新派なら宗匠と云ひません、舊派に限るやうてす、別に理由はない、習慣上然うなつたのてす

問　記者樣誠に御手數乍ら右の講義御聞せ下さいませ（大阪とき）
蠟涙の赤き流るゝ涅槃かな

答　涅槃の日に赤い色の蠟燭をともしてあつて、其赤い蠟が流れてゐると云ふだけの事てす、蠟涙は蠟が溶けて流れてゐるのを言ひます、此句の妙は涅槃らしい處を見つけたと云ふより外に說明のしやうはありません。
外の二問は答へず

問　記者樣にお尋ね申します、形而上とか形而下とか、破天荒とか、絶對的とか、システムとかオーソリチーとかの意義を御敎示ください。（淺學女）

答　形而上は無形と云ふこと、形而下は有形と云ふこと、破天荒は人を驚かすに足るやうな非常なこと、絶對的は對するものもないことて、獨立の意義、システムは組織的、或は系統的、オーソリチーは典據よりどころ。

問　「源氏物語」の活版の本はありますか、定價と發行所をお知らせ下さい（片山里の百合子）

答　博文館發兌「日本文學全書」の第八編より第十二編まて五册になつてゐます五册て定價一圓二十五錢郵稅二十錢になります、其他「源氏物語湖月抄」全八册定價二圓郵稅四十八錢日本橋區馬喰町二丁目興文社の發行てす。

問　國木田獨步氏の「武藏野」の發行所と定價を問ふ（岩手の艇子）

答　神田表神保町彩雲閣發兌價廿五錢郵稅六錢

問　東西遊記、東關紀行、東海道名所記、落窪物語、の發行所と定價を敎へ下さい、古今の有名なる日記紀行二つ三つの定價をお敎へ下さい（刈谷直子）

答　橘南溪の「東西遊記」全二册定價五十錢郵稅十錢京橋區南紺屋町十八尚榮堂發兌、又博文館發兌の「紀行文集」（續帝國文庫第二十編）にも收めてある定價六十錢郵稅十五錢其外註釋したものては「標註東西遊記」全二册定價一圓十錢郵稅十二錢本郷湯島切通坂町八南江堂發行、「東關紀行」も博文館の續帝國文庫第三十七編「續々紀行文集」（定價仝上）の中にある、註釋書は「註釋東關紀行」全一册定價三十五錢郵稅四錢神田鍛冶町四誠之堂發兌、「東關紀行

詳解一全一冊定價三十五錢郵税四錢神田錦町一丁目明治書院發兌、淺井了意の「東海道名所記」は博文館發兌「温知叢書」の中にあります、確か第一編の中でした、此書は今坊間に餘りありません定價二十五錢郵税六錢、「落窪物語」は博文館發行「日本文學全書」第三編の中にある定價二十五錢郵税四錢、其外詳釋ものでは「落窪物語大成」全四冊一圓八十錢郵税十錢京橋區銀座一丁目大日本圖書株式會社發兌、「落窪物語講義」全三冊一圓三十五錢郵税十五錢誠之堂發行等、御孰れの古今の日記紀行と云つても漠然として答へかねます、矢張名稱を擧げて下さい

問　新體詩を作らうと思ひますが最初に如何なる書物によるのが早いでせうか、それから段々と進むに從つて讀む書を敎へ下さい、學力は高女四年位です(千葉縣、唖の女)

答　何書に依れば早いの遲いのと作物を稽古するのに速成を的とするやうでは成功しません、新體詩の初學者に適當な書は近刊では河井醉茗著「新體詩作法」(定價三十五錢博文館發兌)があります、進むに從つては名ある詩集を御らんになるより外はありません

諸嬢と記者

○記者樣の御手腕で、諸姉樣から誠に深山の新交際を申しこまれました、昨夕記者樣へ御禮を申ます、山口縣の御方も隨分深山愛讀しなさる事と始めてしりました、相變らず又どうぞれ(山口縣周防冊布施しづ)(記者曰、それは結構でした、樂しく有益なる御交際をお續け下さい)○記者樣へ一寸御願ひ申ます　女子交壇へ投書する文題は何時も御社の方から御出しになるのですか文題卒ですか次號に御敎へ下されかしこ(兵庫縣楠さみ子)(記者曰、題は出しません、出すのは文壇餘興だけです、後は御隨意に)○記者樣にお尋ね申します。一、文壇餘興の課題答案は何行何字詰又文章體でよろしきや、二、すべて答案は號にてよろしきや。三、誌友面影へ出す寫眞は半身又は弟妹一所でよろしきや。四、文壇の花は何月發行なりや。五、短文も文章體なりや字は楷書なりや。御多忙の處恐入ますが何卒右の答を次の誌上へ(相模好花女)(記者曰、一、七八行限りて十六字詰、文章體、口語體何れてもよろし、二、雅號のみにて紙上へ出しても宜しけれど、原稿の片すみへ住所本名を認めて下さい、三、仰せの通りにてよろし、四、四月に發行しました、次の「文壇の光」は十月に發行します、五、文章體、口語體何れてもよろし、字は凡て楷書にお書き下さい)○唖の子、澄江子、藤原美代子、秩父とゝ子、陸中、昌月女、齊森、西村みやの諸嬢の通信は拜見しました、別にお答はしませんけれど中越の事は了承して置ます(記者)

諸嬢の交際

○外國古切手御望みの諸嬢よ繪葉書にて御申込になれば御一人に五枚づゝお送りいたします、北米、大西　(T. Onishi. 836 Pork view. Los Angeles. U. S. A.)○普天下の誌友諸兄姉樣よ私は故國遠くはなれ一人淋しく暮し居る者よ、何卒玉章、繪葉書の御交換を永久にお願ひいたします、又は自筆のもれ必ず御返禮致します、東京の御方は御遊に御出て下さいな　(東京市京橋區水谷町六番地水谷楠通高橋徳太郎方すみれ子)○繪葉書交換をお願てすが其繪葉書には歌を書いてもらひたいのです、私もみじく作書いてお送りします。(信濃埴科郡寺尾村二七四駒澤ひろ子)○諸姉樣よどうぞおん寫眞や面白い小說本お交換して下さいまた御文通も願ひます(秋田縣平鹿郡横手町　柳町三ッ梨健一郎方松山せち子)○何卒繪葉書の交換を永久願ひます私は御情ぶかき方ならば男子にてもいとひません(茨城縣新治郡斗利出村藤澤新田矢口貞子)○肉筆の繪葉書は大に歡迎します亦た御情深き諸姉樣よ何卒讀み古るしたる雜誌小說どんなても宜しいから御惠下さい私よりは美しい霞浦名所か土浦名所美人繪はがきを以て必ず御禮します(常陸新治郡中渡村大久保治子)○貴き記者樣の御惠にて四方の貴孃樣と御交り出來ます樣になりました以後又宜しくレッターや寫眞の交際して頂戴な　茨城縣真壁郡河内村大字藤ヶ谷谷貝ゆう子)○誌友の諸嬢樣よどうか繪はがき交換のお仲間入りを願ますお返しは屹度うつくしい者て早速いたしますから(上總夷隅郡總野村杉戸吉田みゆき子)○皆樣私は片田舍にすむものでありますが皆樣のように女學校へ入學することもできずさびしくすごしてゐるのです　何卒御手紙下さいませ又小說おもちの方は御送り下されませそして私男子の方もかまひませんから永久に御まじはりな　(福島縣石川郡石川町字南町添田松子)○諸姉樣妾は本納町東洋女學校に通學致す不束者てすよ今妾の手許に外國美人繪葉書五組と妾の見苦しき寫眞二組とがありますから寫眞と繪葉書を添へて早く送て下さいれ　(千葉縣

長生郡新治村吉井齋藤たき方佐久間やす子）◯皆々樣末長く御見捨なく妾を愛し給ふて玉章やエハガキ寫眞の御交換をして下さい、（千葉縣山武郡增穗村南横川北田秀子）◯滿天下の諸孃よ何卒玉章繪葉書の交換を（千葉縣海上郡浦賀村西豆洗千本松花月）◯親愛なる諸孃樣よ何卒エハガキや寫眞の御交換を願升確かに御返し申升（磐城國川村郡瀨川村田村山方佐藤美子）◯懷かしき誌友の皆樣よ私は山の中に友もなく只一人て淋しく日を送つて居ますあはれと思召して御玉章繪はがきにて御交通下さいな（岩代國信夫郡土湯村川上ゆう子）◯私は黑髮山の麓で實に淋しい山里で日々暮して居るのですから、何卒玉章繪はがきや寫眞の交換を願ひます（宇都宮局區内姿川村下欠下佐藤平馬方同文子）◯滿天下の諸孃相かはらず御盛んで誠に悅ばしい事てす旅行好の快活なる御方よ以後よろしく御交り下さい（下野國氏家町字櫻野瀧澤蓙子）◯北海道の端より繪葉書の交換を乞ふ（石狩國雨龍郡北龍村字和吉植巖子）◯妾の手許に有名な南横川金子神社の繪葉書十組と見にくい妾の寫眞五組とがありますから繪葉書で申込まれたお方にはすぐ繪葉書へ寫眞を添へて發送致します（千葉縣長生郡豐岡村第二區鈴木苗二良方かれ子）◯姉上樣妾は英語がいたつて好きなので度々英文て繪葉書の交換をしてゐたのです先着二十名には妾の寫眞を差上げます（千葉縣長生郡關村小母佐池上信子）◯何卒ゑはがき寫眞の交換を願ひます殊に音樂が好きで御座いますから何か新しい曲御存知の御方は御知らせ下さい（栃木縣宇都宮市大寛町五十七番地小林貞子）◯誌上の姉上樣玉章や繪葉書の交換を願ひます御返禮には臺灣の名所風俗のを差上ます（臺北艋舺直興街二八吉永次子）◯私は山里の不便の處に居りましてお情け深い皆樣にお目にかゝる事も出來ず殘念でたまりませんお心有る方は寫眞でもリボンでもハンカチーフでも雜誌でも古本でも何てもかまひませんから一度諸孃の手に渡りましたものなら何んでもかまひませんお送り下さい必らず御禮差上げます（新潟縣三島郡深戈村字深澤川崎てい）◯編物寫眞の御交換を願ます先着者八人には當地の風景繪葉書帳一册に妾の寫眞を添へて御返戻致します又未使用の繪葉書交換も願致ます（北海道札幌區北一條東四丁目九番地西村方清宮利子）◯北海道の片田舍の妾をもお見捨てなく深く御交際を願ひます尙繪葉書をお惠み下さい其れに就いては相當の御禮は致します又雜誌の御交換を願ひます（北海道天鹽國上川郡劍淵村二百九十三番地小林喜代乃子）◯私は皆樣のやうに繪や字が書けませんので人並に御交際を願はれませんが當地の山にフレップと云て實は苺の樣で花は白梅の樣な優しい小さな草が御座いますがお望みの方は御自筆の繪葉書で御申込み下さい先着二十名限り押花にして葉と共に差上ます御住所姓名は明かに（北海道根室十島町壹丁目八番地汲川幸子）◯御玉章や繪はがきを賜れし姉上樣方にはそれ〴〵御返事を出しましたが只一名だけ住所不明のがありまして御返事を出すことが出來ません（北海道空知郡上富良野村湯淺すみれ）◯愛讀諸孃樣方よ妾は吳市の西隅に住む不束者ですが玉章及び半紙に歌を書いて御交換下さいませんか又面白い唱歌等寫して御換へ下さい妾も澤山と云ふ程も御座いませんが持つて居ますから着次第御返事致しますよ（吳市西本通三丁目百合野白梅）◯妾は天龍の畔りに心にもなき憂き月日を送て居るものですが聖友の諸孃よ淸き暖き心もて繪葉書の御交換を長へに願ひます（靜岡縣磐田郡岩田村寺谷三四永井敏子）◯私こと一身上の都合て暫く皆樣とお別れせんければなりません、御健勝を祈ります（浮草、赤倉富子）◯妾は琵琶湖邊に住んでなります田舍娘で御座いますが諸孃樣からお手紙を下さると誠に嬉しくてなりませんから何卒繪葉書やお寫眞やお手紙をお惠み下さいお寫眞お送りのお方は先着十五名には妾の寫眞と絹シナリ一對と近江八景の美麗な繪葉書一組宛を差上ますからドシ〳〵お惠み下さいお賴みいたします（近江國甲賀郡柏木村大字酒人

五六七番地藤野やす子）○エハがキや玉章の、交換を願升又末永く交際をしてくださる方には、少女世界女子文壇の古いのをさし上升、どなたでもかまひませんから、交際をしてください。(近江大津市獵師町五拾八番屋敷近藤朝次郎方同乗菊子）○私はなつかしい古里をはなれて當地に居りますが誌友の皆様と玉章や繪葉がきを交換願ひます御返しには兼六公園の繪葉書でいたします(金澤市宗叔町三番町二三ノ三、山田廣一方はな子）○私は本誌從來の愛讀者ですが、投稿しましたのは今度が初めてです。どうかみなさん不束な者ですが、永久に御交際下さいまし(德島縣勝浦郡中田村中村勝子）○思ひ出おほき春の夕、文机に倚りて、アルバムや、親しき友の寫眞帖など、繰返すを無上の趣味として、暮らし居りますもの、どうぞ、繪葉書や、お寫眞の御交換を：：お寫眞を送つて下さろ、かたへは別に、其月發行の文學雜誌を一冊づゝ添へて、さし上ます(東京神田東松下四七、篠原內やす子）○私の入院中御手紙を下さつたお方がございましたそうですが混雜のため御葉書を紛失いたしましたから失禮でございますがもう一度御住所を御知らせ下さいませ（京都市聖護院町中河原町岸村學子）○お情ある敦賀町富貴の泣屋子さんにお答申します、おたづねの澤田かよ子さんと私は別人でございます私の名は瀧子です、お玉章に御姓名が有りませんで御返しする事が出來ません(若狹澤田汐汀)○諸姉様よ妾は本當に田舍者で字は一字も存じませんので憐れな者で御ざい升が文壇愛讀の一人と思召てかな寄御玉章頂だいな理想の姉上樣達よ（福井縣若狹國大飯郡和田村犬島叶子）○多くは望みません只、一人か二人私ゝ終生の交りを結て下さろ方有ませんでせうか、私は女學校卒業して內に居ります年は二十一才よ(北多摩すみれ子）○妾は四ヶ月程前から愛讀者となりました何分淺學なるものですから誌友の皆々樣宜敷御交際を御願ひ致します（京都市一條通り千本東入武部輝子「柳葉女」）○私はまだ修業中の淺學なる者ですが誌友諸姉の末席を汚しました、永久に御交り下さる方がありますれば妹ゝ御思召して御交際下さいませ（京都市上京區釜座通御池上段證てろの）○神奈川縣內の皆樣の中で高等小學を卒業なすつた位の方か卒業なさらないでも其の位の學力のお有りになる方で教員志望のお方が有りましたら何卒御交際下さいましな（神奈川縣久良岐郡六浦莊村三分字川、木村はろ）○本誌愛讀の諸姉様私も初號からの愛讀者でございます至て不束な者でございますがどうぞ御交際を願ます（橫濱市初音町一ノ十四石原方相樂きみ）○小野の瀧流もたせ給へる假滸き方々よいとましおはさげ蕊のにほひほの見せ給ひてよ、むげに多きをいぬるにはおられど情ある方に切に望むになむ(沼津上土町八代奘代子）○皆々樣御親切なる御手紙下され有がたく拜見致しました、仰せの通り昔の杉山今の大沼そめ子です、耻かしながら皆樣に何の御知らせも申さず不自由の身となつて了つたのです、しかし先天的に文藝をはなれる事が出來ませず每日少しづゝ勉めて居ります、皆樣、御暇がありますの節は何卒お遊びに入らしつて下さいまし在學中のお物語りを致しませうではありませぬか、尙また久しく御無沙汰致しましたが、舊情を暖めて盛んに御手紙下さいませ（上野新田郡太田町入町大沼そめ子）○私も皆さまのお仲間入りして御交際をいたしたいと存じます(牛込區新小川町、太神つや）○私も…（京都市寺町通六角南入、上田德子）○御姉上樣妾は繪葉書一番好きて御座います故皆樣御交換願ひます（京都東堀川四條下ル長田藤次郎方田中文月）○先日御交際を御願致しましたら皆樣から御心切な御手紙をいたゞいて有難う存じます內に男子の方からもいたゞきましたがまだ妾は年もゆきませんから男子の方との御交際は出來ませんから御斷り致しました女の方なら御交際願ます（東京京橋山內ちゑ）○御なつかしき姉上樣方よ、妾は片山里にさびしく暮して居るのです何卒御玉章の御交際をれ必ず御返しは致してよ（周防都濃郡下松町相本たれ子）○皆樣いろ〳〵送つて下さいまして大そう嬉しう亦おもしろう拜見いたしました又此後も不用のがあれば送つて下さい（兵庫縣有馬郡道場村西本利介方那須哲子）○私は今は仙臺に居りますが二十六年に廣島の橋町の尋常小學校を卒業致しまして名古屋の第二高等小學校を第三回目に卒業致しましたのですが唯今兩校とも同窓會の雜誌でも發見致して居りませうか御存じのお方は一寸御知らせ下さいませんか(仙臺市北六番町百九十二番地原霜峯）○天下の諸姉樣よ私は不束者ですが何卒永久に御交際下さい又御玉章エハがキ等の交換を願ます（埼玉縣川越町字江戶町堀尾すみ子）○御願ひですが本誌へ掲載になつた和歌俳句新歌謠か又は古來の難句妙語を一ツづゝ書いて繪葉書を送つて下

さい御返禮は怠りなくいたします（甲斐東山梨郡加納岩村勝村もりよ）

○女子文壇の姉樣よ達方の地てすが御交際して下さいな（北海道石狩國樺戸郡浦臼村字黄臼內小西嬌奐子）

○妾は僻陬の一寒村につまらない日を送つてゐる者てすが何卒あはれと思し召す御方がおありになつたなら御手紙やゑはがきの交換を願ひたいものてす（茨城縣稻敷郡八原村大字八代石島一雄方幽花子）

○多幸なる誌友の姉樣達よ妾は山高き信州の篠之井驛を西へ三里の犀川畔に友なく田園生活をして居る不束者て御座いますが同國の御方は勿論誌友の諸姉樣何卒繪葉書や玉章の御交換を御願ひ猶雜誌や編物の交換も神に誓てお返致します（長野縣更級郡牧鄕村大字牧田中內山增藏方鼎波子）

○繪葉書の御交換を切に希望いたします、總義を重じて妾も其の御返禮は必らずいたします。（四谷區永住町二番地愛川方北尾田鶴子）

○萬天下の姉樣方よ私はれまだやつと小學校の高等科よこんな草深い田舍にほんとうに淋しいのよてすから妹とおぼして永久に水魚の交りをして頂戴なもし一時的ならは私おことはりよどうぞ末の松山かけてれそれからエハガキの交換もよ御自筆のをれ私も下手ながらきつと御返し致しますわ一日千秋の思ひて御手紙下さるのを待つて居りますわ御願ひよ（信濃上高井郡小布施山縣靜枝）

○誌友の姉樣相點ず肉筆繪葉書の御交換を願ひます（山口縣玖珂郡南河內尋常高等小學校內貴船艷子）

○誌友姉上樣よ御玉章や美はしき御筆跡の御歌御送り被下及ばずながら拙なき歌を御返し申ました私は左の所へかはりましたから宜しく御交際ん御願ひ申ます（土佐國長岡郡高須村新木森田林子）

○誌友の諸姉上樣私も今回より愛子姉さんのお進により愛讀者となりましたから永遠に御交際を願ひます（筑前木瀨屋町、松本芳子）

○私は田舍に住む一少女てすが今回より本誌の誌友となりましたから末永く御交際下さいませ（福岡縣鞍手郡木屋瀨町愍田屋本家內、松本春栞）

○誌友の皆樣うつくしい繪葉書や御寫眞を御めぐみ下さいまして誠に有がたく厚く御禮申上ます尙ほ今後も相變らず繪葉書の御交換を願ひます（靜岡縣濱名郡篠原村立場鈴木貞子）

○壇友の諸孃樣よ、繪葉書の御交換を願ひます（遠江榛原郡萩間村東萩間原木松翠方壽美禮女史）

○誌友の姉樣よ私は女兄弟一人もないの、だから實際心から妹にしてやらうと御心のある御方は何卒妹にして下さいな東京の御方なら尙よろしい（伊勢鈴鹿郡關町新町福嶋初子）

○みなさんどうかこれから私にも繪葉書や玉章の御交換をれがひますそして金色夜叉の譜を御存知のお方はお敎へ下さいな（伊勢國多氣郡相可村大字河內岩崎ふく子）

○誌友の諸姉樣方よ御白筆の水彩畵何卒澤山ドシ〴〵送つて頂戴な男子の御方ても苦しくないよ（島根縣能義郡井尻村福富大下長尾定子）

○皆樣の內て特に事務員又は看護婦等て獨立してゐらつしやる意志の強い御方と親密に御交際致し度存じます（島根縣那賀郡濱田眞光町和田岩子）

○本誌幾萬の愛讀諸姉樣繪葉書や玉章の交換をして下さい屹度御返事は致します（備後深安郡神邊井上房太郎內井上年子）

○私地方の繪葉書や滑稽エハガキなどもつてゐますから皆さん交換しませんか（山口縣周防國田布施村松根助一方靜枝）

○都は櫻花の盛りと聞く、當地は昨日來の降雪二尺五寸以上未だ止む模樣なし（四月九日投白河關邊にて英子）

○尾張國の小幡丹彩子樣三月號の御言葉に付き私反對よそれは男子の方は皆惡いとは限りませんが又手紙のやり取り位て其人の善い惡いがわかるものてはないてしよう私はどこまても男女の自由交際は好みません思ふに丹彩子樣は誠の女性てないてしよういかゞや（反對女なる野末の撫子）

○妾は金鯱の下に暮して居りますが、友人がなくつて困つて居ります、姉樣方可愛そうと思つて、繪葉書なり送つて下さい相當の御禮は致します、名古屋の方は遊びに來て下さい、（名古屋市鐵道官舍九の三、藤井志津子）

○諸姉樣よ妾は昨年の五月頃からの愛讀者てすが投書するのは今が始てす

本誌の懸賞は此から凡て正金で呈上することに改め又成るべく天地人を出す方針に定めました詳しいことは本號の終の頁を御覽下さい。

◎◎◎◎◎（八月號より實行）◎

よ、どうかれえ不束な者てすから敎へて頂戯てして妾は雜誌交換や繪葉書交換が大すきよ。（名古屋市菊井町八丁目十一番地吉田波子）○誌友諸姉よあはれな妾に同情して下さつてありがたうよ吉野の山も昨今が眞盛てすから御見物いかが妾の宅は近くてすから御案內いたしますよ（大和吉野郡賀名生村久保榮子）○私は不束者てございますが妹として愛して下さる御方はありませんてしやうか御返事は神にちかうて致します（大阪市西區梅本町三五一大神芳江）○誌友の皆樣初めて御目にかかります 私は南紀の草深き片田舍に淋しき月日を送り居ります 賤女てすが以後御見知り置き下さつて御敎下さいませ（紀伊海草郡安原村名草之瀧木下はる子）○妾は今度女學校を出たばかりて淺學な者てすが此の後は投書致したう思ひます記者樣、及諸姉方の御引立に預かるるならば幸甚てす（福井縣南條郡河野村今泉岡本靜子）○色々の編物や寫眞な送つて下さいますれば私が持つて居ります驚堂の書牘文例落合の日本文典博文舘の日露戰爭空中飛行艇未亡人ハイカラクラベ千年後の世界等雜誌等て御返禮いたします（備後國蘆品郡府中出町、藤野內、入夏子）○皆樣私は備後の片田舍に住むはしたないものてすが、何卒繪葉書や玉章小說雜誌等御交換下さい（備後國邊紺屋町耕辰內井上作子）○誌友姉上樣私も本誌を愛讀する樣に成りました、が何分田舍の事て親友も少なく至つて淋しく暮して居る者てございますが皆樣がた幸に寫眞玉章の交換をして下さい永遠に交際をねがひます、然し男子のお方はお斷り申ます（大阪府泉北郡南池田村大字池田藤原松太郞方同美代子）○私は上等繪はがきを澤山持て居りますからみなさま永久にどうぞ御交換下さいませ（大阪市西區北堀江下通六丁目田村とみ）○私はお友達から手紙の來るのを此上もないたのしみとしてゐます、何卒皆樣御手紙の御交換をして下さいネ！御返事は神に誓つて致します、又御寫眞もネ！是非とも御願ひ致します（大阪市北區曾根崎上四丁目二七七福井信太郞樣方松田しづ江）○私は片田舍に淋しくくらして居る者よ雜誌繪はがきの御交換を願ひます（紀伊國北牟婁郡相賀村大川とせ方しをり）○繪葉書あみもの寫眞お手紙等皆さまの通りに御交際がねがひたうございます、私の生れは備後てす（吳市庄山田京町四十二番戶草川捨吉內、石本熊子）○親愛なる諸姉樣よ私は繪はがきすきてすから交換を願升文字をおもてにかいて御送りの方には五名まではしをりをあげますから交換を願升（山形縣西置賜郡小國本村中津川子）○系はがきの交際をねがひます但し麗はしき文字を入れて下さい其他しをり編物などを送つて下さい妾は雜誌や小說て送りますさようなら（秋田仙北大曲中島方奥田碧子）○諸孃さま妾は二月昨秋から下記の地に參つたはなはだ不束者てすが何卒玉章や繪葉書の御交換を御寫眞送つて下さつた御方には妾の寫眞に外國製繪葉書五枚添へて又小說によければ新夫婦、小猫、不如歸、乙女の操、百合子、乳姉妹、二葉松、熊子、外五册有り升す（秋田縣河邊郡豐岩村字小山村藤田別莊內藤田みどり子）○わたしも此頃から文壇の一人となりましたから宜敷しく繪葉書や玉章や眞字の交換を願ひます必ず御返書は申しますわ（秋田縣秋田市楢町山內定治樣方佐藤孝子）○妾は田舍に住んて居る不束者てすが繪葉書の交換をいたして下さいませんか（茨城縣稻敷郡阿見村大字大室大崎賀方內野愛子）○我が親愛なる本誌愛讀の諸兄姉等よ何卒不束の者と思召して永久に御見棄てなく御交誼下さる樣偏に願ます一時的の御方は固く御斷り申ます（常陸國稻敷郡舟島村竹來松本美泉）○私は十三歲て戀しい〱母に別れてから淋しく悲しく片田舍に世を送つて居りましたが先々月から女子文壇の友となりました諸姉上樣哀いと思つて交際を願ひます（長野縣小縣郡青木村本出みつ子）○誌友の御惠み深き諸姉樣、寫眞、エハガキを御送り下さいな、御返禮には、妾の中學生、新文林文學世界にて必ず御送付致します。（丹後中郡五十河村字久住河島美年子）○どうぞ以後誌友として末永く御交際を御願ひ致します（佐賀縣佐賀市材木町一五九大坪方秋月てる子）○諸姉樣の內て音樂と歌留多に深く趣味を以て居る方があるならば何卒親密に御交際の程を願ひます（豐後安岐局區內小川町宮野郡月女史）○妾は今年十七て女學校三年てすが不幸てお母さんに死なれましたから內に居ることになりましたどうぞ繪はがき玉章の御交換おねがひいたします（信州東筑摩郡坂非村櫻現原露見子）○私は皆々樣のお便を唯一の慰みとして居ります故自然風、壺及び地方女學校の風情を御送りの程私も廻らぬながら御返書は致します又御寫眞の交換もね（岡山縣邑久郡朝日村大字西片岡榎本悅子）○誌上の皆樣繪葉書交換御願申ます そして御作の和歌俳句一首以內御送り下さる樣玉章の交換も願

願致ます（岡山縣玉島町信濃橋通り坪井小美榮）◯妾は尾張で名高い小牧山の麓に住んで居る田舎者ですが諸嬢の中で繪葉書に俳句か和歌を一二句づゝ書いて送つて下されば恥しながら同じように書いて御返葉致します（尾張東春日井郡豐來村田樂鈴木詠子）◯皆様私は此度高等女學校を出た不つゞかものですがみな様の御仲間入りをさして頂きますから御交際下さいませ私は口の御上手な方は大嫌いです故それを御承知と云へば口はゞつたい様ですが幾久う御交り下さいまし（和歌山市茶屋町青木誠方照子）◯妾は北信の山中に住む者ですが何卒之から諸淑女様方御交際を願ひますそして繪はがき寫眞の交換を致とう御座いますから續々送て頂戴きつとお返し致します（信濃下高井郡往郷村庚小林しん子別名笑子）◯誌友の姉君様私は南總の鹿野山の麓に住んで居る處女で御座居ますから何卒末永く御交際を願ひます（君津郡周南村六手能城久子）◯誌友様はじめお懐かしい誌友のお姉様方お變りありませんか私は今度都合上皆様と御交際をやめなくてはなりませんのけれども誌上では度々お目にかゝり升よお手紙下すつた姉上様方に深くお禮を申上ます（茨城縣東茨城郡中妻村四十六番地中山道江）◯いと戀しき古郷を遠くはなれ去りて、今は八甲田嵐の吹き荒る稲生町に來て學びの庭に通ふ身となりぬ、さはれ、淋しく暮す我をあはれと思ひ、はがき、玉章をください、必ず返事は差上げます、神かけて願ふよ、さよなら、（青森縣上北郡三本木村字稲生町七丁目高巻りさ子）◯一時的當座の徒然を慰むる爲でなく嬉しい朝にも悲しい夕べも一度友情を結んではいつまでも變らせ給はぬ御方と永遠に睦まじう御交際が致し度う御座います（福島縣岩代國耶麻郡喜多方町新道小學校角岩田はま子）◯誌友の皆様繪はがきや玉章の御交換をら願ます（山形縣最上郡新庄町五號、石川咲子）

圖書換談

◯私の手許に魔風戀風全部不用になつて居ります諸姉様の内で青春全部お持ちの方は御交換下さいませんか男子の方でも宜しい（岩代國河沼郡飯谷村大字藤小瀧いわ子）◯貴嬢諸子の中で島崎藤村著藤村詩集橋本青雨譯ゲーテの詩小說片戀、戀ざめ、金子薫園著和歌入門等御持の方は私の持つて居る幸田露伴著藥末艸、美文作法、美文綴纂古今發句五百題、俳燕集二千題俳地方雜誌は約二百部位有孰れにても交換致し度早速私のも送ります（常陸國浮島村中江一五五村野靜江）◯私の手許に女子文壇二の卷八號からのと、少女世界少女界など澤山不用になつて有りますが、未使用の美人畫葉書と御交換下さいましな、お望みのものを葉書で御申越し下されば こちらから先きにお送り致します 但し三枚以上お惠み下さる方には手製の栞、亦は花カードなどを添へて差し上げます（埼玉縣秩父郡三田川村近藤とく子）◯諸姉様よ妾方に不如歸戀と露仇浪活幽靈原田甲斐奴の小萬双子美人美文の資料女子美文の資料などが有ますのよ皆様の内にて多情多恨紅葉全集乳姉妹魔風戀風青春夏子などの不用が有ましたら交換して下さいな（神戸市下山手通六ノ一六〇山田方水野輝代）◯皆様の内に文藝倶樂部及如何なる小說にても宜しいんですが御不用の御方は左記書籍と御交換を願ます 到着の五日以内に返本致します女の一心、花山花人、人の妻、歌枕、女華族、日本美人史、巨人之自白、夫さだめ、脚本センナヅンナ、戀人、戀夫婦、男女の研究、愛の解剖、百合子、波子、うき樂、十七八、心中くらべ、有情無情、女ごゝろ、其他數種（靜岡市在大里村下馬渕森本興三郎様方杉山じゅん）

剽竊詩文の注意

●●●●八號の分　◯長野、紅菊子。新體詩秀逸「病床にて」は二月中の信濃每日新聞所載紅ばら子の『病床吟』の一節を

●●●●七號の分　◯信濃、青木まさ子。俳句四等「繪日傘の」は昨年七月の『中學世界』青山清溪氏の作を　◯伊勢、越村文枝。實用文秀逸「愛兒を喪ひたる友に」は女學世界增刊『花にしき』より　◯千葉縣、池上信子。新派和歌秀逸「梟は」は『秀才文壇』六卷六號より

●●●六號の分　千葉縣、白石光子。短篇小說「妻の心」は昨年六月中萬朝報所載徹光氏の『誠妻』を　◯横濱、清水千秋子。お伽噺「針供養」は二三年前の『少女界』より

●●●五號の分　秋田縣、大越ひで子。新歌謠秀逸「仲のよいのは」は本誌二卷十六號羽後みさを子の作を

右、何れも剽竊とみとむ。

▲今回注意を與へられたる諸嬢は◯長野市、紅ばら◯岩手縣、及川女◯上毛、飯島喜代子◯岡山縣、たづ子◯弘前、湖汀女◯上總、淺子◯すみ女

文壇餘興　小說談（課題）

小說全盛の現代に在りて諸孃の小說に就ての談話を聞くのも亦面白からうと思ひます

▲愛讀の小說▲誰の作つた小說が好きか▲昔の小說では何が最も面白いか▲ある小說を讀んだ時の感想▲不如歸、金色夜叉等一般に行き渡つてゐる小說に就いての談▲小說を讀む論▲小說作家の評論▲感化されたる小說▲嫌ひな小說の事▲新聞の小說に就いて▲講談に就いて▲初めて自分が小說を作つた時の動機▲小說の挿繪又は書物の體裁等に就いて▲小說を愛讀するやうになつた動機▲有名なる小說作中の人物を評すゝ▲小說と芝居▲小說を讀む時の癖▲其外まだ幾許もあるでせうから皆樣で考へた上おもしろい談話を聞かせて下さい▲原稿は十六字詰十五行以內とす▲文壇餘興小說談と書添えて置くこと、外に題はつけずとしよし▲紙上では雅號でも差支なし但し原稿の片隅へ住所本名を認め置くこと▲賞品は改正の規定に據り一等一圓以下三人とす

▲〆切は七月二十日

雜報

○臨時增刊 文壇の光

春季臨時增刊「文壇の花」を愛讀されたる諸孃は、秋季臨時增刊「文壇の光」の豫告を見て發刊の日を渴望されん事と信じます、懸賞の方法其他は別項廣告御覽の上奮つて投稿されんことを勸誘します。

○東京に雹降る

新聞でも承知されたでせうが六月八日午後四時頃東京市中に大降雹がありました、大きなものは直徑一寸以上二寸三寸位のものが降り、木の枝を飛ばし、花を折り、傘を破り、誠に近來の珍事でした。

○夏期の休暇

都下の各女學校も愈よ夏休みの時節になりました、歸省して樂しきホームの人となる學生もあるでせう、年々繰返されたる問題ですが夏期休暇を如何に利用すべきかと云ふに、利用しないのが最も名案でせう、利用しないから休暇です、利用するのは平生の時間てゝ、夏期休暇中は宜しく心身適度の娛樂をなして健康を保つべきものでせう。

明治四十一年六月廿八日印刷
明治四十一年七月一日發行

不許轉載

定價金拾錢

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者　野口竹次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者　石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

（對本製本）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

（東京秀英舍印刷）